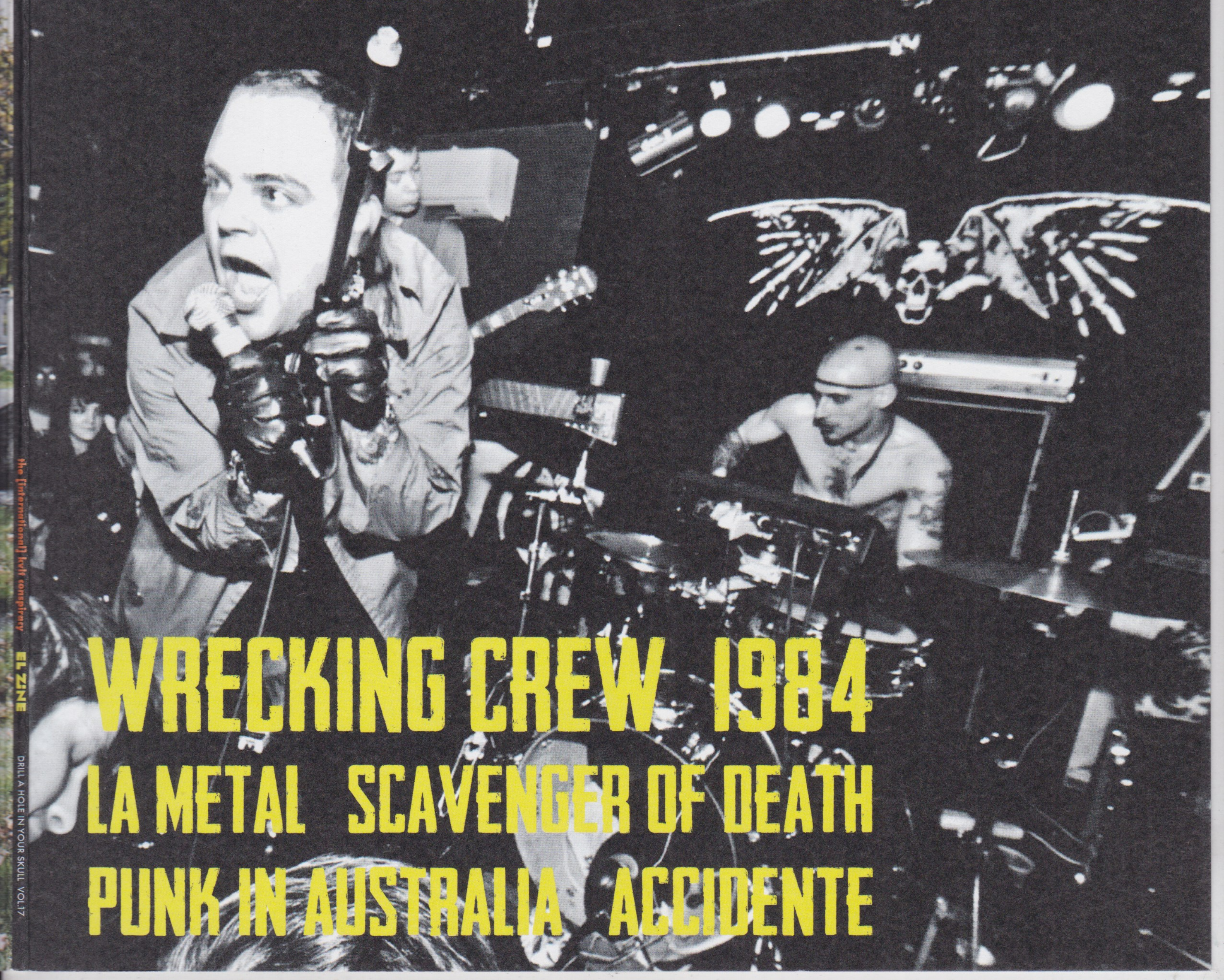
DRILL A HOLE IN YOUR SKULL VOL.17

EL ZINE

the [international] kvlt conspiracy

FEATURE ARTICLES ON

LATINO PUNK SCENE + NYC RAW PUNK NOW!



WRECKING CREW 1984

LA METAL SCAVENGER OF DEATH

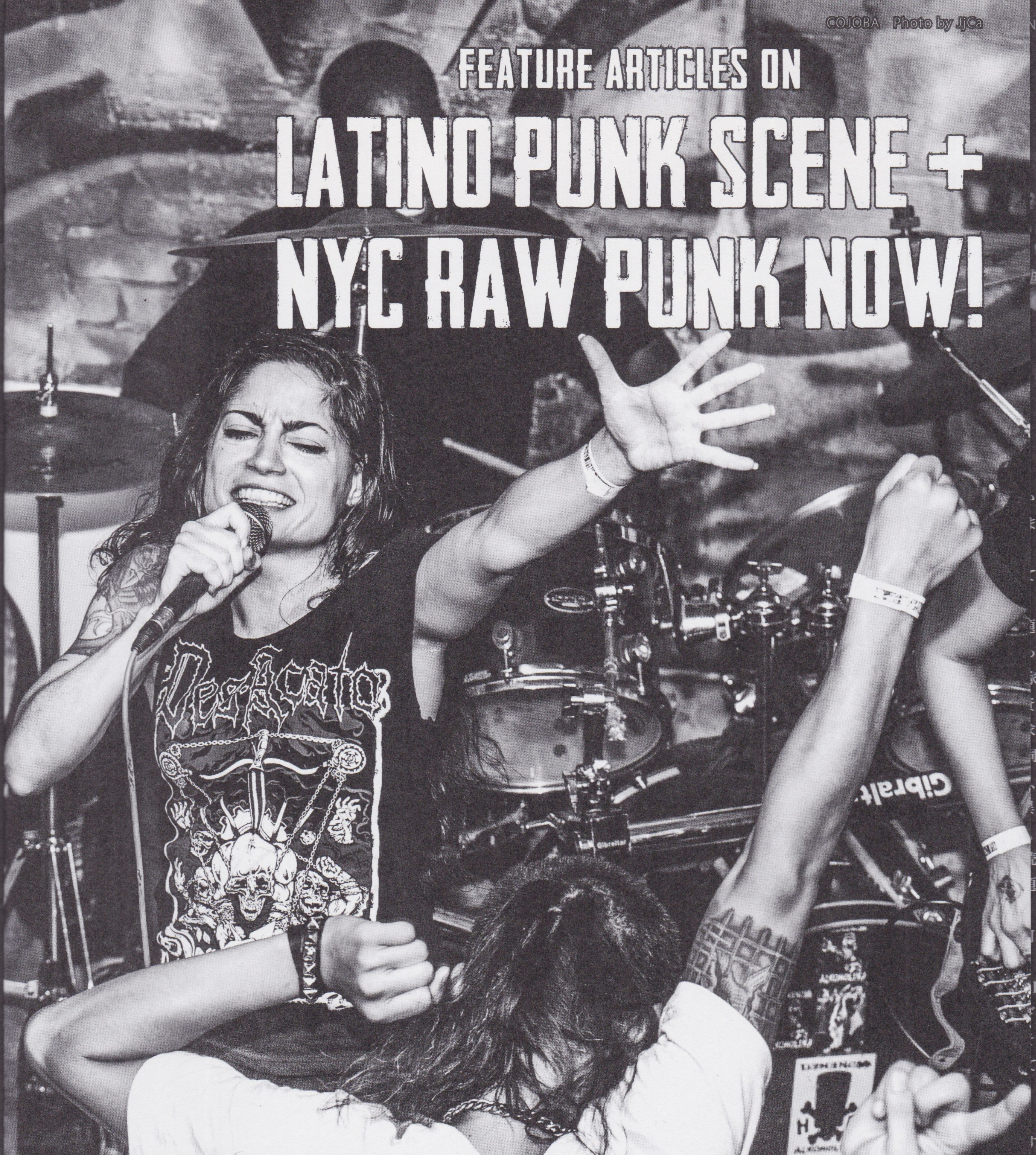
PUNK IN AUSTRALIA ACCIDENTE

the [international] kvlt conspiracy EL ZINE DRILL A HOLE IN YOUR SKULL VOL.17

CONTENTS VOL.17



First Cover : L.O.T.I.O.N. Photo by Martin Sorrondeguy Second Cover : Artwork by Alexander Heir Fourth Cover : DISCHAKA Photo by JjCa



COJOBA Photo by JjCa

FEATURE ARTICLES ON LATINO PUNK SCENE + NYC RAW PUNK NOW!

今号は、現在進行形のラティーノ・パンク・シーンとNYCパンク・シーンの二大特集をお送りしたいと思います！
前号でLAのラティーノ・パンク・ロック・バンド、GENERACION SUICIDAにインタヴューした際、「この記事をもっと広げてラティーノ・パンク特集にできないかな？」というアイデア自体はあったのですが、結局よい切り口を探り当てることができずに単独記事としての掲載になったのでした。
前号の発売から暫くして、アメリカ/ニュージャージー在住の読者であるヒロシさんから、「GENERACION SUICIDAのインタヴュー面白かったです。もしラティーノ・パンクにご興味あれば色々と紹介できますよ」とのメールが！これぞ天のお導き！
こうしてヒロシさんのご協力により、ラティーノ・パンク・シーンのド真ん中で活動中のバンド/人物にコンタクトが取れ、更にはラティーノD-BEATバンド、DISCHAKAのメンバーがNYCシーン・レポートを寄稿してくれるとのことで人脈は枝葉の如くドンドン広がっていき、今回、二大特集の形でご紹介できる運びとなりました。
最前線の情報満載の"LATINO PUNK SCENE & NYC RAW PUNK NOW!"、とくとご堪能ください！


AGONIA Photo by JjCa





SANTIAGO

FROM AGONIA

NYC LATINO PUNK FEST

EL PARCHE PUNK

ラティーノ・パンク・バンドが一堂に介したイヴェント、NYC Latino Punk Festを2014年に企画したメンバーの一人であり、バンド/AGONIAのメンバーにしてレーベル・コレクティヴ/El Parche Punkの一員でもあるSantiagoへのインタヴューを、まずはお送りします。"ラティーノ/移民のパンクスとして生きる"こと、そして彼らを取り巻く環境。フツーに日本で暮らしていたらまず無縁であろうことにも、"パンク"というたった一つのキーワードで繋がれる、知ることができるというのが、今更ながら面白いと思います。

そうして本稿に続いては、NYC Latino Punk Fest当日のフォト・レポートをお楽しみくださいませ!

■生まれはどちらですか?どんな子供でしたか?

「僕はコロンビアのイバゲで生まれたんだ。国の中ほどに位置する小さな都市なんだけど、パンク・ロック・ミュージックと出会うのに15年もかかるほど隔絶されたところだったよ、ハハハ。皮肉なことにイバゲはコロンビアにおける音楽の中心地なんて呼ばれているんだけど、それは民俗〜伝統音楽に限った話しでね、当時は現代的な音楽について知ったり演奏したりするのなんて困難なことだった…。

僕の幼少時代はそんなに悪くなかったよ。宣戦布告なき内戦が100年以上続いていたり、麻薬カルテルの抗争や極限に達した社会不安、ストリート・ドラッグ、ギャング、汚職警察といった、第三世界で散見できるありとあらゆる問題があった割にはね。…だけどとにかく、これは自分たちでどうにかしないといけないことだからね。この件についてみんなの心を消耗させたくないんだ」

■初めて聴いたパンク/ハードコアはどんなバンドでしたか?現在に至るまでどんなバンドを聴いてきたのでしょうか?

「僕が思うに、初めて聴いたのは『RODRIGO D NO FUTURO』というコンピレーションだったよ(DEXKONCIERTO、MUTANTEX、P-NEなどといったバンドを収録)。…90年代の初頭だったかな、自分のミュージック・スタイルってやつを模索していたときに、友人たちと一緒にバンドを始めたんだ。僕たちはできる限り反抗的でスゲー喧しいのをやろうとしていたんだけど、目標とすべきお手本みたいなものを持っていなかったんだ。今でも覚えているんだけど、ある日、ボゴタ(※コロンビアの首都)から休日を利用して遊びに来たメタルヘッズが僕たちに言ったんだ。お前らのやっているのってパンクだぜ、ってね。この都市にパンク・バンドがいたなんて知らなかったよ、ハハハ。それでメタルヘッズに何か良いバンドがいないか訊ねたら、このコンピのB面は全部パンクだよって教えてくれたんだ!!こうして遂に僕はパンク・バンドとその叫び、騒音を見つけ出したってわけ。それからはもう可能な限りパンクとハードコア・ミュージックを探し求めまくったね。

多くのバンドを聴いてきたしその全てを覚えているけど、常にお気に入りのバンドを挙げるならHPHC、DEXKONCIERTO、B.S.N.、DEMENCIA LIBERTARIA、CRIMEN IMPUNE、GRITO DE INSOLENCIA、KRHかな。コロンビア以外のバンドならNARCOS

IS、ATTAKE FRONTAL、AUTOPSIA、LOS KK、ANARKIAといった80年代のペルーやチリのパンク/ハードコア、あとIMPACTやUART PUNK、WRETCHED、INFEZIONE、INDIGESTIといったイタリアのバンドも。南米なら@PATIA NO、MIGRA VIOLENTA、RIGIDEZ CADAVERICAだろ。パナマならKDH。もうリストを書くのは大変だよ…。スペインや日本、ドイツ、アメリカのバンド名も挙げなくちゃならないしね、ハハハ。リストを書き終えるのは無理だよ、ハハハ」

■あなたのバンド、AGONIAについても聞かせてください。

「AGONIA(英訳するとAgony)は友達同士で始めたバンドで、始めてちょうど20ヶ月くらいになるかな、ハハハ。だけど僕の生活そのものになっているよ。サウンドはロウでヤケクソ、そしてダークな感じかな。歌詞の内容は現実的なことだったり、怒りからくる抗議、そして悲しみといったことだよ。昨年、2本のテープを出していて、一本目がスタジオ・デモで2本目はライヴ音源。基本的にニューヨークのアンダーグラウンド・シーンかラティーノ・パンク・シーンで活動しているけど、東海岸の都市のいくつかでもやったことがあるんだ。それとカナダでショーをするために、短期間の西海岸ツアーも昨年行ったよ。今年はレコードを出す予定もあって、あと多分外国でもショーをやるだろうね。何が起こるか見ててくれよ、ハハハ」

■どうしてNYC Latino Punk Fest 2014を企画したのですか?契機となったのは何でしたか?

「そうだな、LPFは友人同士が集まって企画されたんだ。みんなそれぞれに理由を抱えて集まったんだけど、主だった理由が一つある。それはシーンとして自分たちが協力し合い、次の段階への一歩を踏み出す、ということさ。NYCでは数多くのパンク・フェスティヴァルが毎年開催されている。いくつか有名なフェスもあるけど、そこに足を運んだところで地元のラティーノ・パンク・バンドを見る機会はごく僅か、もしくは皆無だよ。フェスの企画者たちは僕たちのことを知らないか、僕たちのやっているバンドになんて興味を示さないからさ。何とも言えないね…。だけど僕たちの存在を周りに知らしめるための最良の手段を、DIYなパンクスなら知っているはずだよ。そう、自分たちでやればいいんだ!同時に僕たちは共有し、創造し、騒いで、友人たちと一緒に楽しむことができる。君たちが何かを始める過程と全く同じさ。それはバンドであったり、ファンジンであったり、レーベルであったり、アートなどであったりね。僕たちは世界的なDIYネットワーク・フレンドシップに触発されてこのフェスを企画した。そして、僕たちのコミュニティをシーンとして確固たるものにするためのベストな方法は、お互いに助け合うってことさ。この助け合いのエナジーによって素晴らしいことが成し遂げられると知ることができたね」

■バンド選びはどのように?フェスの理念は何でしたか?

「フェスの出演バンドについて考え始めたときのことなんだけど、僕たちはまず地元のバンドから着手した。声をかけて廻ったところ一日だけで8つものバンドがこのフェスに賛同してくれたんだ。それから、以前にNYCにツアーで来たことのある州外の仲の良いバンドをリスト化した。今も活動中のバンドか、もしくは復帰してもらいたいバンドをね。だからLPFはフレンドシップで成り立っているのさ。

次いで、僕たちがNYCで見てみたいのと同時に、フェスに興味を持ってくれそうなアメリカ国内のバンドを誘うことにした。この時点で地元のバンドとアメリカ国内のバンドで15バンドも集まっていたよ。この後は国外のバンドについて検討し始めた。国外にいる友達のバンドと、僕たちが見てみたいと思うバンドを同様に誘っていって…当初は2日間のフェスを計画していたんだけど、このフェスの宣伝を始めたら、出演したいってバンドからのメールが送られてくるようになってね、それでもう一日足して3日間のフェスにすることにしたんだ。もちろん出演した全バンドがフェスティヴァルの理念に沿っているよ。その理念とは、このフェスは反資本主義の非営利且つDIYなものであり、反人種差別、反性差別、反同性愛差別であるってことさ。そして経済的な支援やスポンサーなしに、僕たちのフレンドシップと助け合い、情熱とエナジーが基礎にあるってことだね」

■実際にやってみた、フェスの感想を聞かせてください。3日間とも順調に進みましたか?

「うーん、みんなが楽しんでいる姿を見たり、昔からの友人が新しい友人を得ている様を見たり、僕たちの努力と労力が期待していた最上級の結果をもたらしたり、そしてゼロから始めたこのフェスが成し遂げられたことの満足感や喜びを、言葉で説明するのは難しいよ!でも、とにかく最高だった!引き起こしてしまったミスや不便に感じたこともあったけど、それでもフェスは成功したと思っている。どの日も順調だったと言いたいけれど、まぁ、何から何まで全てがそうだったわけじゃないけどね、…ハハハ。どの日にも困難が山積みで全く容易じゃなかったけど、それらのことが自分たちを鍛えてくれるし、その経験を人に話すこともできると思うんだよ」

■NYC Latino Punk Fest 2015は企画していますか?

「その件については話し合っているんだ。確か





に僕たちは再びやらなくちゃならないだろうね!だけど今のところ今年もできるかどうかはまだ不明なんだ…。昨年のフェスの準備に僕たちは丸一年を費やした。もし今年も開催するならば、今からだとおよそ7ヶ月の時間が僕たちには残されていることになる。それでも以前より僕たちには経験と知識があるからね、やるとなったら昨年のフェスより、より良いものになるだろうと確信しているよ!」

■ニューヨークのラティーノ・パンク・シーンについてはどう考えていますか?バンドやコレクティヴ、レーベル、ディストロ、会場などについても知りたいです。あなたはCoko(Koko)やChris、Nicolas、Naylampといった興味深い人たちのことも教えてくれましたよね。

「あくまでも僕の見解だけど、ニューヨーク/ニュージャージーのラティーノ・パンク・シーンは、アメリカの他のラティーノ・シーンとは別物だと思うんだ。何せニューヨークは巨大な都市で、ここには巨大なパンク・シーンが存在しているからね。だけどラティーノ・パンク・シーンも同様に大きいかっていうと、そんなことはない。このシーンはラティーノ・アメリカンという移民がその大部分を占めているからね。そのためシーンはとても不安定なんだ。一気に成長することもできるけど、縮小してしまうこともある。移民のパンクスにとっては異なる言語を話すこの狂気じみた資本主義国家で生き抜き、そして順応するのは簡単なことじゃないよ。大半の場合において、正式な書類なしには普通の生活を送ることすら困難なんだからさ。真っ当な報酬を得られる仕事も、車を運転することも、住む場所を借りることも、表立って意見を述べることもね。だから僕たちのシーンも、アンダーグラウンドの更にアンダーグラウンドな存在なんだよ。ニューヨーク/ニュージャージーのラティーノ・パンクスは世界へ出ていかないし、毎年のように新しいレコードをリリースすることもない。その主たる理由はこれさ…。他のシーンにいるやつらがイージーにやっているなんて言うわけじゃないよ。だけど、この国で暮らし、パンクスであるということはそんなに難しいことじゃない。ここでは金も稼げるからね。ただし、移民にとってはそんなことですら困難がつきまとうって話しさ…。それでも僕たちはいつだって前進するのみだけどね!

バンドについての話しをしようか。DEMENCIA ALKOHOLIKA、REBUSCHAOS、DISCHAKA、ATRUTH、LAKRAS、KANTUTAなどといったバンドはシーンで今現在、活動中で、お互いをサポートし合って一緒に頑張っているよ。El Parche Punkレーベル・コレクティヴは、活動を始めたばかりの地元のバンドや、デモ音源のリリースをするのに助けを求めているバンドをサポートするという使命を帯びている。このコレクティヴ、そしてシーンにとっても、とても重要且つ活動的なメンバーが2人いるんだ。それがNo Ego DiscosのNicolasとDeskabezado RecordsのCokoだよ。Nicolasはバンドの流通やプロモーションを手伝ったりしていて、CokoはDIYなレコーディング・スタジオを持っているから、そこでバンドのレコーディングを手伝っているんだ。それからNaylampはDiscos Huayno Amargoというレーベルを長年に渡り運営していてEl Parche Punkを僕たちと一緒に立ち上げたやつさ。ChrisはEastrevというコレクティヴを始動させてショーのブッキングをしたり、The Swampっていうパンク・ハウスを管理している。そこはDIYな会場で、ニューヨークのアナーキストやアンダーグラウンド・シーンのバンドが利用しているんだ。それとニュージャージーのAldoについても触れないとね。彼はNastycore Recordsというレーベルを運営していて、ショーのブッキングをニュージャージーでやっているんだ。他にも多くの人たちが同様にシーンをサポートしているよ。とにかく僕たちは歩み続けるだけさ」

■ラティーノ・パンクのアメリカにおける歴史についても知りたいのですが、始まりって知っていますか?70年代?

「いや、この国のラティーノ・パンクの歴史となると全然分からないな。僕が移住してきたのが15年前のことだしね。僕が知っている限りだとそれは当時、カリフォルニアで始まったと思うんだけど、確かじゃないね…」

■アメリカ国内において、ラティーノへの差別というのは感じますか?GENERACION SUICIDAにインタヴューしたとき(vol.16に掲載)、彼らは差別を感じると言っていたのですが。

「その通りさ!完全に同意するね!この国には差別に関する壮絶な歴史がある。それはラティーノに対してだけではなく、ありとあらゆるマイノリティーと呼ばれる人々に対するね。移民やその子供たちは感じているはずだよ、差別のスケールや方法は違ったとしてもね!」

■では、あなたにとってパンクとは何ですか?

「パンクを言葉で説明するのは難しすぎるよ。僕たちの内側にある何かで、エナジーを漲らせるものであったり、自由と情熱の強い感情であったり、人生の逆境に立ち向かうために必要なアティテュードを与えてくれるものだったりね。あるときは君を血気盛んにするものであり、またあるときは、聴けば全てを晴々とさせてくれる騒音。あらゆる反抗を内包する音楽を超えた何かであったり、君の性格を決定づけるものだったりね。一度パンクスになったら、やめられるわけないさ」

■今後の目標はありますか?

「そうだな、今、僕はレーベル作業をしていてレコードを年内に何枚か出す予定だよ!あとは、フェスティヴァルをやる機会があればと願っている…。AGONIAでどこかにツアーにも行きたいけど、まぁ、何が起こるか見ていてくれよ…」

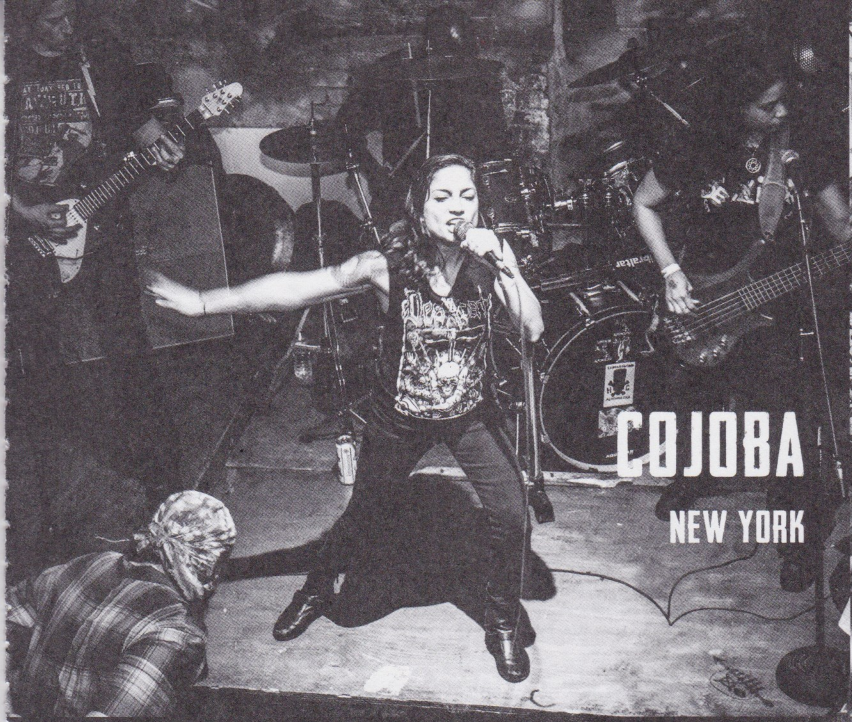
■インタヴューさせてくれてありがとうございます。最後に読者にメッセージをお願いします。

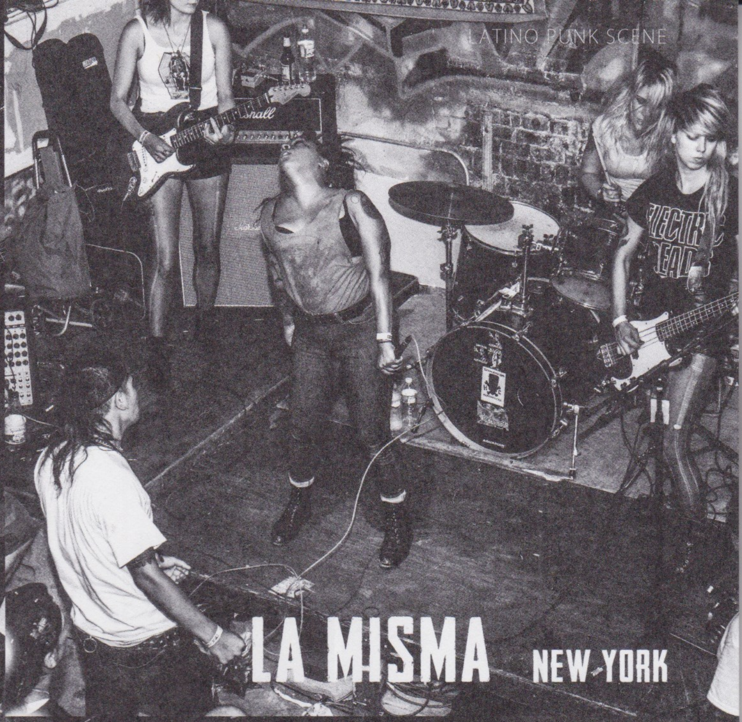
「まずはケンジ、僕たちのシーンに興味を持ってくれて、そして僕たちのやっていることを日本に伝えてくれてありがとう!

日本の読者のみんな!読んでくれてありがとう。フェスについての情報がもっと必要だったら、www.nyclatinopunk.wordpress.comを見てもらいたい。El Parche Punkについてはwww.parchepunk.tumblr.com。AGONIAについてはwww.agoniapunk.tumblr.com。

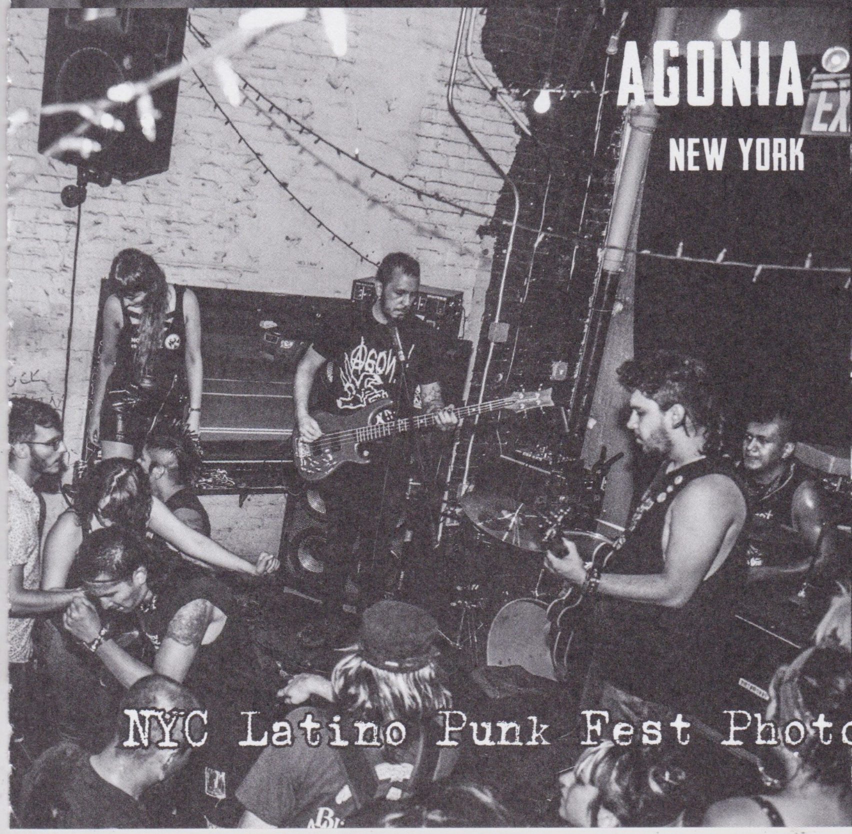
楽しんでいこうぜ!そして活動を続け、団結しよう!ノイジー&ロウ!バイバイ!」

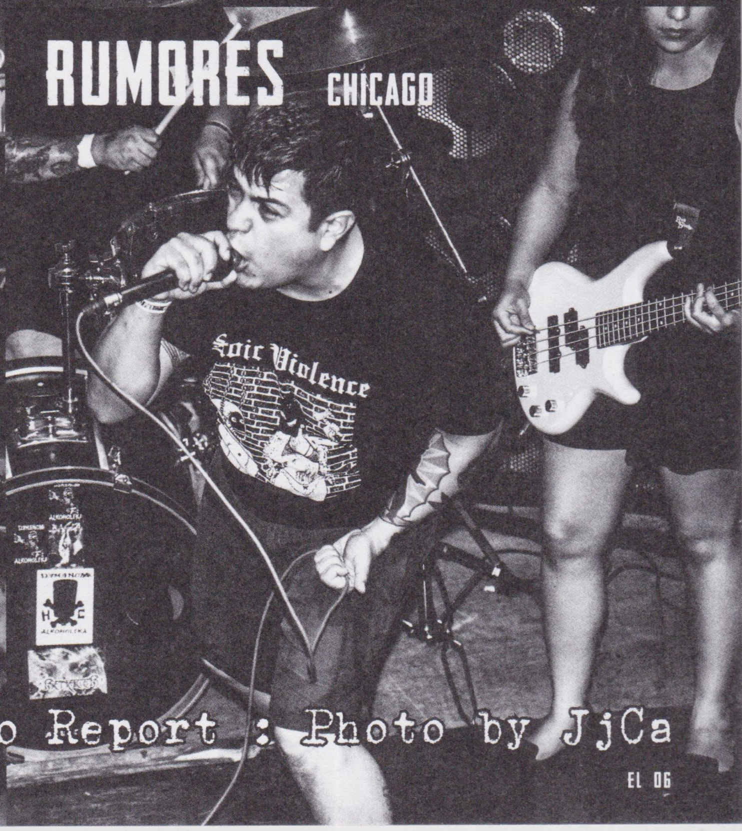








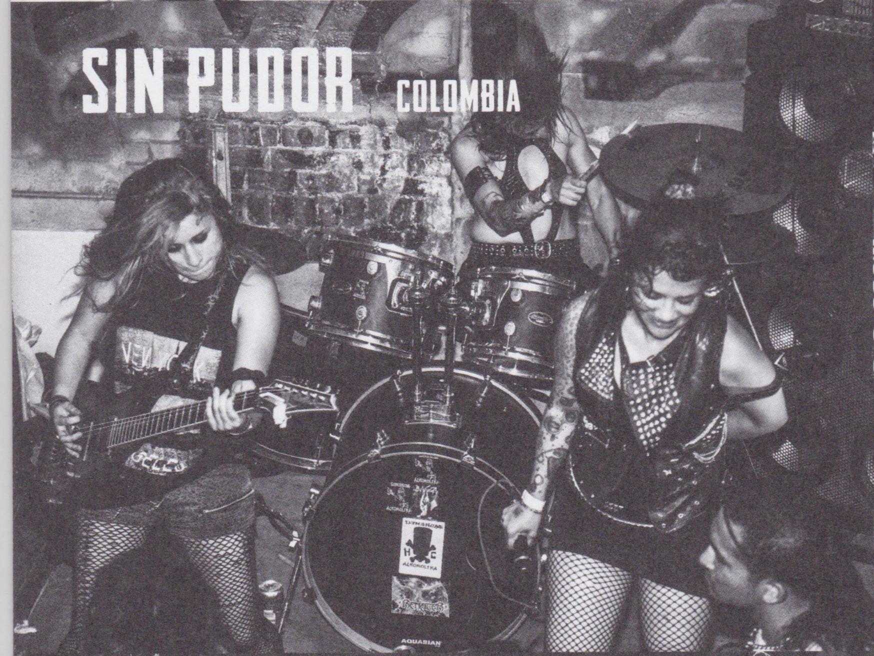




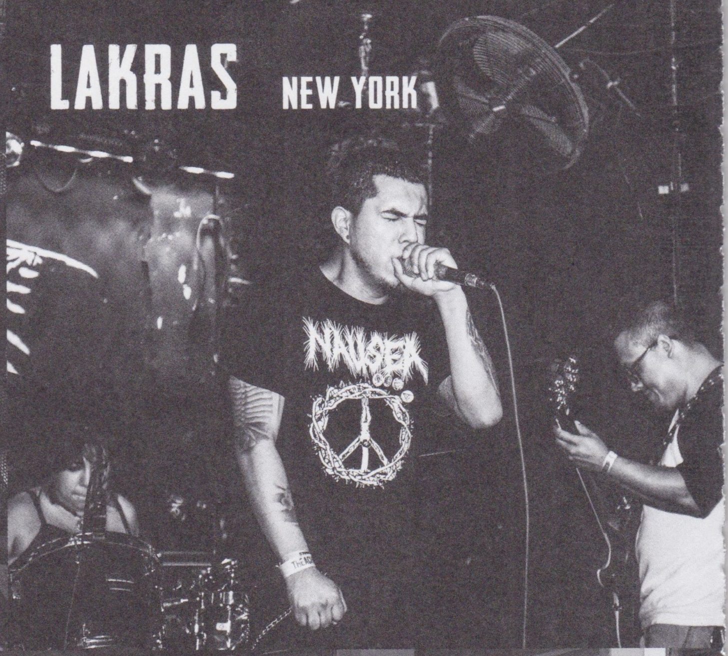
NYC Latino Punk Fest Photo Report : Photo by JjCa



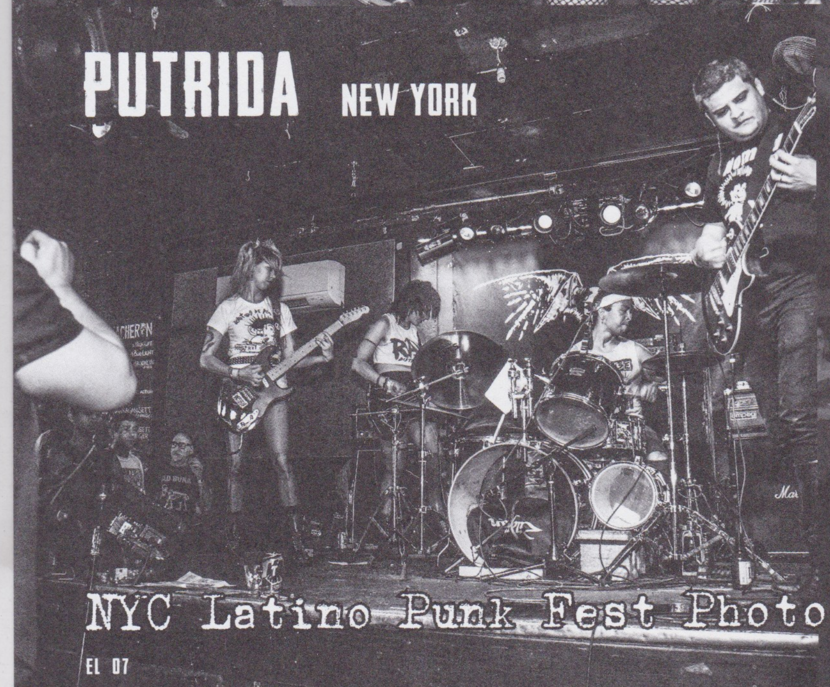
JUVENTUD PODRIDA
PANAMA



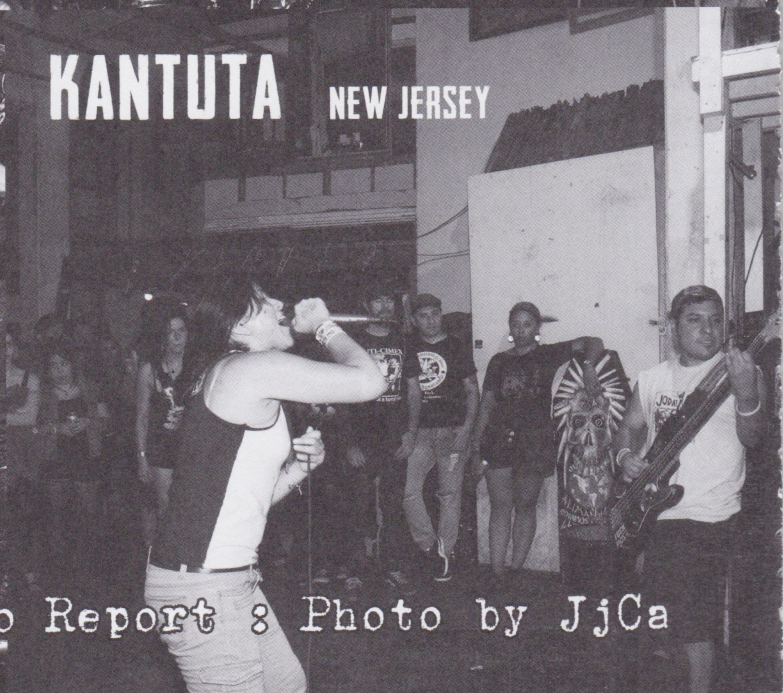
SIN PUDOR COLOMBIA



LAKRAS NEW YORK

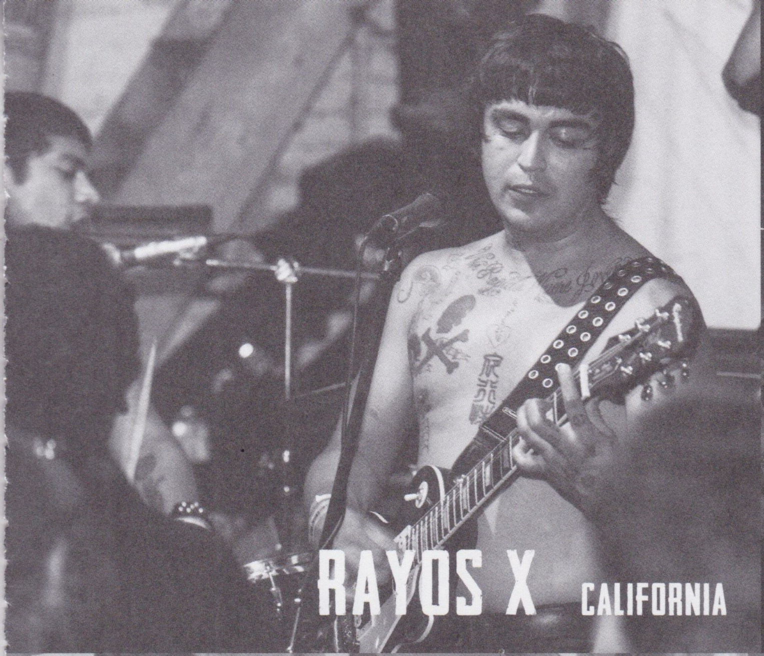


PUTRIDA NEW YORK



KANTUTA NEW JERSEY

NYC Latino Punk Fest Photo Report : Photo by JjCa



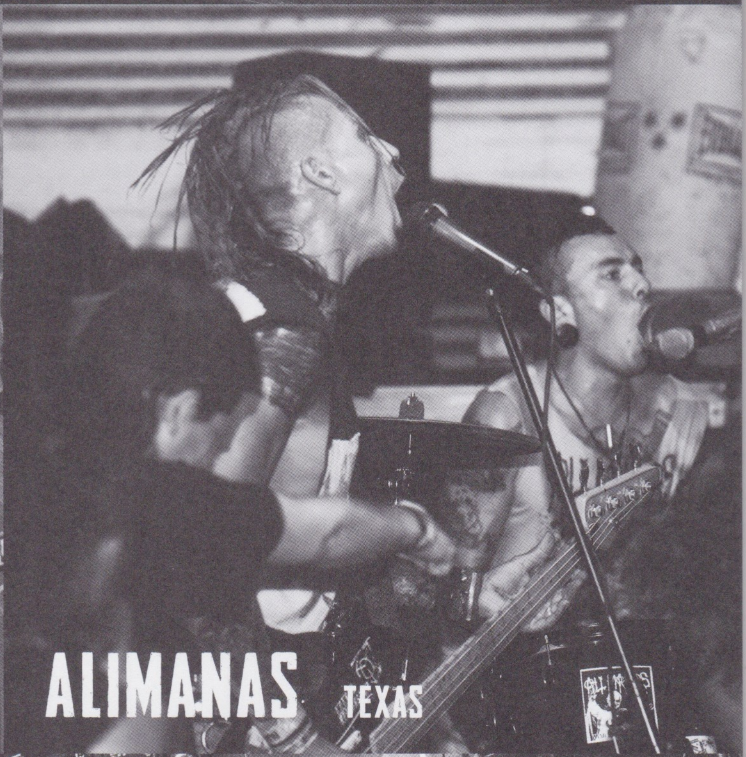
RAYOS X CALIFORNIA



AUSENCIA CALIFORNIA



CRIMEN MEXICO



ALIMANAS TEXAS



PORKERIA TEXAS

NYC Latino Punk Fest Photo Report : Photo by JjCa



NAYLAMP

FROM AMARGO HUASIPUNGO DISCOS HUAYNO AMARGO EL PARCHE PUNK

Santiago～フォト・レポートに続いては、ラティーノ・バンドなどのアートワークを手掛けているNaylampへのインタヴューです。「…ダレ?」と思った方も多いかもしれませんが、ラティーノ・ハードコアが好きならば彼の作品を見た瞬間に「あのジャケを描いた人か!」と気づくハズ。そう、LOS CRUDOSやREVOLUCION Xの、あの特徴的なイラストを描いていた人物こそがNaylampです。味わい深くも叛骨心に溢れたアートワークと、含蓄のある言葉の数々。これまで謎のベールに包まれていた(…と思う)彼の素顔が此処に!

■生まれはどちらですか?パンク/ハードコアとはどうやって出会いましたか?

「ペルーのリマで俺は生まれたんだ。それでアメリカに移ったのが1989年のことだね。ペルーにいた頃、俺はメタルヘッズなガキだったよ。オブスキュアなメタル・バンドを可能な限り手に入れるのに夢中だった。

アメリカに移住してから一度、俺の家族の友達であるペルー人と会ったんだ。そいつはパンク/ニューウェイブが好きなガキでさ、そいつが俺にMINOR THREATやNARCOSIS、EUTHANASIAに世界各地のパンク・バンドを収録したMichel Boardのワールド・パンク・コンピレーションなんかを教えてくれたんだ。ブッたまげたぜ!!!その荒れ狂ったエナジーにな。徐々に俺のメタルのテープとレコードは、NAUSEAといったクラスト・パンク・バンドやNAPALM DEATH、SORE THROATといったノイズ・コア、グラインド・コアの音源とトレードされるようになっていったよ!ペルーに旅行で戻れるようになると、KAOSといったペルーのバンドのデモを手に入れるようになった!!!マジで衝撃を受けたよ!」

■あなたのバンド、AMARGOを日本の読者に紹介してもらえますか?あなたのバンド経歴も詳しく知りたいです。

「俺が初めてプレイしたバンドはHUASIPUNGOだな。スペイン語で歌うポリティカルなラティーノ・パンク・バンドの中でも昔からやっているバンドの一つだし、まだ活動中さ。90年代初期からLOS CRUDOSやEMPERISIMO、DOGMA MUNDISTAなんかと一緒に活動してきたんだ。こういったバンドは間接的にだけど強い影響を与えていると俺は思っている。アイデンティティ政治(※主に社会的不公正の犠牲になっているジェンダー、人種、民族、性的指向、障害などの特定のアイデンティティに基づく集団の利益を代弁して行う政治活動[ウィキペディアより抜粋])をパンク・シーンにもたらしたという点でもね。シーンにラティーノがいたっていいし、母国語で歌ってもいい、それは恥じるべきことなんかじゃないってね。HUASIPUNGOもそういう間接的な影響を与えてきた。スペイン語は俺たちの第一言語だしそれで歌うのは至って当たり前のことさ。政治について他の言語で歌われても読めないしね。ただ、俺たちのオーディエンスや友達なんかはここアメリカで生まれたラティーノ二世だから、この国の政治なんて目の当たりにしてて充分に理解しているけどな。

AMARGOは、昔のペルーのバンドのデモ音源を7インチ化してリリースしようとしたときに思いついたサイド・プロジェクトだったんだ。当時のバンドのエナジーを自分たちのサウンドで再現したくなってね。歌詞は、俺が母国ペルーについてどう感じているのか、その感情を共有できるような内容さ。住んでいた頃に体験した、あの国の暴力についてだったりね」

■Discos Huayno Amargoはあなたのレーベルですか?El Parche Punkも?どうしてレーベルを始めたのですか?

「俺はParcheグループの一員なのさ!友達と一緒になってテープやレコードをリリースす

るコレクティヴみたいなものでね。Discos Huayno Amargoは俺のレコード・レーベルで、自分の好きなペルーのハードコア・パンクをリリースしている!それと地元のバンドや、俺の大好きな最高のバンド、コロンビアのLUPUSもリリースしているぜ!!!チェックしてくれよ」

■いつからパンク/ハードコア・バンドのアートワークを描くようになったのですか?どんなキッカケで?

「1995年だったかな?!!!!初めてレコード・ジャケットを描いたバンドはREVOLUCION Xの7インチだな。Lengua ArmadaのMartinがリリースしたやつさ。メンバーだったGasparと俺は友達だったんだよ。彼に俺が描いた絵を送ったらえらい気に入ってくれてね!Martinも俺の絵を見て気に入ってくれたみたいで、それでLOS CRUDOSのLPのアートワークを依頼されたんだ。それから俺のバンドHUASIPUNGOのアートワークもたくさんやったよ」

■あなたがアートワークを担当したバンドを教えてください。日本のPEACEFUL PROTESTも担当しましたか?

「あぁ、PEACEFUL PROTESTのアートワークもやったぜ。バンドが好きだという版画で初めて印刷したんだったな。他にアートワークをやったバンドはSIN ORDEN、NO SLOGAN、HUASIPUNGO、LOS CRUDOS、REDENCIÓN 911、El Gritoがリリースしたコンピレーション。あとLatino Punk Fest 2014のアートワークも手がけたよ」

■パンク/ハードコア以外の絵を描いたりしますか?

「うん、労働者や移民の権利に関する組織のロゴを描いたりしているんだ。Retail Action ProjectやLatin American Workers Project、New York Participation Projectなどね」

■絵を描く際の工程についても知りたいです。描くときに大切にしていることは?どうやってインスピレーションを得ていますか?

「心底やっかいに感じている問題から普段は着想を得るんだ。例えば、俺は戦争の絵を大量に描いてきた!アメリカは俺がここに移住してきた1989年から戦争状態にあるだろ!過去11年間、中東では戦争が絶えない。俺は言いたい!戦争がどれだけの命を奪うかということを!その本当の恐怖を共有したいんだ!頭の中でまず最初にイメージを描く。そしてそれをスケッチブックに描いていき、再現していくんだ。元となる原型があるときもあれば、またあるときは、手が動くままに描いていくと、イメージが俺に語りかけてくることもある。そういうときは、イメージが何を言ってきているのか、耳を傾けるのさ。だけどこいつは腹の立つ行為だよ。俺はそこに目的や意義がなければ何かを創りだすことはできないんだ!そしてそれは特に政治的なことなんだからさ」

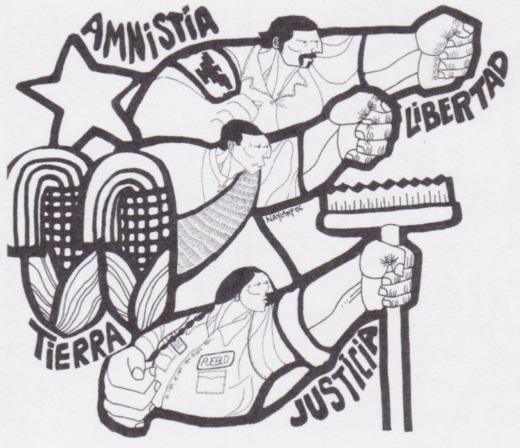
■好きな画家がいたら教えて下さい。

「ラテン・アメリカの壁画家、Diego RiveraとBrigada Ramona Parraだな。あとは革命時の中国の木版や日本の棟方志功といったアーティストもね。最近はアウトローなアーティストに夢中だったり、作品の中に物語性を持たせることにすごく興味があるな。明らかに政治的な作品ばかりを描いてきたけど、もっと腰を据えて絵について学び、見る人のことをもっと考えていこうとしているんだ」

■最近のニューヨークのラティーノ・パンク・シーンについてはどう思っていますか?

「ニューヨークのラティーノ・パンク・シーンはどんどん大きくなっているよ。多くのニュージャージーの友達もここのシーンに関わっているしね。以前のニューヨークのラティーノ・パンク・シーンなんてHUASIPUNGOとHUASIPUNGOの元メンバーくらいしかいなかったんだ。シカゴやロサンゼルスのシーンの方が大きかったんだぜ。だけど当時から、政治的なメッセージをスペイン語で歌うということをしたがっていたラティーノのキッズはたくさんいた。

LOS CRUDOSと俺たちでは、意見が大きく異なっていたと俺は思う(もちろん悪い意味で







はないよ)。ただ、LOS CRUDOSは自分たちがラティーノ・コミュニティで生まれたアメリカ人であるということを理解していた。だけど俺たちHUASIPUNGOは移民だったし、当時はまだカルチャー・ショックを受けていたからな。それでも、当時も今もニューヨークは移民都市さ。

あの頃の問題としては、大規模な白人のパンク・シーンに順応しちまうってことがあった。あいつらにしてみれば、スペイン語で歌うなんて奇妙で滑稽なことなんだ。だけど俺たちはノーを突きつける。これが俺たちのやり方だし、つべこべ言うな、ファック・ユーってね。

今現在、そしてARMA CONTRA ARMAやYOUTH AGAINST、TRAGATELO、KONTRATAQUE、FRONTERRORISMOなどといったバンドが登場してきた90年代以降、シーンは変わったと思う。今じゃありとあらゆる場所、小さな都市にも小さなシーンにもラティーノ・バンドがいて、ニューヨークでは昨年Latino Punk Festを開催することができた。素晴らしいことだね!ここニューヨークのシーンは団結力を増して、みんな協力して物事を進めるようになってきている。ワクワクするね。El Parcheに参加しているSantiagoやキッズたちは、ニューヨークやニュージャージーのバンドを数多く収録したテープ・コンピレーションもリリースしているよ」

■アメリカ国内において、ラティーノへの差別というのは感じますか?GENERACION SUICIDAにインタヴューしたとき(vol.16に掲載)、彼らは差別を感じると言っていたのですが。

「アメリカにおける人種差別が、どのようにしてラティーノに波及しているのかをGENERACION SUICIDAはかなり公平に述べていると思うよ。アメリカの人種差別は根深いし制度的なものでもある。この国の規則や法律、そして政府機関、企業、学校などでは、マイノリティに対するひどく人種差別的な振る舞いがとられているんだ。そして人種差別だけではなく資本主義も同様さ。資本主義は、制度上の人種差別からも利益を上げているんだ。アメリカの刑務所に収容されているのは有色人種(ラティーノと黒人)の若者がその多くを占めている。そして刑務所は人々を収容することによって多額の利益を上げる営利機関でもあるんだ。これが投獄されたり出入国時に逮捕される移民の真実さ(※意味が分からなかったので調べてみたところ、アメリカでは刑務所の民営化が進んでおり、不法入国者を強制送還するのではなく刑務所に収容し低賃金で働かせて利益を上げるというビジネス・モデルが完成しているようです)。君たちにだって奴隷化された歴史があるだろう。第二次世界大戦時における日系人の強制収容所さ。日系のアメリカ人は善良であるにも関わらず、戦時中、強制収容所に送られたじゃないか。これは歴史の授業じゃないってことは分かっているから、もう止めておくよ。だけど俺はいくらでも続けることができるぜ」

■今後の予定を聞かせてください。

「俺のレーベルから新しいレコードを出す予定がある。ALAMBRESというバンドので、メンバーはLOS CRUDOSなどのMartinにTRAGATELOのMike、そしてEsperanzaによる最高のハードコア・パンクだ。あとはおもちゃのデザインにものめり込んでいてね。ニューヨークの北部で何回か展示をする予定なんだ…。おもちゃの頭部分を形成してペイントするのが大好きでね!!!」

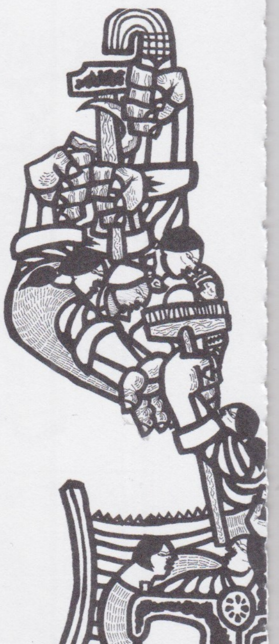
■最後に読者にメッセージをお願いします。

「そうだな、まずは俺にインタヴューしてくれてありがとう。回答を送るのが遅くなってしまったけど、忍耐強く対処してくれたことにも感謝している。すぐにでも日本を訪れて、そこに暮らす友人たちに会いたいぜ!!!」










JUSTICE SYSTEM
JUSTICE SYSTEM
TU HISTORIA
NAYLAMP 00


NUESTRO TRABAJO Y SUDOR, ¡NUESTRO PRODUCTO!
NAYLAMP 97


¡NUESTROS PRODUCTOS PARA NUESTRO PUEBLO!
NAYLAMP 97


NAYLAMP 96

LATINO PUNK BANDS SHORT INTERVIEWS

特集のシメとして、現在シーンで活動中のラティーノ・パンク・バンド:DISCHAKA、DEMENCIA ALKOHOLIKA、そしてLAKRASへのショート・インタヴューをお送りします!



INTERVIEWED:ヒロシ PHOTO:JjCa

■まずはバンドについて教えて。

Rabioso「俺たちはDISCHAKA、小汚い原始的なD-BEATをやってるよ。今のメンバーはHose Ruisuがギター、Verdeがドラム、俺がヴォーカル。俺たちはかなり前にNYCで知り合って、ずっと酒飲んだりつるんでた仲だよ。DISCHAKAを始めたのは2012年かな、はっきりとは覚えてないけど。俺とHoseがスペイン語で歌うD-BEATバンドをやりたくて。俺とHoseは一緒にTRIBAL FORCEってバンドをやってたんだけど解散しちゃって、HoseはVerdeとも"生と死"っていうバンドを一緒にやってたんだけど解散して。それで俺たち3人がちょうど揃ったんだ」

Hose Ruisu「私はホセ・ルイスです。メキシコから来ました(日本語で。彼は日本語を勉強中)。DISCHAKAでギターを弾いています。他にもEN LA OLLAというバンドをやってたよ」

■DISCHAKAっていうバンド名はどういう意味なの?

R「Verdeが考えたんだけど、Chakaっていうのはメキシコの小汚いストリート・パンクスの事。メキシコには本当に貧しい人たちがたくさんいて、パンクスたちには本当の意味で未来がない。これっぽっちの希望もない。そんな生活から彼らは自己破壊的になっていってしまう。ストリートはひどいところさ。そこで生き延びるって事がどれだけキツイ事か俺たちは知ってる。Chakaっていう言葉を使う事で俺たちは彼らと団結する事を示してるんだ。

それと、俺はサーファーなんだけど、サーフィンにShakaってハンドサインがあるんだ。俺にとってDisはもちろんD-BEATへの愛を意味してて、Chaka(Shaka)がサーフィンへの愛を意味してる。D-BEATとサーフィン。最高だぜ!ハハハハ」

■歌詞はどんな事を歌ってる?ちなみに英語で歌おうと思った事はある?

R「ストリート・パンクスの感じている事を歌ってるよ。テーマは個人的に感じる問題、例えば、絶望やNo Future、拝金主義のクソ詐欺野郎、経済の腐敗、クソったれな警察、カソリックの教会とヤツらの薄汚い商売、放射能や汚染されていく地球、戦争、それにドローンみたいな戦争技術の脅威、クソったれな新世界秩序といったとこかな。

俺は勿論英語でも歌えるし、日本語だってイケるよ!でもさすがに日本語は変かな。ハハハ」

■"Policia Criminal"って曲について教えてくれる?この曲はメキシコの市長による集団殺人を歌った曲だと思うんだけど。

R「ああ、この曲はあのメキシコの事件が起きた時に作った。あの事件だけじゃなく、ちょうどその頃アメリカでも、ファーガンソンの事件、NYCでも多くの人が抗議に参加したスタテン島の事件、っていう警察による殺人があった。メキシコの市長は麻薬ギャングを使って学生たちを殺した。腐りすぎててヘドが出るよ。

アメリカだって似たようなものさ。殺人を犯した警官たちは何も裁きを受けない。ヤツラはストリートで抗議してる俺たちを見ても、笑いながら逮捕するだけさ。今回の事件からしばらく経って、NYCで警官が報復として2人殺された。それで警官たちもようやく自分たちがやってきた事に少しは気付いたんじゃないかな。マーフィーの法則だよ。この曲はとてもシ

ンプルで歌詞も最低限しかない。パンクスがすぐに覚えて一緒に歌えるようにね」

■NYCのシーンについてどう思う?

R「NYCのシーンは大きいし、ショーもほとんど毎日どこかしらでやってる。シーンといってもいくつかのグループがあって、ポリティカル・グループ、超ポリティカル・グループ、そこそこポリティカルなグループ、"細かい事は気にしねえよ"なグループ、ラティーノ、クラスト、ハードコアなヤツら、って具合にそれぞれのグループで人が分かれてしまってる。それはそれでいいんだけどさ、俺はもっとみんな一つになって、より強固なシーンを作る為に一緒にがんばろうぜ、って思ってるけど、現実はそうはいってないな。

俺がショーをブッキングするときはいろんなグループが一緒になるようにしてるよ。でもショー自体はうまく行くんだけど、ショーが終わればみんなバラバラ。とは言え、全体的に見ればいいシーンさ。それにラッキーな事に世界中のいろんなバンドがNYCにショーをやりに来るし、もし誰かがバンドを始めようと思ったら誰かしら一緒にやる人間も見つかるしね」

■NYCは好き?物価や家賃は高いし、冬はムチャクチャ寒いけど…。

H「物価は高すぎるよ。それに仕事を見つけるのも難しい。移民にとってはすごくキツイね。状況がすぐに変わるようなこともないだろうし」

R「俺はNYCは大好きさ。歩きでいろんな所に行けるし車もいらない。いろんな国の料理も食べられるし、世界一の美女も揃ってる。ハハハ。ただ金はマジでかかるよ。クソ権力者共に感謝って感じだね。金の面で厄介な事もあるけど、俺たちはギャンブラー兼ハスラーみたいなもんだし、この街でどう生き抜くかも知ってる。NYCは超寒いよ。冬がくるとみんな憂鬱になるね。まあ俺はこの冬は南米に行ってきて、向こうは夏だしラッキーだったよ。バッチリ充電してきたよ」

■子供の頃はどんな音楽を聴いて育ったの?

H「メキシコとスペインのパンク。MASACRE 68、MELI、IV REICH、COLERAなんかのクレイジーなパンクだよ」

R「俺たちはESKORBUTO、RIP、LA POLLA、CICATRIZなんかの80年代のバスク地方のバンドを聴いて育ったよ。俺個人で言えば俺の育ったペルーのバンド、LEUSEMIA、NARCOSIS、EUTANASIA、AUTOPSIAなんかかな。あとはもちろん世界中のパンク、RATOS DE PORAO、SUICIDAL TENDENCIES、DISCHARGE、G.I.S.M、ANTICIMEX、GAUZE、KILLING JOKE、GBHなんかも」

■地元でパンク/ハードコアの音源って手に入ったの?

H「うん、Chopoっていうアナーコ・パンク・スペースがメキシコ・シティにあって、そこで色々手に入れたよ」

R「俺の育ったペルーのピウラって街だと、90年代にパンクのレコードを手に入れるなんて不可能に近かったね。オリジナル・テープはもうちょっと手に入れやすかったかな。でも一番はやっぱり友達同士のテープ・コピーだったな」

■今のNYでオススメのバンドを教えて。

R「CREEPING DOSE、LAKRAS、HEATHEN、DEMENCIA ALKOHOLIKA、L.O.T.I.O.N.、ANASAZI、SURVIVAL、LA CRUOR(Rabiosoのもう一つのバンド)かな」

■もしスプリット7インチを作るなら、一緒にやりたいバンドってある?

R「いっぱいありすぎるけど、あえて言うなら、DESTRUCCION、D.H.K.、VOCO PROTESTA、DISKRIMINADOS、DIOS HASTIO、ALIMAÑASってとこかな。この辺で止めとくよ」

H「テキサスのALIMAÑASだね」

■Hoseのやってた"生と死"ってバンドは音源が近々7インチ化されるって聞いたけど、このバンドについても教えてくれる?

H「EN LA OLLAってバンドが解散した後に、NYに英語を勉強しに来てた日本人のアツシっていう友達と"生と死"を始めたんだ。ショーを何回かやって、8曲入りのCDデモを作った。アツシが日本に帰国する事になってバンドは終わっちゃったんだけど、Night Rider RecordsのAmeliaが今度7インチをリリースするんだ。多分この数ヶ月のうちにリリースされるんじゃないかな。もし見つけたらみんな聴いてみて!」

■日本のパンクスにメッセージをお願い。

R「闘い続けろ!日本は福島の問題を始め大変な問題を抱えているのは知ってるし、俺たちの世界は日々汚染され続けているけど、誰も不満を言わない。俺たちはもっともっと声を上げるべきだ。政治家たちの耳が破裂するくらいに。ありがとう!日本のみんな、NYCで会おうぜ!」

H「日本のみんなも中南米でライヴやるべきだよ。中南米のパンクスに会いに行ってくれ!かんぱい!」



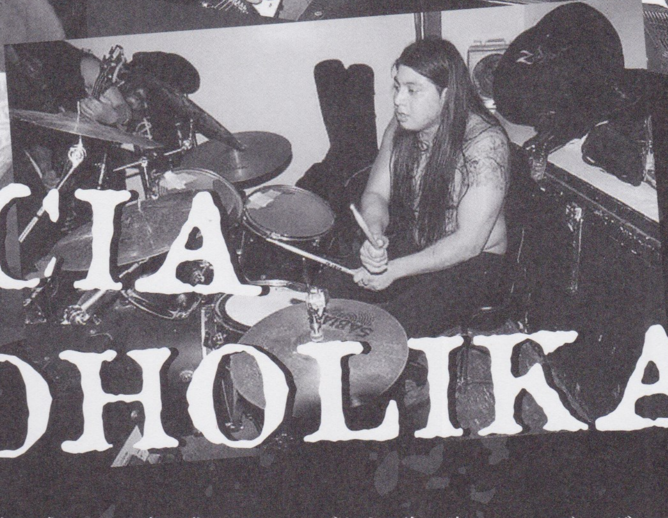


INTERVIEWED:Hose Ruisu(DISCHAKA)

TRANSLATED:ヒロシ







DEMENCIA ALKOHOLIKA

■バンドについて教えてくれる?

Koko「俺がベース・ヴォーカル、Joseがギター、Marvinがドラム。2002年にニュージャージーで結成したよ。俺たちの怒りと不満を社会にぶつける為にね」

■このバンドの前はみんなどんなバンドをやってたの?

「JoseはNO ABUSEっていうニュージャージーのハードコア・パンク・バンドでギターを弾いてたよ。MarvinはニュージャージーでMETAL FUNEBREっていうスラッシュ・デスメタル・バンドをやってて、俺はエクアドルでIMPERDIBLESってバンドやCON LAS JUSTASっていうハードコア・パンクをやってたよ」

■これまでのリリースを教えて。

「デモCDが2枚とエクアドルのJUANA LA LOKAって女性バンドとのスプリット7インチ。今は次のデモを計画中さ」

■バンドの音を一言で表現すると?

「パンク・スラッシュ・コアだね」

■歌詞について教えてくれる?

「権力者による抑圧、クソったれな国境や国旗という存在、移民としての俺たちが感じてる不平等について俺が感じている事を歌ってるよ」

■子供の時はどんなバンドを聴いてた?

「色んなバンドを聴いてたよ。超長いリストになっちまうから少しだけ。ESKORBUTO、LA POLLA RECORDS、RIP、MASACRE 68、HISTERIA、XENOFOBIA、NOTOKEN、KAOS、BSN、DEXKONCIERTO、LOS CRUDOS、NARCOSIS、NAPALM DEATH、AGATHOCLES、CARCASSなんかかな。まだまだいくらでもあるけどね。ハハハ」

■今のNYのシーンについてどう思う?

「ラティーノ・シーンについて言えば、いいバンドも出てきてるし、だいぶいい方向に向かってると思うよ。みんないいアイデアを持ってるし。みんなデモを録音したり精力的だし、いい傾向だよ。まあ、前はあんまり積極的にやってなかったってのもあるけどね。ハハハ」

■おすすめのローカル・バンドは?

「COJOBA、HUASIPUNGO、DISCHAKA、LAKRAS、それにREBUSCHAOSかな」

■Kokoの自宅のレコーディング・スタジオについて教えてくれる?

「自分のバンドや友達のバンドのレコーディングをする為に家にレコーディング・スタジオを持てたらな、ってずっと考えてたんだ。俺のDeskabezado RecordsではANTI ARMADA、KE CHU CHA、NO MAS、DISCORDIA、METAL FUNEBRE、RATAS EN ZELO、SPIC DEMIC、AMARGO、KANTUTA、TRIBAL FORCE、LAKRASなんかがレコーディングしたよ。

それとその音源のリリースをする為に俺たちはEl Parche Punk Distroを始めた。もうすぐDISCHAKA、REBUSCHAOS、LAKRASそれにDEMENCIA ALKOHOLIKAのライヴ・レコーディング・スプリット・テープをリリースするよ。去年はDISCHAKAとAGONIAのデモもリリースしたし、あとはニューヨーク/ニュージャージーのバンドのコンピレーションCDが出るよ。今はまたDeskabezado RecordsとEl Parche Punkで新しいプロジェクトに向けて作業中さ」

■日本のパンクスにメッセージをお願い。

「俺たちの音源に興味があればメールしてくれ!deskabezadorecord@gmail.com

みんなノイズ・パンクを作り続けてくれ!そしてデモを送ってくれ!」

LAKRAS

INTERVIEWED:ヒロシ

■まずはLAKRASについて教えてくれる?

Klever「Romanがヴォーカル、Sulyがドラム、俺がギター、Marielがベースだよ。
俺たちはラティーノ・パンク・バンドさ。LAKRASは俺とドラムのSulyとDEMENCIA ALKOHOLIKAのKokoで始めたんだけど、しばらくしてKokoが抜けたから、Romanをヴォーカルとして誘った。その後にMarielが加入したんだ。LAKRASっていうバンド名の意味は"クソったれな社会・権力者を俺たちバイキンが病気にしてやるぜ"って感じかな」

■LAKRASの音源はデモCDRが1枚あるよね。少し前にFacebookでレコーディング風景の写真を見たけど、もう次の音源の予定は決まってる?あとインターネットでLAKRASの音源は聴ける?

「今は7インチのリリースに向けて準備を進めてるよ。インターネット上だと俺たちの曲が聴けるのは今の所Youtubeのライヴ映像だけだね」

■KleverはKANTUTAでもギターを弾いてたけど、KANTUTAはもうやらないの?7インチは日本のレコード・ショップにも入荷してたみたいだけど。

「KANTUTAは一年くらい前に解散しちゃったんだよ。この間のLatino Punk Festではプレイしたけど、今後については分からないな」

■LAKRASはベーシストとドラマーが女の子だけど、最初から女の子のプレイヤーを入れたいと思ってたの?

「そうだね、女性の視点をバンドに取り入れたかったんだ。女性がどういう風に考え、感じているかってことは大切な事だよ。女の子たちはみんなとてもストロングで才能に溢れてるよ!」

■LAKRASのサウンドはどんな音楽に影響されてるの?

「一番は80年代の中南米のパンクかなぁ」

■歌詞について教えてくれる?どんな事を歌ってるの?あと、英語で歌おうと思ったことはある?

「俺たちの社会の問題、この世界全体が抱えている問題、それに移民として生きる事。クソみたいな権力者、ドメスティック・ヴァイオレンスなんかについて歌ってるよ。すべての社会の不正に対してスクリームしてる。英語の歌詞の曲も今作ってるよ」

■今のNYのシーンについてはどう思う?

「NYのシーンは最高さ。いろんなバンドがいるし、ローカル・バンド同士でサポートし合ってるよ」

■10代の頃はどんなバンドを聴いてたの?パンクの音源なんかは手に入ったの?

「メンバーそれぞれだけど、THE STOOGES、MISFITS、TROPIEZO、GOLPE JUSTO、RIP、NON SERVIUMなんかかな。それにLOS CRUDOSだね。
音源はテープがほとんどだったよ。オリジナルのテープが手に入らなかったら友達にコピーしてもらって聴いてたね」

■LOS CRUDOSを初めて聴いた時はどんな風に感じた?

「ストレスから開放されたような気分だったよ。俺たちはとにかく彼等の歌詞が大好きさ」

■Kleverはエクアドルの出身だけど、エクアドルのパンク・シーンってどんな感じ?

「エクアドルのパンク・シーンは80年代の終わり頃から始まったのかな。アナーコ・パンク・バンドが多いよ。なぜなら政府がクソだからね!」

■フィラデルフィアでDISCHAKAとLAKRASがライヴをやった時、Kleverが「さっきレストランに"Speak English. This is America"ってサインがあったんだよ。クソったれ」って話してたのを覚えてるんだけど、移民としてアメリカで生きる事についてどう感じてる?

「アメリカでの生活は一筋縄ではいかないね。不法移民の場合は特に不利だし、運転免許すら取れないし、毎日何かに怯えて暮らすだけ。あのフィラデルフィアのサインはまさに移民に対するレイシズムの証だよ。そういう事をやってる彼らの先祖だって移民なのにさ。英語を喋れない人に対してそういう風に思ってしまう人がいるって事はやっぱり悲しいことだよ」

■日本についてどう思う?

「日本は最高なパンク・バンドがいるのは知ってるし、いつか行って実際に見てみたいよ」

■日本のパンクスへメッセージをお願い。

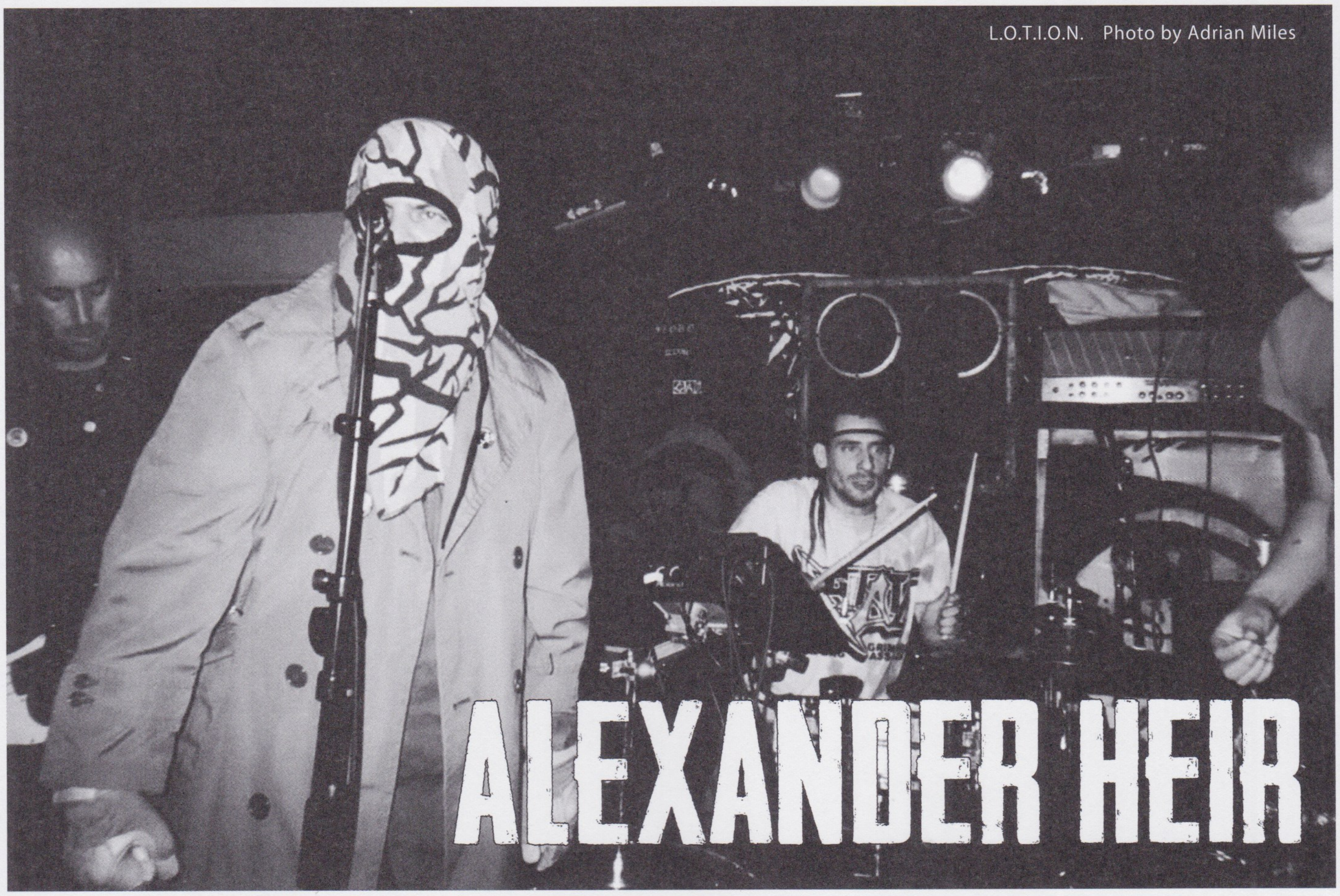
「日本のパンクスたち!俺たちはもっとパンクが聴きたいよ!よい音楽を作り続けて俺たちに届けてくれ!

コンタクト:runapunk35gmail.com」



NYC RAW PUNK NOW!

L.O.T.I.O.N.　Photo by Adrian Miles



ALEXANDER HEIR

現行のアンダーグラウンド・パンク/ハードコアをチェックしている人なら、このAlexander Heirのアートワークを必ず一度は目にしていることでしょう。数多くのバンドのジャケットやフライヤー(前号に掲載したTOM&BOOT BOYSのUSツアーのフライヤーも描いています)を手掛け、SURVIVALとL.O.T.I.O.N.のメンバーであり、ファッション・ブランドDeath/Traitorsの主宰者でもある彼は、現在のNYCシーンを代表する人物の一人であります。
世界屈指の規模を誇り、日本は勿論のこと、世界中のパンク/ハードコア・バンドが訪れるこの一大都市のシーンで、今、一体何が起こっているのか。Alexander Heir〜Adam Whites(Katorga Works/NY's Alright)へのインタヴューとシーン・レポートを以て、NYCアンダーグラウンド・パンク/ハードコアの現状と実態に迫ります!

■パンクとどのようにして出会い、どんなバンドが契機となってのめり込むようになりましたか?
「パンクに興味を持ち始めたのは1996年頃、僕が12歳のときだね。GREEN DAYやRANCID、THE OFFSPRINGといったバンドが信じられないほど大人気だった頃さ。MTVで流れていたRANCIDのミュージック・ビデオを見た記憶があるよ。それからすぐ、モヒカン頭に鋲ジャンを着た、テレビの画面上で"パンク・ロック"をやっているやつらみたいになりたいって思ったんだ。僕や周りの友人はSEX PISTOLS、BUZZCOCKS、THE CLASHといったクラシックなバンドを聴き始めてパンクの歴史について学んでいった。パンクのアイデアとアティテュードにはあっという間に共鳴したよ。特に自分のことを変わり者だと感じている、怒りに満ちたティーンエイジャーにとってはね。僕はニューヨークの郊外、ニュージャージーで育ったんだ。当時の地元のパンク・シーンは盛り上がっていてね、スタイルが違えどパンク・バンドはみんな一緒にプレイしていたし、僕と趣味が同じ人たちやパンクスとたくさん出会うことができたよ。"ストリート・パンク"があの頃はすごい人気だったよね。THE CASUALTIES(大好きだったな)やTHE UNSEENといったバンドさ。そういったバンドのおかげで、僕はUK82のバンドや他のクラシックでもっとアンダーグラウンドなパンク/シーンとバンドを発見することができたんだ。僕のパンク(と他の音楽)に対する関心はこうして始まっていき、どんどん掘り下げられていったのさ…」
■絵についてはどこで学んだんですか?アート・スクール?子供の頃から絵を描くのが好きだったのですか?
「父親がカメラマンから画家に転向した人でね。僕は美術館によく行ってたから、芸術と接しながら成長したんだ。いつだって絵を描くのが好きだったし、何かを創造したくてたまらなかった。ここニューヨークのアート・スクールに通っていたから、確かにそこで何かしらを学んだけど、真剣に自分のスキルを磨いたり、芸術に注力するようになったのは学校を卒業してからだね」
■パンク/ハードコア・バンドのために描くようになったのはいつのことですか?
「初めてイラストを描いたバンドは、高校時代に友達がやっていたパンク・バンド"PF113"のCDジャケットだったな。バンド・メンバーの腕がトイレの中から飛び出しているという下手くそな線描だったよ。僕が15か16歳の頃さ。METALLICAの『Metal Up Your Ass』のデザインに強く影響されたものだったね。絵をずっと描き続けて、パンク・シーンでも活動を続けていたから、その後に色んな機会に

恵まれるようになったのさ」

■アートワークを担当したバンドで印象深かったものを教えてください。

「KROMOSOMにMODERN LIFE IS WAR、THE MOB、SUBURBAN SCUMは多分、僕がアートを担当したバンドの中では一番知られているんじゃないかな。それとSacred Bonesがリリースした『Killed By Deathrock』コンピレーションもね。THE MOBが僕のアートをTシャツに使用したいって依頼してきたのはメチャクチャ光栄だったね。あとはWARTHOG、GOOSEBUMPS、INFERNOH、NOMAD、BLAZING EYE、SADISTといったバンドのアートもやったよ。他にももっとたくさんあるけどね…」

■日本語を使っているのはどうして？浮世絵や丸尾末広からの影響を伺わせる作品がいくつかありますが、実際に影響を受けていますか？

「僕は昔からずっと日本語で書かれた言葉に魅了されているんだ。文字の見た目も大好きだし、漢字が異なる単語(文字の綴りとは反対なこと)を意味するところにも興味をそそられている。実際、高校生の頃に4年間ほど日本語を勉強したんだよ。まぁ、学んだことのほとんどを忘れちゃったのは認めるけどね。僕が作品に日本語を使うようになったわけは、その視覚的なアピール以上に、"隠されたメッセージ"を暗号化できるからなのさ。アメリカの人たちのほとんどは日本語を読めない、だから僕がTシャツに日本語で何かを書けば、それを理解できるのは限られた人たちだけ、つまり日本語が読める人か、もしくはわざわざ翻訳した人だけになるよね。"FUCK PIGS"とか"SMASH THE SYSTEM"なんてことをシャツに書いたところで、ここの人たちは何も思わないしさ。日本語はまるで、コードを理解すれば解読可能になる、魔法の印章や秘密のシンボルみたいだ。でも、理解できなくてもそれは十分パワフルだけどね。

ただ、今でも僕は日本語の字体に魅力を感じてはいるんだけど、自分の作品に取り入れることはしないと決めたんだ(日本のバンドやそのリリース、ツアーに使わない限りはね)。僕は日本人でも、日系人でもない。自分のものではない文化を流用したり、固執したりしたくないからね。それで、隠されたメッセージというコンセプトを他の方法でも模索しているんだ。最近の作品には、昔の英語の字体を縦書きにして使っている。字面としてのアピールは日本語と似ているよね。そしてそれは至近距離から見ても読みづらいんだけど、時間をかけてよくよく見れば解読できるって寸法さ。

浮世絵は僕の作品に最大級のインスピレーションを与えてくれているよ。見るのも大好きだし、もう本当に完璧な色のバランス、デザイン、様式を表現している。他のどんなスタイルの作品よりも、浮世絵は僕を興奮させる。特に妖怪と残酷絵にね。

丸尾末広の作品も愛しているよ！彼も僕にかなりの影響を与えているし、彼も浮世絵からすごく影響されているのは明らかだよね。だけどそこに彼自身のアレンジがなされている。本物のマスターだよ！」

■スカルのイラストも数多く描いていますよね。パンク・アートのモチーフとしてはポピュラーですが、どうして描いているのですか？Pusheadは好き？

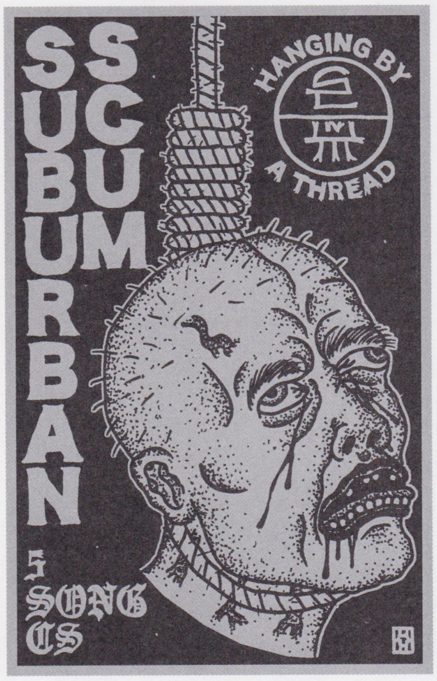
「スカルの絵を描きはじめた当初は、そのフォルムに僕は惹きつけられていたんだ…。Pusheadの作品も大好きだよ、特に絵を描きはじめたばかりの頃は彼からの影響を受けていたね。視覚的なアピール以上に、自分の作品にスカルを好んで用いるようになったのは、スカルが死を分かりやすく表現しているからなんだ。僕の多くの作品にとっては、均衡と権力、そして死の存在はとても重要なものだからね」

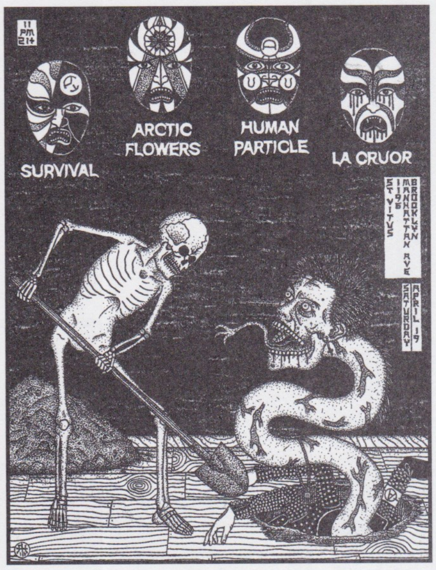
■では、好きな画家やアーティストを教えてください。

「今、僕に刺激を与えてくれているアーティストは石原豪人、Virgil Finlay、Danzig Baldaev、丸尾末広、Tom Of Finland、Hieronymus Bosch、Durer、D'Agony、葛飾北斎、月岡芳年、歌川国芳、Aubrey Beardsley、Joe Coleman、Vivienne Westwoodかな。他にももっといるけどね」

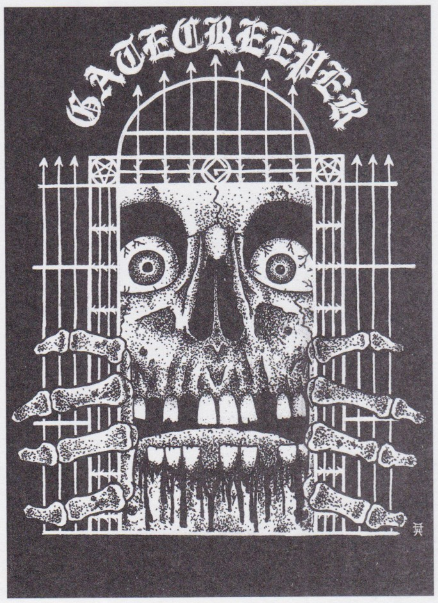
■描くときに一番大切にしていることは？

「一番大切なことって、そりゃ良い作品を作ることさ!!誰のために、何のために作品を作るかによって、どう取り組んでいくかは変わってくるからね。…バンドのために何かをデザインするとき、僕は何とかして自分のアートと、そのバンドの名前や音楽性とが関連づけられるようにしているんだ。まぁ、何であろうと関係なく、僕は常に新しい、もしくは興味深い作品に仕上げようとしている。同じような絵を描き続けるなんてごめんだよ。









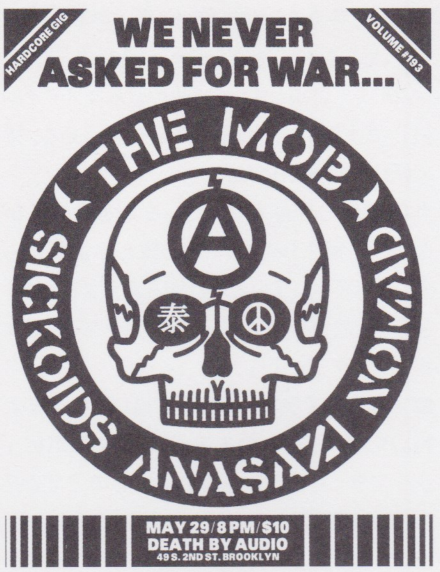
スカルやパンクス、警官に残虐シーンといった同じ要素を使ったとしても、僕はいつも新しくて刺激的な構図やデザインになるよう作っている。本やインターネット上で、僕は自分の好きな芸術作品をたくさん見てまわる。すると、どうして自分はこの作品が好きなのか、何が僕の目を引くのかを理解できるようになるんだ。そしてそれを自分の作品に応用していく。どんなところに満足したのか、もしくはできなかったのか知るために、自分の作品を振り返って見ることもよくするんだよ。

概念的には、戦争の恐怖や不条理を描写したOtto Dixのような画家や、ダダイズムの芸術家から多大なインスピレーションを得ているんだ。同様に、瞑想を意図し、権力と均衡のシンボルも特徴とした古来の伝統的な仏教芸術作品からもね」

■手描きとPCソフト(イラストレータ)を使うのだと、どちらのスタイルが好きですか?

「僕が何を作るかによるね。Death/Traitors用の平面的なグラフィック・アートならイラストレータを使っている。シンプルで幾何学的な形状や文字を打つのには最適さ。PCの精度というやつは人間の手にはないものだし、そういったグラフィック・アートの線画を描くには役立つよね。

だけどそれ以外は全て手で描き、塗っているよ。…最後の微調整にPCを使うこともあるかもしれないけど、できるかぎり手で描くようにしているんだ」

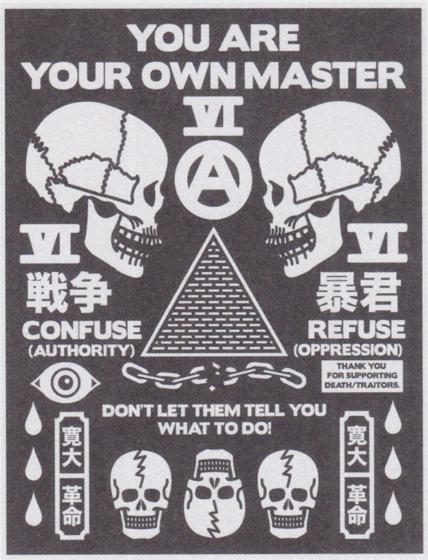


■Death/Traitorsはあなたのファッション・ブランドなのですか?これがあなたの本業?

「Death/Traitorsは僕のファッション・ブランドで、自分のデザインを自分の手でシャツにプリントしているんだ。同様にピンやパッチ、スカーフや他のアイテムも自分で製作しているよ。Death/Traitorsを始めた当初の目標は、パンクなシャツではなく、実際に自分が着たいと思うようなシャツを作ることだった。パンクスによる、パンクスのためのシャツさ。これが僕のメインの仕事だけど、バンドや色んな人たちのためにイラストを描いたり、自分のアートに取り組むといったことも同じく本業だよ」

■Death/Traitorsの理念とは?





「基本理念は、抑圧に対する力強い抵抗をデザインすること。抗議と主張の手段としてのファッション・レーベルであることかな。パンクスによる、パンクスのためのね」

■バンドも色々やっていますよね。TEARDROPSにSURVIVAL、L.O.T.I.O.N.。それぞれを紹介してもらえますか?

「TEARDROPSはダークなパワー・ポップ/ロックンロール・バンドだったんだけど、僕はギター・ヴォーカルを2009年から2011年の間務めていた。一本のデモを出して、かなりの本数のショーをニューヨークでやったね。THE ONLY ONESやTHE UNDERTONESといったバンドから強く影響されていたよ。

SURVIVALはポスト・パンク・バンドで現在僕はシンセサイザーを弾いている。Jess Poplaswki(ANASAZIでベースも弾いている)がヴォーカル、Brian Crozierがギター、それにドラム・マシンという編成だ。2012年に一本のデモ・テープを、昨年にはソノシートをリリースしている。あと近々2枚のEPを出すことになっているから、新たにレコーディングしなくちゃならないんだ。僕たちは幅広いスタイルから影響を受けていて、KILLING JOKEやSIOUXSIE & THE BANSHEESといったクラシックなポスト・パンクからディスコ、ハウス、ヒップホップまでといった感じでね。

L.O.T.I.O.N.は僕が歌っているインダストリアル・パンク・バンドで、Tye Miller(NOMAD、SAD BOYS)がギター、Cory Forrest(LOST TRIBEのオリジナル・メンバー)がベース、Emil Nasdor-Bognar(DAWN OF HUMANS)がドラムだよ。当初は僕とTyeだけのベッドルーム・レコーディング・プロジェクトだったんだけど、すぐにちゃんとしたバンドへと成長を遂げた。Emilは従来のドラム・キットと、トリガーが取り付けられたドラム・マシンの"中枢部"とを接続して使っている。だから彼が叩くと、本物のドラム・サウンドとデジタル・サウン



ドがミックスされた迫力を僕たちは得られるってわけさ。まだ色々と改良の余地があるね。パンクではあるけど、先に進むためには実験をしないとね」

■ちなみに、Burn Booksというレーベルも運営していますか?

「Burn Booksは2009年に友人のMaxim Ryazasnsky(他のことに夢中になってもう彼はやめちゃったけど)と始めたレーベル/ディストロだよ。パンクに関連するアートや印刷物をリリースするために始めたんだ…。アンダーグラウンドな音楽をリリースするレーベルは腐るほどあるけど、アートみたいな視覚に訴える作品をパンクスが手にする機会はそんなにないと思ってね。今ではレーベルというよりも、色んなアーティストの作品や地元のバンドのリリース作品をストックする、ディストロ/ウェブ・ショップになっているんだ」

■バンド、レーベル、ブランド、アートと、多岐に渡って活動していますが、活動の源になっているものは?

「僕は仲間やコミュニティからたくさんのインスピレーションを得ている。多くのパンクスやクリエイティヴな人たちがここにはいて、僕にすごく影響を与えてくれるし、常に後押ししてくれている。バンドも絵を描くことも全部が違う面を持っているけど、それら全ての物事は繋がっている。そして、多分、僕の一連の作品へと昇華されていくんだよ」

■現在のNYCシーンについてどう感じていますか?良い面、悪い面を教えてください。

「前述したとおり、ここのパンク・シーンはとてもクリエイティヴでやる気に満ちた人々でいっぱいさ。みんな自分の作品に対してものすごい手間暇をかけているし、面白そうなことなら、パンクじゃないことにも関心が高いんだ。どんなシーンも、良くも悪くも大家族みたいな感じだね。最悪なのはNYCじゃ狭い住居や作業場しか借りられないってことかな。手頃な練習スペースを見つけるのも難しいし、DIYなショーをやるスペースを見つけるのは更に困難だよ。警官はやたら多いし攻撃的だ。パンクスはやつらのメイン・ターゲットではないけど、警察国家(※警察力によって人々を抑圧的に支配する国のこと)の色彩がどんどん濃くなってきているんだ」

■お気に入りのバンドは?

「今のお気に入りのバンドはDAWN OF HUMANS、ANASAZI、BLAZING EYE、SADIST、WARTHOG、S.H.I、KROMOSOM、MOMMY、CRAZY SPIRIT、BELGRADOにTOTAL CONTROL。大好きな昔のバンドなら100個は名前を挙げられるけど、最近、最もインスパイアされたバンドに絞るなら、G.I.S.M、KILLING JOKE、SCUMPUTER、BAUHAUS、LSD、ORCHESTRAL MANEUVRES IN THE DARK、CCCP、NITZER EBB、そしてもちろんDISCHARGE」

■今後の予定を聞かせてください。

「バンドや注文品、シャツのデザインではない、他の作品と絵に取り組むための時間がもっとほしいね。SURVIVALは2枚のEPを年内にリリースする予定で、L.O.T.I.O.N.はLPとSCUMPUTERとのスプリットをリリース予定。SURVIVALもL.O.T.I.O.N.も4月のNew York's Alrightフェスティヴァルに出演するよ。あとL.O.T.I.O.N.は8月にロサンジェルスで開催されるBeserktownフェスでもプレイするね。ロサンジェルスに行っている間には、作品の展示会もやるつもりさ。音楽を演奏し、みんなに僕のアート作品を見てもらうため、世界中の未知なる場所への旅を続けていけたらと願っているよ」

■インタヴューさせてくれてありがとうございます。日本の読者にメッセージを。

「読んでくれてありがとう。すぐにでも日本に行きたいよ!」

ADAM WHITES FROM NY'S ALRIGHT KATORGA WORKS

NY's Alright、毎年この3日間のイヴェントの為にクレイジーで下品なキッズたちが各地からニューヨークに集まってくる。3回目(しかし今回で最後)の今年は4月17日から19日の3日間、日本からもWARHEAD、ISTERISMO、RAW DISTRACTIONSが参加、日によっては1日に3つのショー、さらにアン・オフィシャルなアフター・パーティーなんて事もある最高なフェスだ。この主催者の一人、Adam Whites(Katorga Works)に話を聞いた。
INTERVIEWED:Rabioso(DISCHAKA) TRANSLATED:ヒロシ PHOTO:Sarja Ann

■NY's Alrightはコレクティヴとしてやってるの?
「一人でやってるわけではないけど、コレクティヴとも言えないな。毎年、色んな人間が関わってるよ。でも3年通じて企画に関わってるのは俺だけだね。これまで関わってきたのはDan Oestreich(The Acheronの共同オーナーの一人)、Marc Grillo(PLEASURE INDUSTRY、RAID)、Reed Dunlea(MISSIONARY、DIPERS)、Mike Hillerson(SAD BOYS、POX)、Sam Ryser(Dripper World、CRAZY SPIRIT、DAWN OF HUMANS、MURDERER)、John Somers(Toxic State Records)、Alexander Heir(Burn Books、Death/Traitors、SURVIVAL、L.O.T.I.O.N.)、Eugene Terry(Papertown Company、DAWN OF HUMANS、CRAZY SPIRIT、PERDITION)なんかだね。他にも毎年いろんなヤツが手伝ってくれてるよ」
■なんでフェスをやる事にしたの?
「Mikeと俺がそれぞれ別に、なんとなくだけどフェスのアイデアを考えてたんだ。それで、ある日Mikeからフェスをやりたいけど手伝ってくれないかって誘いがあって、一緒にやる事にした。それで俺はReedを誘ったよ。彼はMikeや俺に比べてシッカリしてるからね、ハハハ。今考えると俺たちがフェスをやりたかったなんて奇妙な話だなと思うよ。でも当時、周りでもいろんなフェスが動き出してたし、そういう雰囲気がみんなにあったって事かな」
■Adamはショーのブッキングをずっとやってたの?
「これまで5年間ショーをブッキングしてきたよ。他のみんなもそれぞれ同じくらい色んなショーのブッキングに関わってるね」
■みんなはディストロやレーベルはやってる?
「俺はKatorga Worksっていうディストロをやってるよ。MikeはPogo&Cryってレーベル、Dan OはDestroy Meってレーベルをやってたな」
■NYでショーを企画するのは難しい?
「そんなに厄介な事はないかな。DIYスペースは昔に比べ減ったけど、ヴェニュー自体はたくさんあるし、俺たちによくしてくれるヴェニューもあるし、問題はないよ。単に俺たちの金が目当てなだけかも知れないけどね」
■フェスに出演するバンドはどういう基準で選んでる?
「個人的な趣味が一番だね。地元の最高のバンドと世界中のお気に入りのバンドを集めてるよ」
■俺からすると、キャリアもあって、すごくいいな、って思うバンドがいくつか漏れてるように感じるけど?
「まぁさっきも言ったように個人的な趣味があるからね。Rabiosoがいいバンドに出会ったけど、俺たちは出会わなかったって事かな。たしかにたくさんのいいバンドがいるけど、残念ながら機会がなかったバンドもいるって事かな」
■フェスに出演するバンドは新しいバンドである事が条件って聞いたことがあるけど?
「条件は現行のパンク・ハードコア・バンドである事。これだけさ。再結成バンドのフェス・ツアーには俺たちも飽き飽きしてるし、必要ないね」
■この号はこの間のLatino Punk Festについても記事が載るんだけど、今回のNY's AlrightのバンドはLatino Punk Festの出演バンドと被らないように意識した?
「NYのLatino Punk Festは昨年が初めてだったし、影響してるとしても昨年だけだね。まぁ出演バンドが被る/被らないって点はそんなには意識はしなかったかな。Latino Punk Festが開催された事はとにかく素晴らしい事だと思うよ。企画してるみんなもいいヤツらだし」
■今年のフェスの出演バンドで楽しみにしてるのはどのバンド?
「WARHEAD!個人的に今年のフェスで一番楽しみにしてるよ。もちろん、出てくれるバンドは全部大好きさ。たぶんアフター・ショーでプレイする事になると思うけど、ゴス・ポスト・パンク・レジェンドのPART 1と13TH CHIMESもマジで最高。あとは、ISTERISMO、VANITY、SHEER MAG、LEFTISTS、BLAZING EYEかな」
■海外や遠くからバンドを呼ぶのは大変?
「そんなことないよ。そりゃ少しは苦労もあるけど、フェスの売上で彼らの旅費もカヴァーできるし」
■NYCの警察はキチガイだけど、警察と揉めたりする?
「あぁ、彼らはキチガイだ。でも俺はショーを中止にされたのは一回だけだな。その日は午前2時までショーが長引いちゃって、トリで演奏するはずだったTERCER MUNDOの出番前に警察が来たんだ。まぁそれは俺のミスだな。最高にガッカリしたけど、まぁ今の所一度きりだからそういう意味ではラッキーかな」
■NYCの高級住宅化はショーに悪影響は出てる?
「538 JohnsonみたいなDIYスペース以外だと、俺たちが使うようなヴェニューではそんなに影響は出てないかな。俺たちが使ってる場所は、そういう高級住宅化でぶち壊されるというよりはむしろ、しばらくの間はそういう高

級住宅化で恩恵があるような状態なんじゃないかな」

■フェスに出るツアー・バンドの機材なんかはどうしてる?

「機材を貸してくれる地元のバンドもたくさんいるし、運転してくれるヤツなんかもたくさんいるよ。Dan Oがフェスのステージ・マネージャーとすべての裏方をやってくれてるよ。ただ寝床の確保はいちばん頭の痛いとこだね。めちゃくちゃたくさんのパンクスがNYに来るけど、俺たちのほとんどはみんなを泊められるような大きな部屋に住んでるわけじゃないし。モーテルに泊まるか、結局はこのフェスの為にやってきた1,000人がアパート30部屋に分かれて落ち着くような事になるだろうね、ハハハ」

■フェスに来るパンクスたちが寝床を探せるような掲示板なんかは準備してる?

「みんなFacebookのイヴェント・ページを利用してるのかな。俺たちはFacebook以外だとそんなにフェスの宣伝自体をインターネットでやってないし。Instagramやtumblrなんかもやってない。フェスを見に来るみんなには寝床の確保はそれぞれ自分でやって欲しいって感じかなぁ。俺たちは他にやらなきゃいけない事もたくさんあるしね」

■アン・オフィシャルのアフター・パーティーでビッグ・バンドが出る事もあるけど、そういうアフター・パーティーは誰が仕切ってるの?Adamたちは把握してる?

「知ってるよ。俺たちもアフター・パーティーのブッキングに関わることもあるし、俺たちの友達のAlexander HeirやAscetic Houseのみんながブッキングする事もあるしね。俺たちはアフター・ショーと競り合うようなつもりもないし、積極的に宣伝するよ。アフター・ショーのキャパは250人くらいまでの規模って感じかな。その3倍もの人間がすし詰めになるようなのは嫌だね。とにかく、来てくれるみんなにオプションがあるって事はいい事さ。"この後はパンクのアフター・ショーに行く?それともポスト・パンク?それともインダストリアルにする?"ってね」

■フェスの売上の精算はどうしてる?

「遠くから来てくれたヘッドライナーのバンドにまずはほとんどの金が行くようにしてるよ。NYCからどれだけ離れたところから来てくれたか、を基準にね。俺たちは地元のバンドも含めて、きちんとみんなをケアしてるよ。もちろん地元のバンドにもきちんとギャラを払うよ。地元の彼らが出るからみんながショーに来るっていうのは大前提だからね」

■今後このフェスをどうしていきたい?もっとこのフェスを大きくしたい?それともアンダーグラウンドにとどめたい?

「No Future!今年が最後なんだ。これまで年々規模を小さくしていって、今年がちょうどいい規模で、ベストなバンドを揃えることができたと思う。これで終わりにするよ」

■音楽以外の要素をフェスに入れようと思ったことはある?

「日曜のショーではフリーマーケットをやるよ。アート、クラフト、服やコミックを持ち寄って。それにアート・ショーも。フェスの日程はちょうどRecord Store Dayと重なってるし、俺の働いてるHeaven Street Recordsでもレアなパンク、ハードコアのレコードを出す予定さ」

■NY's Alrightって名前は誰が考えたんだい?

「はっきりとは覚えてないけど、Mikeか、彼の友達のアイデアか、いずれにしてもMikeからの提案だったね」

■これまでのフェスでなんか面白いエピソードはある?

「最悪の話しがあるぜ!ハハハ。このフェスの運営で忙しすぎて、色んなものを失ったよ。あとはこのフェスで一番有名な話しっていうと、LUMPY AND THE DUMPERSの演奏中に誰かがピットに花火を投げたんだ。で、上半身裸になってた観客にそれが当たっちゃって。で、その映像がインターネットで有名になって、最終的にはDaniel Tosh's Comedy Central Show(全米で人気のおもしろビデオ紹介番組)で取り上げられたよ、ハハハハハ」

■活動していないバンドも含めて、もし願いが叶うならフェスに呼びたい！ってバンドはあった?

「俺がもし発言をひっくり返して次の年にもフェスをやる事があるとしたら、その理由はただ一つ、GAUZEだね。もしGAUZEがNYでプレイしてくれるなら、俺は死んでもいい。あとはXMAL DEUTSCHLANDにアン・オフィシャルのポスト・パンク・アフター・ショーに出てもらいたいね、ハハハハ」

■ありがとう、Adam!フェスで会おうぜ！



NYC RAW PUNK NOW!

NYC SCENE REPORT

雪で覆われた自宅の屋上に突っ立って、俺はどうやってNYCパンク・シーンのレポートを書いていこうか思案している。シーンはメチャクチャ大きくて、数えきれないほどの交友関係にバンド、ディストロ、レーベル、コレクティヴ、会場などが複雑に絡み合っている…。クソ、屋上は寒すぎる!中に入ったほうがいいな!
…だから俺は自分の目で見た、シーンの最も活動的な部分の概要を書き出してみようと思う。

TEXT:Rabioso(DISCHAKA)

NYCではほぼ毎日ショーが行われている。こんなにも寒い、今この瞬間にも色んな出来事が巻き起こり、それはいつだって楽しいんだ!

80年代と90年代にパンクが巻き起こったマンハッタンのロウワー・イースト・サイドに俺は今でも住んでいるんだけど、強欲非道のRudy Giuliani(※在任期間は1994年から2001年。治安回復のため"浄化"作戦を行ったことで有名)が市長に就任してからというもの、ここは変わってしまったんだ。

CBGBのあった場所は、今ではファンシーなロックンロール・ストアへと変貌し、パンクスが一週間働いても手が届かない価格のシャツが、そこでは売られている。CBGBから角を曲がったところにはMarksバーがあったんだけどそこも閉鎖された。現在、建物は全て破壊され、イケてるサラリーマンご用達のオシャレなマンションが建っているよ。パンクスはセント・マークス・ストリートや教会の敷地でよくたむろっていたんだけど、10年前からかな、そんなことをすると警察に捕まるようになっちまった。その周辺をみんなでブラブラするなんてもうほとんど無理だね。家賃は跳ね上がり大部分のパンクスはブルックリンに引っ越していったよ。

それでもロウワー・イースト・サイドでは今も、それほど多くはないけど、事態は進行中さ。その一例がABC No Rio。この腐りきった世界を変えたいと願う活動家のハートをたぎらせた、十代の反抗者が、ショーに通うようになる最初の場所こそがABCなんだ!だから俺はABCが大好きなんだよ。毎週土曜日には昼間からショーが開催されるから、もう好きなだけ暴れられるし、楽しくて安全、それに世界中のバンドを見ることができる。

ABC No Rioでは色んなこともできるんだ。Food Not Bombsもあるし、印刷所も暗室もある。それにパソコン・ルームにファンジン図書室も。土曜日にショーが行われるスペースはギャラリーでもあるから、壁面はいつもアート作品で埋め尽くされているよ。

そこから北に歩き続けて10ブロック目のアヴェニューCに行けば、C-Squatを見つけられるだろうね。ここがパンク・シーンと活動家のためのもう一つの中心地。

スクワッターたちがこの建物を占拠したのが80年代のこと。それ以来、人々はここに住み続けていて、今ではNYCにおけるパンク・コミュニティの最古参の一つになっているんだ。この建物のフロント部分はTime's Upという環境団体のものなんだけど、彼らはその一方で昔からあるクリティカル・マス(※自転車利用者が週末に大勢で走り回り、自転車に優しい街づくりを求めアピールする社会運動)の強力な後援者でもある。

C-Squatの映画用の地下室は語り草になっているよ。何年も前からショーをそこでやっているんだけど、そんなにしょっちゅう行われているわけじゃない。ただし、そこでひとたびショーが行われると、ビールがそこいら中に飛び散りてんやわんやの大騒ぎが巻き起こるのさ!

ロウワー・イースト・サイドにはTompkins Square Parkもある。Youtubeで検索してもらえば、1988年にNAUSEAがここでやったショーの模様を見ることができるよ。この公園では毎年ショーが開かれているんだけど、過去には俺たちが主催したこともあるんだ。DAWN OF HUMANS、HAND WOOD AND THE HAMMERHEADS、BLAZING EYE、DISCHAKA、SURVIVAL、それにDRUNKEN RAMPAGEが出演したよ。本当に素晴らしいショーだったね!この公園で行われる今年最初のショーは5月にANASAZIがやる予定さ。

あとは、Nothing Changesというパーティーについても言及しておかないとね。毎週水曜日に開催されて、カルト・パンク、ポスト・パンク、ダーク・ウェイブ・バンドが出演するんだけど、これが俺のお気に入りのスポットなんだ。雰囲気が良くてね、とても小さなステージに素晴らしい音質、照明に煙霧機、80年代のゴスが最高だった時代に俺をタイ



在りし日のCBGB

VENUES AND STORES

C-Squat





ムスリップさせてくれるんだよ。

Lトレインに乗ってマンハッタンからブルックリンのイースト・ウィリアムズバーグへ移動しよう。モントローズで降りれば、そこには最も精力的な会場が2つあるんだ。

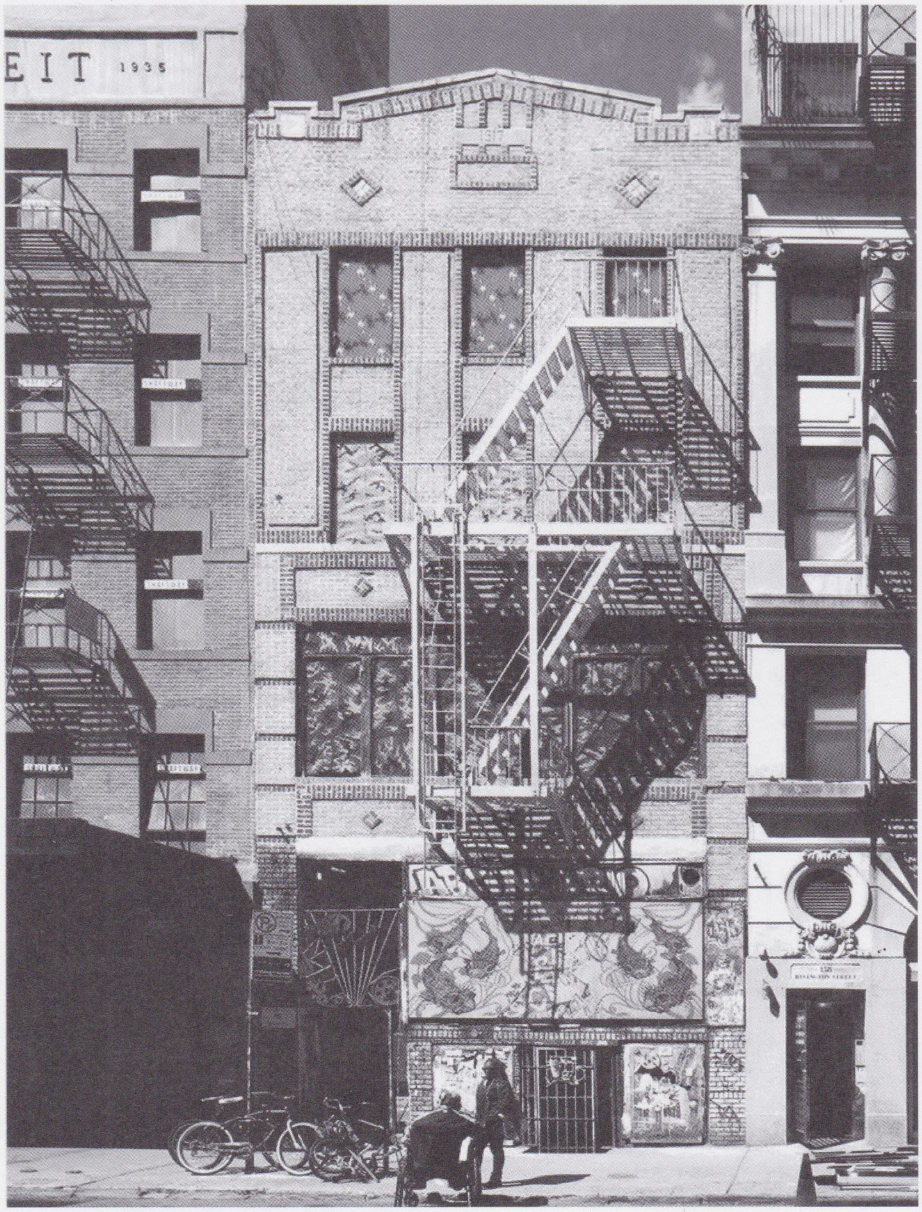
一つ目は、The Swampと呼ばれるDIYなスペース。ひっそりと静まり返ったジョンソン・ストリートに位置しているんだけど、どこに何があるのかを知っておくことが必要だね。階段を上がって大きなロフトへ行くと、そこにはステージ、バー、納戸、さらには裏庭まであるんだ。

そこでは主にポリティカル・パンク・バンドによる荒々しくも楽しいパンク・ショーが行われている。あとはイカれたレゲエ・ダンス・パーティーもね。ATRUTHというバンドのメンバーでもあるChrisが、8年以上もこのスペースを管理しているんだ。認可を受けていない会場は、警察によって常に閉鎖される危機にさらされているんだけど、The Swampはなんとか維持している会場のうちの一つなのさ。

同じ地区にあるのがThe Acheron。ATTAKEというバンドでプレイしていたBill Dozerが6年前にオープンした会場だよ。オープン以来、パンクとメタル・シーンの数多くのショーを開催してきている。外国のバンドも地元のバンドも、ほとんどのアンダーグラウンドなバンドはここでプレイしたことがあるはずだし、New York's AlrightやLatino Punk Festといったフェスティヴァルも開催されているんだ。ここは2つのエリアに分かれていて、一つは広いバーでテーブルが置いてある。もう一つがステージになっていて、狭いバーがあるんだ。ありとあらゆる種類のイヴェントがここでは開催されていてね、激しく狂ったショーにニューウェイブ・ダンス・パーティー、今月にはパンク・フリー・マーケットも行われる予定さ。

同じ地区を少し行ったところには、538 Johnsonという建物がある。番地と同じ名前の建物なんだけど、2階内部にはちょうどいいサイズのDIYなロフト・スペースがあるんだ。そこでも長年に渡りパンクスがショーを企画しているよ。

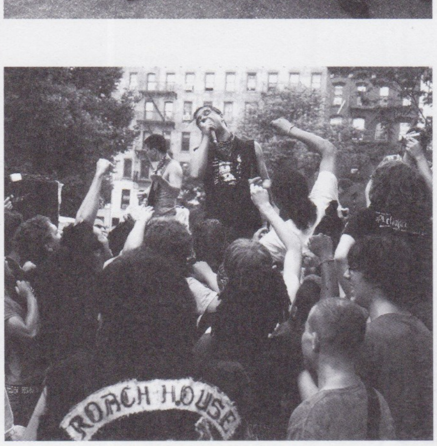
バンドで言うとSYSTEMATIC DEATH、INMATES、UNA BESTIA INCONTROLABLE、RATOS DE PORAO、STAGNATION、GOVERNMENT WARNINGなどがプレイしているね。花火を打ち上げるようなマジでイカれたハードコア・ショーがここ



ABC No Rio







Tompkins Square Park



The Acheron



538 Johnson



Dripper World などがある路地

で行われると、キッズは狂ったように暴れだすのさ!この建物自体もすごくイカしてて、落書きでいっぱいのだだっ広い屋上があるんだ。暖かい日にそこでブラブラするのは最高さ。

新しい会場もいくつかはあってね、ブルックリンのブッシュウィックにあるPalisadesは使いやすい広さの会場で、認可を得ているかどうかは微妙なんだけど、最近はパンクのショーを催しているよ。2月21日にはANASAZIのLPリリース・ショーが行われるんだ。待ちきれないよ!(※この原稿が届いたのが2月中旬です)

ブッシュウィックにあるもう一つのイカした場所がDon Pedro。俺のお気に入りのバーテンダー、Danielleがいる最高のバーなんだけど、パンク・ショーやDJナイト、パンク・ビデオの上映会、ゴス・ダンス・パーティーも開かれるし、極上のメキシカン料理も提供してくれるんだ。

ブルックリンのウィリアムズバーグにはGrand Victoryバーがある。そこはとても精力的にショーのブッキングをしていて、この3年間だとハードコアとスカが主軸だったね。

通りを渡ったところにはThrashバーがある。古いパンク・ロック・バーなんだけど、残念ながら閉店してしまうみたい。

お店についてだけど、俺が知っているミュージック・ストアで、唯一良い品揃えなのがHeaven Street。彼らは地元のレーベルや世界各地のアンダーグラウンドなレーベルと連携しているから素晴らしいセレクションなんだ。パンク、メタル、パワー・エレクトロニクス、実験音楽、他にも変わり種を色々とね。Palisadesの近く、ブッシュウィックの路地にはパンクスが経営している小さなお店がいくつかあるよ。

最初に挙げるべきはStreet Feverだね。レコード、テープ、ヴィンテージ物を扱っていて、タトゥー・スタジオも併設している。ちょっとしたタトゥーをMimiとSullyがいれてくれるよ。

Acrossはクラシックなロックンロールとパンクでいっぱいのレコード・ショップ。隣りにはコミックやファンジンを扱う本屋もあるよ。

Dripper WorldはCRAZY SPIRIT、DAWN OF HUMANSのSam Ryserが経営しているお店で、俺は本当にここが好きなんだ。クールな商品をたくさん買っているよ!シャツにピン、人形にレコード、テープ、ポスター、もっと色々とね!ウェブサイトをチェックしてもらいたいな。路地の奥には小さなアート・ギャラリーもあってパンクスが描いた作品の展示もできるんだ。

Death/TraitorsのAlexについて触れずに、このセクションを終わらすことはできないね。彼は店舗を持ってはいないけど、彼の作品はありとあらゆる場所で散見できる。彼はNYCの偉大なるパンク・アーティストの一人で、昨年には初となる作品集を発表したよ。Death/Traitorsの製品はシャツにスカーフ、ピン、リング、ペンダント、パッチ、ポスター、ジャケット、ハットなど多岐に渡っている。ネットでチェックしてもらいたいな。

以上が、NYCでパンクと出会える最も活動的な会場とお店だね。今度ここを訪れる際には、是非ともこういった場所を周ってみてほしい。



Heaven Street



ニューヨークから一転、南西へ1200キロほど移動するとそこはアトランタ!
ここでは、当地のカルトなパンク/ハードコア・レーベル、SCAVENGER OF DEATHのRyanとGregのインタヴューをお送りしたいと思います。ご存知の方は既にピン!ときているでしょうが、そう、Ryanはその強烈なバンド名でも知られていたハードコア・バンド、BUKKAKE BOYSを、そしてGregはキラーなKBDサウンドで人気を博したパンク・ロック・バンド、THE CARBONASのメンバーだった2人です。
最高のセンス(…と微かな変態性)を持ち合わせた2人のレーベルですから、リリースするのもステレオ・タイプとは無縁のフリーリー&フリーキーなバンドばかり。そしてインタヴューの回答もユーモアとウィットに富んだ内容で(特に後半はシニカルなジョークまみれです。真に受けないで下さい)、やっぱり一筋縄ではいかないレーベル&人たちなのでありました。

■RyanとGregには素晴らしいバンド経歴がありますよね。BUKKAKE BOYSにCOPS、THE CARBONAS、GG KINGなどなど。あなたたちが関わったバンド/プロジェクトを読者にまず紹介してもらえますか?

Ryan「僕はBUKKAKE BOYSをやってて、初めはベースを弾いていたんだ。後にギターを弾くようになったんだけどね。その後はGG KINGのレコーディングにだけ参加するようになった。だけど結局ベースから離れることができなくて、COPSでベースを弾くことになった。あとはRYAN DINOSAURで歌っていて、最近じゃPREDATORでギターを弾き始めたところさ」

Greg「THE CARBONASでヴォーカルと作曲をやっていたぜ。それとFRANTIC、PREDATOR、COPSではドラムを叩いていた。それともちろんGG KINGを始めたのは俺さ。他にも数多くのバンドをやってきたが、遡れば俺が10歳のときにやっていたSCRAP METALが初めてのバンドになるな」

■Scavenger Of Deathを始めたのはどうしてですか?過去には他にもレーベルを運営していましたか?

Ryan「Scavenger Of Death(以下SOD)はRALPHの7インチをリリースするための手段として始めたんだ。RALPHのレコーディング





を頼まれて僕が担当したんだけど、その代金はRob's House Recordsがちゃんと支払ってくれた。だけど、それっきりで進行がストップしちゃっているように見えてね。それで僕らが自分たちでリリースすることにしたんだよ。振り返ってみると、僕らがやったことってRob's House Recordsからリリースを奪ったことになるから、ケンカ売ってるみたいだよね。ゴメンよ、Trey!(※TreyはRob's House Recordsの主宰者)

SODの前にはBUKKAKE BOYSの7インチを自分でリリースしたよ。だけどレーベルという形では全然なかったな。高校生のときには『Attack of the Yeti』(※イエティの攻撃)というタイトルの最低最悪なコンピレーションCDを出したことがあるけどね。BUKKAKE BOYSやMERCENARYをやっていたRubyのジョーク・ソングを収録したんだよ」

Greg「俺たちは、小さなハードコア/パンク・シーンを記録するためにSODを始めたんだ。ここのシーンに関わっているやつらは、記録しておこうなんて配慮に欠けている。だから放っておけば忘れ去られちまうからな。

THE CARBONASの7インチをリリースしたDouchemaster Recordsを以前に手伝っていたこともあったが、それも初期のリリースの何枚かを手伝っただけさ」

■レーベルの信念みたいなものはありますか?アトランタのバンドだけ出すことについては?リリースするバンドを選ぶ際に重視することは何でしょう?

Ryan「最も重要なことって、その音楽が僕にハマるかどうかってことさ。デタラメだったり、テキトーだったり、気恥ずかしくなるくらいマジだったり、そんなのが気になるんだ。パンクやハードコアに関して言えば、僕はダークでヘヴィーなのが基本的には好きなんだけど、選り好みは全然しないよ。支離滅裂なのも、スノッティーなのも大好きさ。

レーベルに関して、本当に信念みたいなものは一切ないんだ。レコードに豪華なパッケージなんて必要ないよ、ただ、最高の仕上がりになるようなレコーディングがなされていればいいと思う。今のところ僕らはアトランタのバンドしかリリースしていないけど、次にリリースを予定しているGARY WRONGはアラバマのバンドだよ。僕らはアトランタに根付いたレーベルでそれはずっと変わらないだろうけどね」

■親近感を抱くようなレーベルはありますか?

Ryan「現行のレーベルに関して言えば、僕らと同じくらい小規模なレーベルに夢中なんだ。以下に挙げるレーベルは全てSODよりも優れた仕事をしていると確信しているよ。State LaughterにNegative Jazz、Cool Death、そして何といってもGood Throb Recordsだね」

■80年代のアトランタ・ハードコアというと、真っ先にNEON CHRISTが思い浮かびますが、やはりシーンにとって彼らは重要ですか?

Greg「彼らの全盛期を見るには俺は若すぎなんだよ(2、3年前のショーも見逃したし)。だけど彼らの7インチは昔から大好きだぜ。そうは言っても、未発表音源のほうが実は好きなんだけどな。俺の知り合いに、彼らの初期のショーを見たことがあるやつがいるんだけど、メチャクチャすごかったって話しだよ。打ち明けると、何回か行われた彼らの再結成ギグの一つで俺は一度だけドラムを叩いたことがあるんだ。2004年のことだ」

Ryan「僕は再結成ショーでしか彼らを見たことがないんだけど、彼らの音源は大好きだよ。ギタリストはカリフォルニアに引っ越してBL'ASTに加入したよね。それで今じゃALICE AND CHAINSのヴォーカルだしさ。『Parental Suppression』7インチの裏ジャケに写っている彼の写真を見ると、何とも言えない奇妙な気分になるんだ。うん、そうだね、何年か前にこの7インチのブートがリリースされたけど、その件に関してはRyan DiDioて野郎に感謝することもできる。僕とあいつは友達じゃないが、もしあいつがあのブートをリリースしなかったら、アトランタのキッズがNEON CHRISTを知ることはなかったと思っているよ。僕たちのDroppingsジンの第一号に付属していたテープには、NEON CHRISTの曲、"Savior"を収録したんだ」

■あなたたちの好きなアトランタのクラシックなバンドは他にいますか?

Ryan「いや、全くいないね。アトランタのバンドでヒットしたやつなんていやしないよ」

■現在のアトランタのパンク/ハードコア・シーンについてですが、オススメのバンドはいますか?

Ryan「今のシーンはどんどん良くなっているよ。もう地位が確立されているWYMYNS PRYSYNのようなバンドとは違って、本当に刺激的で新しいバンドがどんどん出てきている。彼らのほとんどがハードコア寄りのスタイルなんだけど、SLUGGA、UNIFORM、NURSE、GHBといったバンドだね。グラインドやデス・メタルの範疇に入るブラスト勢にはRAPTUROUS GRIEF、WASTE LAYER、STRATEGIC WARHEADなんてバンドもいるな。MERCENARYはここらじゃベストなハードコア・バンドでLPをレコーディングしてあるんだけど、いつまで経っても出さないんだよね。あと明らかにRYAN DINOSAURはアトランタで一番お上品なステージングをするバンドだよ、以上かな」

■シーンはサブ・ジャンル毎に分かれている感じでしょうか?

Greg「アトランタは都会の振りをした小さな町だよ。パンク/ハードコア・シーンは言うまでもなく、ありとあらゆるアンダーグラウンドな音楽も、ここじゃ分裂するほど数がいないんだ。ハウス・ショーに足を運べば、バックグラウンドがまるで異なるミュージシャンが一緒にやっているのを見ることができるぜ。結局はみんな知り合い同士なんだよな」

Ryan「自ら他のやつらとは一線を画す人間も、ここにはいる。他の誰よりも自分たちのほうが優れていると思っているんだよ。Ryan DiDioみたいなやつとかね。あいつはいいやつなんだが、僕と同じ名前だから互いに対抗心を抱いているみたいでね」

■アトランタのバンドの特徴はどんなところにありますか?他の都市のバンドとの違いは感じますか?

Ryan「アトランタのバンドって、まずアトランタから出ないんだよ。ここのパンク・バンドがどんなにキャラづけしようとしたところで、気にかける人なんていやしないだろうしね。まぁ、十人十色ってやつさ。ただ、僕は一つ気がついたことがあるんだ。アトランタのバンドの多くがタカリ屋ってことにね。他の人の機材を借りたらそのまんま壊れるまで使うやつらとかさ。PREDATORはまさにタカリ屋からなるバ

ンドだよ。どのバンドも格好良いけど、高価な機材にしてみりゃ、僕たちタカリ屋に使われるのなんてまっぴらごめんだろうね」

Greg「Ryanの言う通りさ。俺から付け加えることがあるなら、それはPREDATORはアトランタで最高のバンドってこと」

■ところでアトランタのREVOLUTIONARY YOUTHってバンドを知っていますか?カオティック/クラスト・バンドで、10代のメンバーがやっていたと思うのですが。

Ryan「そのバンドは聞いたことがないな。彼らは"革命"に失敗したか、もうとっくに"若者"じゃないんだろうな。アトランタのバンドなのか?」

Greg「俺たちにデモを送れと伝えてくれ」

■Droppingsジンについてですが、このジンを始めたキッカケは?インタヴューするバンドはどうやって選んでいますか?

Ryan「そうだな、既に僕らはレコード業界を完全に牛耳っている。だから次は出版業界に乗り込んで名前を売ろうと思ってね。その第一歩がDroppingsジンなのさ。まずはノンフィクションのベスト・セラーを2、3冊くらい出版しようかと計画している。Gregの飼っている犬が今、自分の自叙伝を書いているところなんだ。彼の名はClaude、彼の毎日は突飛な出来事の連続でね。僕らも負けちゃいられないから、パンクの髪型に関する本を、大型の豪華特装本の形で出すつもりさ。冗談はこれくらいにしておこう。僕らがジンを作ったのは、多分ありきたりな日常に退屈していたからじゃないかな」

Greg「もしそのバンドが好きだったら、俺たちは彼らにインタヴューする。彼らからの返信があれば、印刷する。それだけさ。Droppingsジンは子供っぽいユーモアが強すぎるから、俺はあんまり関わっていないんだ。子供が書いているみたいでさ」

■紙媒体についてはどう思っていますか?紙のジンとオンライン・ジン、どちらが好きですか?

Ryan「そりゃ完全に紙のファンジンだよ。だって僕がトイレに入っているときにまでパソコンを使っていたら、みんな僕のことを馬鹿だと思うだろ。ファンジンはトイレで読むのが最高なのさ。Gregもきっと紙のファンジンを楽しんでいるはずさ。彼はいつも雑誌を読んでいるからね。PREDATORでバンド練習をするときだって、いつも彼は雑誌を持ってくるんだよ。僕らがギターのチューニングをしている間も、彼は雑誌をスネア・ドラムの上に置いて読んでいるくらいさ。何を読んでいるかは知らないけど、多分Better Homes&Gardens(※アメリカの主婦向け家庭実用雑誌)か、Fart Enthusiast(※"オナラ・マニア"の意味。恐らくギャグで言っているだけで実在しないハズ)じゃないかな。彼はGG KINGで"Reading Magazines"なんて自分の曲まで書いているくらいだし」

Greg「俺はFart Enthusiastなんて読んでいない。それ以外は全て事実だ。俺が好きなのはFlatulence Weekly(※"週刊放屁"の意味。きっと存在しない)だ。こっちのほうが面白い記事が載っている」

Ryan「まぁ、最初はオンラインでファンジンを出そうかと思ったんだけど、僕らはあまりにもレイジーでね。けど、印刷物を読むのが嫌いなやつもいるんだよ。オンラインの読み物しか好きじゃないっていうやつがね。そう、Ryan DiDioさ。例えば、やつは本を読んだことが生まれてこのかた一度もない。だけどいっつもネットで何かを読んでいやがる。この前、あいつはCooking For Loveというウェブサイトに載っている短編を読んでいたんだ。これはもう魔女信仰の一種みたいなもので、ある料理を作ってあげれば、彼はたちまち魔法にかかったようにあなたの虜になるでしょう、なんてことが書いてあってさ。あいつが読んでいた物語のタイトルは、"Tiramisu Is My Love For You."(※ティラミスはあなたに対する私の愛)。女の子がティラミスを食べて男の子と恋に落ちるところで物語は終わったんだが、あいつは嬉し涙を流していやがった。ヤバいよな。アトランタは奇人でいっぱいさ」

■今後の予定を聞かせてください。

Greg「お次はGARY WRONGの12インチだ。これはアトランタ・コネクションではない、初のリリースになるね。ダークで妖しい4曲入りだ。強烈なデモを出したばかりの地元のハードコア・バンド、NURSEの7インチも計画中だよ。それ以外だと、GG KINGで海外ツアーにも出たいね。そしてDroppingsジンを今後も出し続けていきたいな」

■インタヴューさせてくれてありがとうございます。最後に日本の読者にメッセージを。

Greg「アメリカって酷いもんだろ!」

Ryan「ろくでなしの国さ」

Greg「Blood, guts n beer」





WRECKING CREW

2013年の暮れにWRECKING CREWのギター、Ralph DiNunzioが旅行で日本に来た。旅行に行ったらその土地のレコード屋に行くわけで、以前からWRECKING CREWが好きだと聞いていた、大倉君のいるRECORD BOYさんにお邪魔しました。その日は定休日にも関わらず、わざわざお店を開けていただきまして、ありがとうございました。お店で買い物をして(RalphはDISCHARGEのデモLPを買っていた)大倉君も交えて食事に行ったんだけど、その時ボストンの色々なバンドの話をしたのがこのインタヴューのきっかけです。最近は、SNSで海外とのやり取りが簡単になったので、昔のメンバー3人に集まってもらって話を聞きました。参加してくれたのは、ギターのRalphとJohn Darga、ベースのKeith Bennett。ヴォーカルのGlenn DudleyとドラムのTaras Hrabecは、SNSをやっていないので参加できませんでした。　INTERVIEWED & TEXT:Mr.Koketsu(Record Label Devour)　質問:大倉 了(RECORD BOY)

■WRECKING CREW結成時の話から聞かせてください。どういう経緯でメンバー5人は集まったんですか?

Ralph「俺とKeithは高校が同じで、仲良くなったから一緒にライヴに行くようになった。85年頃ね。Johnは、大学に行くためにボストンに移ってきた。俺達がライヴに行ったりパーティーに行く度にお互いを見かけるようになってね。それでお互いの存在を知った」

Keith「行く所が同じだからよく会うんだよ。ライヴに行くバスに乗っているとJohnがいたりして。レコード屋に行っても見かけたりして。俺達は既にバンドをやっていたけど、俺達が本当にやりたいような音楽をやっている奴はいなかったな」

John「どっかのパーティーでこいつらのバンドを見た事あるよ。いつもライヴで見るあいつらだ!!いつも手袋をはめてる奴(Ralph)にモーターヘッド男(Keith)だ!!ってね。バンドはあんまりよくなかったけど。で、DISCHARGEがTSOLとボストンでやる予定だったんだけど、前日のニューヨークのライヴでゴミ箱を投げつけられたりブーイングが酷くて(DISCHARGEの86年USツアーは、各地でブーイングの嵐が巻き起こって、多くの伝説を残した)途中で中止になって、結局ボストンのライヴも中止になったんだ。会場に行ったけど中止だから帰ろうとして電車を待っているとRalphがいて…」

Ralph「その頃には、お互い顔は知っていたから話しかけてね」

John「Ralphが「新しいバンドを始めるんだけどリード・ギターを探しているんだ」って。俺はリード・ギターって感じじゃなかったけど、その週末にパーティーがあってこいつらとまた会って、酔っぱらってたからOKした。86年の秋だったよ」

Koketsu「Glennは、どうやって入ったの?」

Keith「Glennは俺達よりちょっと後にライヴに来るようになって。後って言っても2〜3ヶ月だけど、昔は2〜3ヶ月でも違いがあったからね。奴は地元の奴らを連れてライヴに来るんだけど、ピットでめちゃくちゃハードにダンスしてて、皆「誰だこいつは?」ってなってた。で、ちょっとすると、俺達の友達のモニカと付き合い始めて…。WRECKING CREWは、Kenmore Square(ボストンの中心部。バーやクラブやレコード屋があって当時のハードコア・

シーンの人間は、昼夜問わずいつもここにいた。WRECKING CREW、SLAPSHOT、JERRY'S KIDS、STRAW DOGS、GANG GREEN、etc。ライヴやパーティーもこの辺でよくあった)でビールを飲みながらぶらぶらしてる中で始まったみたいなもんだな。ちなみに、オリジナル・ドラマーのE.K.は、Glennの幼馴染み。WRECKING CREWを辞めて、STRAW DOGS(F.U.'s)に入りまた辞めて、WARZONEに入りRaybeezと喧嘩して辞めて、SICK OF IT ALLに入るがまた辞めて…渡り鳥的ドラマー」

■WRECKING CREWは、ボストンやニューヨーク以外にも多くのクラシックなUSHC、さらにDISCHARGEやBROKEN BONESなどのUKHCからの影響も公言していますが、メンバー全員好みはわりと共通していましたか?

Ralph「DISCHARGEやBROKEN BONES以外だと、当時よく聴いていたのは、BATTALION OF SAINTS、NEGATIVE APPROACH、POISON IDEA、CELTIC FROST、VENOM、MOTORHEAD…」

Keith「そんな事言いだしたら一日中バンドの名前を言ってられるよ。NECROS!!AMEBIX!!CRUCIFIX!!(笑)影響の話だと、GlennがAGNOSTIC FRONTのRoger Miretに声が似ているってよく言われていたけど、さっき言ったバンド以外に、CRO-MAGSやAGNOSTIC FRONTといったニューヨークのバンドの影響もあった」

■1st EPとLPのリリースについて教えてください。1st EPはもともとデモとして録音したものから抜粋して、SLAPSHOTのドラマーのMark McKayeが始めたVortex Recordsからリリースされましたが、WRECKING CREWはどういう経緯でVortex Recordsからのリリースが決まったんですか?Markからのオファーだったんでしょうか?

John「Markは皆と友達だったからね。俺と職場も一緒だったし。Markは既にシーンにしばらくいたから、今度はレコードを出したいって話をしていたんだ。友達だったし、WRECKING CREWの事も気に入っていたし。E.K.が抜けてTarasが入るまでに、WRECKING CREWはMarkのドラムで何回か練習した事もあるんだよ」

Keith「まじで??まったく覚えていない!!!」

■Mark McKayeのリリースはレーベル名がGrinding Halt Recordsに変わってからのSAM BLACK CHURCHのEPも含めて2枚だけでしたよね?

Ralph「SAID AND DONEの7インチは?あれは、Suburban Voice(ファンジンもやっていたボストンのレーベル)か…」

John「グーグル・サーチしろ、怠け者私生児!!」

Keith「リサーチしなさい!!」

■『Balance of Terror』LPをリリースしたHawker Recordsは、Roadrunnerがニューヨークを拠点にして立ち上げたUSHC部門のレーベルですよね。このLPリリースの経緯を教えてください。

Koketsu「Keithがレーベルと話しをしていたの?」

Keith「Mike Gitter(xXxファンジン)が色々動いてくれたおかげでRoadracer Recordsが俺達の事を知ったんだ。ニューヨークでやる事も多かったし、それで名前が知れていったと思う」

John「Hawkerもニューヨークのバンドばっかり出さなくてもハードコアのレーベルになれるのに気がついたみたいだし。フィリーのPAGAN BABIESとか、カリフォルニアのNO FOR AN ANSWERとかも出してね。俺達はニューヨークでもよくやっていたし、それとTOKEN ENTRYと何回かライヴをやって、彼らがレーベルに俺達の事を話していたのも影響していたかも」

Ralph「TOKEN ENTRY、SICK OF IT ALL、KILLING TIMEの、当時仲が良かったバンドが俺達の事を色んな所で話してくれて噂を広めていってくれた事もあると思う」

■『Balance of Terror』LP発表後にツアーした際には、DI、ACCUSED、TOXIC REASONSなど多くのUSHCレジェンド・バンドと共演していますね。デビュー・ギグもC.O.C.との共演だったそうですが、強く印象に残ってるライヴやバンドの話を聞かせてください。

Ralph「C.O.C.とは最初の頃のライヴだけど、xXxファンジンのMike Gitterはいいライヴをブッキングしてくれた。印象に残っているライヴだと、88年にやったCBGBsのAGNOSTIC FRONT。ライヴ盤になったやつ。(AGNOSTIC FRONTの)Roger MiretとVinnie Stigmaは、いつもよくしてくれた。GBHも、やる度いつもよかった。CRO-MAGSの最初の再結成(10周年)も…」

John「MEATMENとやったのもよかった」

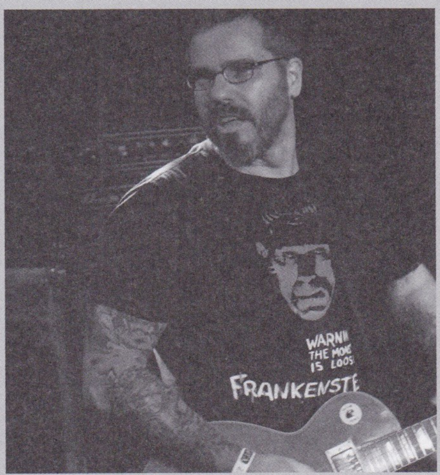
Keith「SUICIDAL TENDENCIES(2nd LPの頃)もよかった。色々有名なバンドとやれてラッキーだった」

Koketsu「80年代後期は、音楽のジャンルにも変化があったし、沢山いいライヴがありましたね」

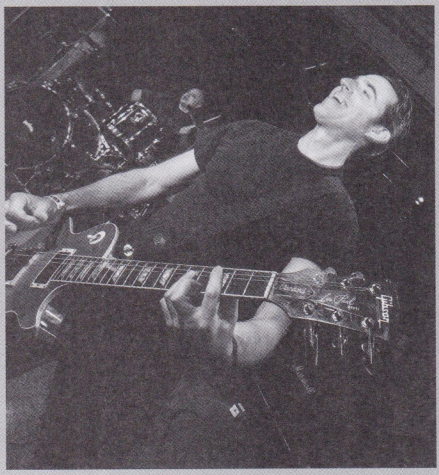
Keith「俺達ラッキー・マザーファッカーだな!!あんなふうには、もうならないだろうけど…」

■2ndアルバム制作の話もあったそうですが、Hawker Recordsがつぶれて、次に話を進めていたMaze Recordsもつぶれてしまい、90年代に入ってからのWRECKING CREWは不運な状況から抜け出せないでいましたが、バンド内部で焦りや苛立ちはありましたか?

John「Hawkerがなくなって、Mazeと契約して曲を書いていたけど、あの90'sデモのたった5曲が、2年間で完成しただけだった。91年の秋までWRECKING CREWにいたけど、メンバーも音楽的にそれぞれ違う方向に向かい始めていた。曲を書いても皆が気に入る事もなくなってきて…。18、19歳くらいから一緒にやり始めて、3〜4年もすると音楽の好みが







変わったり他の事に興味も出て来る。自然な事だよね」

Koketsu「Johnは最初にバンドを辞めたんだけど」

John「WRECKING CREWを辞めた時は、他に2つバンド(JERRY'S KIDSのBob CenciとEYE FOR AN EYEのオリジナル・ベーシストのAdamとやっていたHELLCATS FROM OUTER SPACEと、STPのギターのCliffとやっていたKILL CITY)をやっていて、音楽的には充実していたけど、WRECKING CREWは皆で曲を書く事もできなくなっていたし、皆の音楽の趣味が変わり過ぎてきていた。RalphはLEEWAYとかに影響を受けていたけど、自分はああいうのは卒業していたし。メンバー皆が同じページにいる事がなくなっていたんだ。それに、自分がハードコアと思っているものが変わりつつあった」

Ralph「シーン自体も変わっていったし。俺達は、"ハードコア・パンク"って思ってやっていたけど、タフガイ・ハードコアってのが出て来た」

Keith「タフガイがどんなに"ハードコア"とか言っても違うんだよ。あれにはパンクの要素がない」

Ralph「ハードコア・パンクとしてバンドを始めたけど、新しいシーンが出てきて、俺達は別の方向へ向かっていってたみたいだ。それに、俺達はあまり計画をたてていなかった。どっかのバンドみたいに、Tシャツやマーチャンダイズを作ったり、あれやってこれやって、みたいな事がなかった。俺達はビール飲んで、ぶらぶらしてトラブル起こして、Drink, Fight and Fuck(GG Allin)だよ(笑)!!俺達はただのパンク・ロック・キッズだったんだ」

John「ビジネスの事は考えていなかったな。Tシャツとか作ったけど少ししか作らなかったし、売り切れたらそれまでだった」

Ralph「2週間くらい飲んだりするのを我慢したら、もっとTシャツとか作れたんだろうけど(笑)」

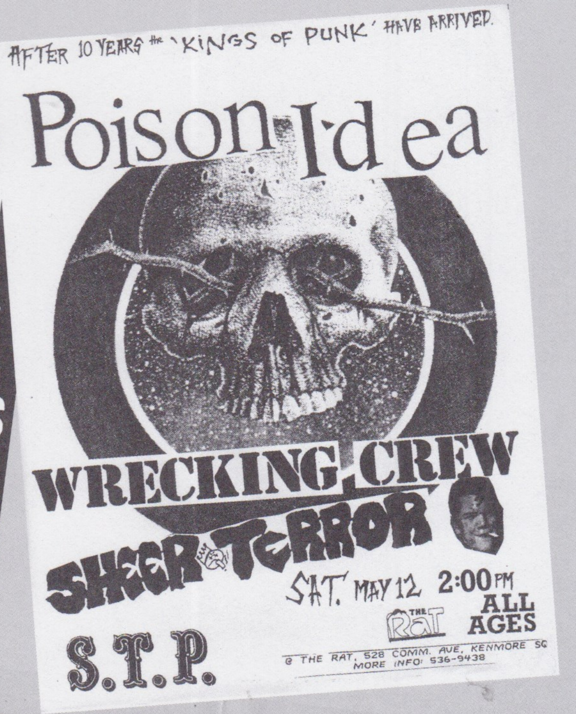
■その後、Glennが脱退して、Elgin Nathan JamesとNick Clancyが加入してからのWRECKING CREWのサウンドには明らかに変化がありましたし、当時はWRECKING CREWも親交の深かったBIOHAZARDタイプのサウンドにはかなり触発されていたように感じられましたが?

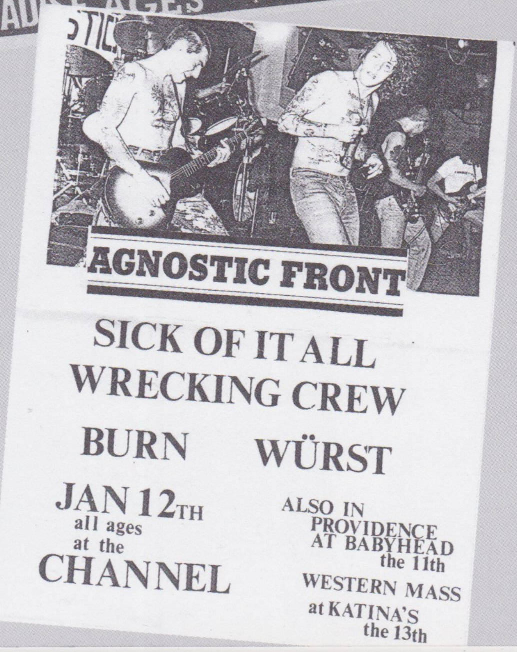
Keith「初めてBIOHAZARDとやった時、「やられた!!」と思ったね。WRECKING CREWが上手くいかなくなってきている時だった。SICK OF IT ALLやKILLING TIMEの人気が出てきて、彼らは古い友達だから彼らの成功は嬉しい事だったけど、「何で俺達じゃないんだ?」って焦っていた」

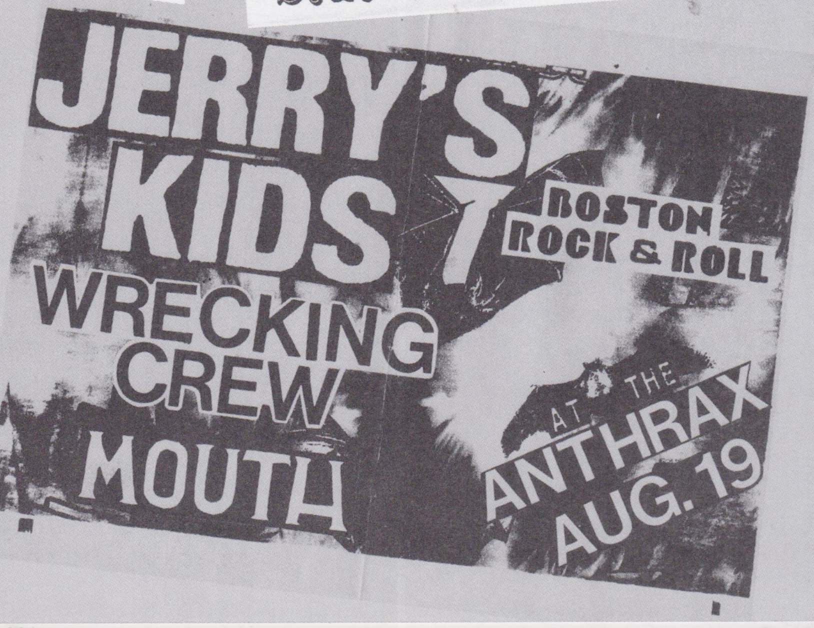
Ralph「(BIOHAZARDは)ハードコアって言ってるけど、あそこまでメタルな音をやっているのはなかったと思う。それにあの時のライヴはCARNIVOREの再結成ライヴで、沢山人がいて、とにかくでかいショーだった。あの雰囲気にやられたのかも。それまでAGNOSTIC FRONTやCRO-MAGSとやっていたけど、BIOHAZARDは雰囲気が違っていた。それにいい奴らだったしね。仲良くもなってよく一緒にやった。BIOHAZARDの音は、メタルとハードコアのクロスオーヴァーで、俺がやりたい音だった。WRECKING CREWを始めた











頃は、Keithみたいな長髪のメタルがバンドにいるのは、あまり格好良くないと思われた事もあったけど、BIOHAZARDが出てきて変わった」

■Bridge Nine RecordsとI ScreamからのCDリイシューは日本でもファンならば誰もが知っていると思うんですが、Bridge Nineから2004年ライヴを収録した7"EPが出てたんですね。このレコードの存在は全く知りませんでした。このEPリリースの経緯について聞かせてください。

Keith「何?7インチ??」

John「LPの曲を再録しただろ?Bridge NineのCDが出た時に出したやつ」

Keith「7インチにしたの?」

John「レコーディングしたの覚えてるだろ?」

Keith「スタジオには居たけど…レコーディング楽しかった?」

John「楽しかったよ」

Ralph「俺、レコードあげただろ?」

Keith「なくしたか、誰かにあげたかも…」

Ralph「おまえは、すぐ人に物をやるからな(笑)」

John「質問の答えだけど、最初に出たBridge NineのCDには、1stデモ、ラジオでやったライヴ、Thrasherコンピの曲、90年のデモが入っていたんだけど、『Balance of Terror』LPの曲は、当時Roadrunnerが権利を持っていて収録できなかったから再録したんだ」

■メタル・シーンとの交流はありましたか?RalphはBOYに来てくれた時、EXECUTIONERのCDを見て驚いてましたが、確かにEXECUTIONERの1st LPを見てみると、サンクス・リストにKeithの名前がありますね。あと、KeithはWRECKING CREW解散後、WARGASMのRich SpillbergとBITTERもやってましたが、WRECKING CREWの頃からWARGASMと交流はありましたか?

Keith「WARGASMとは何回か一緒にやったよ。グレートなバンドだ。メタル・シーンに関してだけど、地元のメタル・バンドとは、WARGASM以外はあまりやらなかったね。NUCLEAR ASSAULTとか、ボストン以外のツアー・バンドとは一緒にやったけど、俺達の客がメタルの客と喧嘩するのは、よくなかったな」

Ralph「454 BIG BLOCK(RalphがWRECKING CREW解散後にやってたバンド)でMACHINE HEADとやったよ」

Keith「まじで?Robb Flynnはいやな奴だ」

Koketsu「VOIVODとVIO-LENCE(Robb FlynnがMACHINE HEADの前にやっていたスラッシュ・メタル・バンド)とやった時の事を覚えていますか?」

皆「(爆笑)」

※VOIVODは、CRO-MAGSのメンバーがTシャツを着ていた事もあり、WRECKING CREWの客のボストン・ハードコア・スキンヘッズにも受け入れられたが、VIO-LENCEは受け入れられず、ボストン・ハードコア・スキンヘッズからめちゃくちゃに野次られた。一所懸命に演奏するが、指を指されて笑われ、MCは全てケチをつけられ、けちょんけちょんなライヴだった。

Koketsu「CRO-MAGSとDESTRUCTIONともやりましたね」

皆「(爆笑)」

※当時、東海岸で最も人気のあったCRO-MAGSが再結成する事で、ボストン・ハードコア・スキンヘッズは大変興奮していたが、前座がジャーマン・スラッシュ・メタルのDESTRUCTIONという事に大変不満を抱いていた。そしてDESTRUCTIONは、ライヴをするのが困難になるくらいボストン・ハードコア・スキンヘッズから野次られる。ベース・ヴォーカルの人がドイツ語訛りの英語で「俺達はCRO-MAGSの友達なんだ、チャンスをくれよ!!」と頼むが、野次は止まず。とどめにWRECKING CREWの取り巻きの一人(Paul Slifer。WRECKING CREWのLPのジャケや、SLAPSHOTの有名な半分マスクを描いた)がギター・ソロの途中ステージに上がり、ギターのシールドを引っこ抜くなど、けちょんけちょんなライヴだった。

■おおまかに時系列で質問しましたので、もうちょっとトリビアというか、当時のWRECKING CREWを取り巻く状況みたいな話を聞かせてください。SAM BLACK CHURCHやONLY LIVING WITNESSなどは、90年代に入ってから台頭してきた印象があるので、WRECKING CREWと同世代の80年代後期ボストン・ハードコアと言うと、EYE FOR AN EYEやMAELSTROMあたりですよね?そう考えると、80年代後期のボストン・ハードコア・シーンは、案外若いバンドの数は少なかったように思えるのですが。

Keith「80年代後期のバンドだと、MAELSTROM、CROSSFACE、POINT BLANK、EYE FOR AN EYE、B'ZRKER、STPとかかな。MAELSTROMはほとんど同世代だけど、それ以外のバンドは2つか3つくらい下だった。ONLY LIVING WITNESSは、スラッシュ・メタルのFORMICIDEがヴォーカルを変えてハードコアになったバンドなんだよ。SAM BLACK CHURCHは、CARCASSのBill Steerがレコードをリリースする予定があった事って、皆知ってるかな?」

■地元の同世代バンドで仲良かったのは、やはりEYE FOR AN EYEでしたか?彼らはファンキーなグルーヴもあるようなサウンドでしたが、スタイルに違いはあっても、リスペクトしあってたように感じられますが。

Ralph「EYE FOR AN EYEのヴォーカルのLioydとは、よく遊んでいたしライヴも一緒にやったよ。フロリダまでショート・ツアーもやったし」

Keith「あいつら、俺達の機材を使おうとして、ピックとスティックしか持ってきていないのには驚いた(笑)」

■ところで、KeithはCANCEROUS GROWTH(PSYCHO、GONKULATOR、Ax/ction RecordsのCharlie Infectionが在籍したハードコア・パンク・バンド)もやってたんですか?

Keith「あれはWRECKING CREWの前で、俺が15歳の時。実際、CANCEROUS GROWTHには1ヶ月しかいなかったけど、俺が初めてCBGBsでやったのは、CANCEROUS GROWTHだ。パンク・メッカでやれるのを興奮してたけど、会場に着いた時、METALLICAのCliff Burtonが死んだのを聞かされてショックだったのを覚えてる」

■Ralphは今音楽活動をしていませんが、KeithはPANZERBASTARDで、JohnはWHITE DYNOMITEとKILSLUGで活動していますね。近々リリースなどありましたら教えてください。

Keith「ボストンのTENEBRAE(UNSEEN、BLOOD FOR BLOODのメンバーが在籍)とのスプリットがもうすぐ出て、次にスウェーデンのRAWHIDE(ブラック・メタル・バンドBESTIAL MOCKERYのメンバーが在籍)とのスプリット、その後9月に7インチを出す予定。タイトルは、「Motor Heathen」!!お前らをぶっ殺してやる!!音楽的にね(笑)」

John「WHITE DYNOMITEは、2013年にCDで出したアルバムのLPヴァージョンがやっとリリースされる。KILSLUGは、2013年に11インチをリリースしてるよ」

■ありがとうございました。最後に、日本のファンにメッセージをお願いします。

Ralph「ウィットに富んだメッセージを…(笑)!!」

John「識見のあるような…わからん(笑)!!」

Keith「俺達にG.I.S.M、GASTUNK、DEATH SIDE、DISCLOSE、LOUDNESSなどの偉大なバンドを与えてくれた、日の出ずる国、日本に敬意を表します!!」

WRECKING CREW would like to thank our Road Crew : Jerry(R.I.P.), Umber (R.I.P.) and Adam



※

Sothira from 1984

2014年11月20日。その日、"1984/Crucifix in Japan 2015"というサブジェクトのメールが一通届きました。
早速内容を確認したところ、メールはPROUDFLESH/ex CRUCIFIXのSothiraからで、「久しぶり。まだジンは作ってる?3月28日〜29日に東京でライヴするよ」とのこと。
なんだかんだで2007年のPROUDFLESHでの来日以降、年に一回くらいの頻度で連絡を取り合っていたため、ツイ調子に乗った私は、「それなら何か協力するぜ!」と返信してしまい、協力するもなにも、私にできること=ファンジンを作ることだけなので、こうしてインタヴューすることと相成りました。
ちょうどSothiraの忙しい時期にインタヴューしてしまったため、大変簡潔な内容になっていますが(普段のメールのほうが長文だったりする…汗)、彼の誠実な人柄が少しでも伝われば幸いです。
ちなみに、「1984の写真をちょうだい」と言ったら、※マークの一枚しかないとのことなので、その他の写真はPROUDFLESH来日時に撮影したものとなります。

■まずは2007年に敢行されたPROUDFLESHの日本ツアーの感想を聞かせて。
「もう8年も経つんだね。あれから日本は僕の心の中にずっとあるし、再び訪れたくてしょうがなかったよ。ツアーは本当にエキサイティングなものだったし、経験できたことには感謝でいっぱいさ。シンとNIGHTMARE、そしてツアーの実現に協力してくれた大阪のみんなにも感謝の意を伝えたいよ」
■日本ツアー後のPROUDFLESHの活動は?
「あの後ドイツへツアーに行ってショーを9回やったんだ。あれも素晴らしい体験だったね」
■PROUDFLESHはまだ活動中?
「うん、今でも情熱を注いでいるよ」
■以前にメールで、"これは再結成じゃなくて、僕とオリジナル・ギタリストのJimmyによるファン・トリビュートなんだ。アルバムのリリースから30周年を記念したね"と言っていたけど具体的には何が"1984/CRUCIFIX"のキッカケとなったの?詳細を聞かせて。
「今こそやるべきタイミングだと感じたんだ。あと、僕は50歳になったんだけど、その記念に何かやりたかったというのもある。ちょっと僕のわがままでやっている部分もあるけど、僕も楽しみ、そしてみんなも楽しんでもらえたらいいな」
■それで、"1984/CRUCIFIX"が正式な名前?それとも"1984"?
「1984だね」
■どうしてCRUCIFIXにしなかったの?
「参加していない他のオリジナル・メンバーに対して、それは礼を失することだと思ったからさ。CRUCIFIXの名前は、彼らと一緒じゃない限り使わないと約束したんだ」
■じゃあ、1984のメンバーを紹介してみて。SothiraとJimmy以外は誰がメンバーなの?
「Chris R(Anti)がセカンド・ギターで、彼はSIDE EFFECTS、KORROSIVE、ISOTOPEといったバンドでもプレイしている。Henry "Hendo-china"はベースで彼もKORROSIVE。Nathan PがドラムでCROPKNOX、PELIGRO SOCIAL、DOPECHARGEのメンバー。それと疲れ知らずのローディーにAndyとSteveがいるよ!」
■新曲や新しい音源の予定は?
「ないかな」
■どんなバンドと普段はやっているの?
「もちろんパンク・バンドさ!」
■オーディエンスの反応は?
「嘘偽りのない心からの熱狂…最高のリアクションを得ているよ!ライヴの様子はインターネットでも見られるぜ!」
■ちょっと昔の話もさせてください。Sothiraの最初のバンドってSUBSIDIZE MESSだよね。どんなサウンドのバンドだったの?
「13歳と15歳の子供がやっていたイマイチなティーンエイジ・パンク・ロックだよ、ハハハ」
■何かCRUCIFIXのレコードに関して面白

話しってないかな?
「『Dehumanization』のために使った額は800ドル。そしてレコーディングには一週間を費やしたよ」
■年をとってハードコア/パンクに対する考え方って変わった?
「いや、本当に変わってないね。歳を重ねることによって色んなことが変わったけど、パンクを愛していることは1984年以前から不変だよ!」
■活動を続ける動機は?
「音楽をやることが大好きなんだ。それにバンドをやることもね。生きがいなんだ!」
■最近のお気に入りのレコード/CDは何でしょ?
「ちょうど今は…、ROLLING STONESの『Black & Blue』LPが気に入っている。ファンではないんだけど、ちょっとした理由があってこのアルバムは好きなんだよ…。あとはTHE TEMPTATIONSの『Wish It Would Rain』LPとか…。他にもたくさんあるけどね」
■日本で楽しみにしていることは?
「全部だよ!人々、食べ物、飲み物、多くの異なる都市。広島にもとても興味があるんだ」
■今後の予定なんかは?
「本当、予定していることなんて何もないんだ。この日本ツアーの後に何が起こるか、そのうち分かるさ。PROUDFLESHもリハーサルを再び開始して、恐らく新しい作品のリリースにとりかかると思うよ」
■東京で再会できるのを楽しみにしています!
「僕たちはとても興奮しているよ。日本に行って演奏できることにね。日本中にいる僕たちのファンと一緒に何か素晴らしいことを成し遂げたいと思っている!僕たちが生きていく中で愛し、そして失ってしまった特別な人たちに、この"Remembrance(追悼)"と名づけられた日本ツアーを捧げるよ。
最後に、このツアーを企画してくれているSo/Hardcore Survivesに最大級の感謝を!Arigato!」

Kappunk & Hardcore Survives presents

1984

(Sothira and Jimmy ex-members of Crucifix)

"Remembrance" japan tour 2015

3/28(土) Tokyo LOFT/ACB "KAPPUNK fest"
3/29(日) Tokyo LOFT/ACB "KAPPUNK fest"
4/1(水) Fukuoka KIETH FLACK
4/2(木) Hiroshima CLUB QUATTRO
4/4(土) Osaka KING COBRA SQUAT
4/5(日) Nagoya RED DRAGON









TEXT:Christina P

PUNK IN AUSTRALIA

+++ PARt 1 +++



オーストラリアのバンドと言えば…HARD ONS? KROMOSOM? それともVIDEO DISEASE(vol.12に掲載)からのリリースもあるVAGINORS? グラインド好きならINTERNAL ROT? …それともやっぱりAC/DC?
と、まぁ、多種多様のバンドが数多く存在しているわけですが、広大な国土ゆえにその全貌を把握しづらいのも事実。しかし、当地でSTITCHES IN MY HEADというファンジンを発行しているChristinaさんがMRRに寄稿したシーン・レポートは、オーストラリア各都市毎のシーン状況を綿密に書き上げたもので、それまで朧げだった全体像をつかむにはうってつけの内容だったのです!
早速彼女に転載の許可を求めたところ、「メチャクチャ長文だけどやってみな!」とのことで、こうしてご紹介できる次第なのですが、本当に長くて…今号だけでは収まり切らなかったので、何回かに分けて掲載する運びとなりました。今回はとりあえずアデレイド&ブリスベン編でございます(あとメルボルン、パース、シドニー、タスマニア編が残っています)。
地上をカンガルーとコアラに支配された国のその地下では、一体何が胎動しているというのか?!刮目せよ!!

序文 Intro

みんなはパンクをどこで線引きしている?

オーストラリアのシーンはかなり小規模だけど、パンク・バンドが必ずしもパンク・シーンのコアだというわけじゃないし、それぞれ独自のパンクとパンク影響下の音楽が、数多あるアンダーグラウンド・シーンに浸透している。

ショーに足を運んでいる人たちの多くはバンドをしているか否かに関わらず、率先してシーンと密接な行動を起こしている。ジンを作ったりオンラインで記事を書いたり、ショーを企画したり、写真を撮ったり、定期的にショーに足を運んだりマーチャンダイズを買ったりしてね。

それほどスクワットがあるわけでもないし、倉庫やハウスでのショーがあるわけでもない。気難しいニッチが好む音楽に対応してくれる、いくつかの会場があるだけ。でも、みんな友達同士でお互いのことを知っているから、それぞれのショーでスタイルのクロスオーヴァーが起こっている。

グラインドとポスト・パンクが、スラッシュ・メタルとクラストが、パンクとロックンロールが一緒にやるっていうね。そしてツアー・バンドは宿泊する場所とローカルなショーのセッティングに関してはサポートをしてもらえるわ。特にショーをするために税関を頑張って潜り抜けてきた海外のバンドはね。

だけどツアー・バンドが来ることなんてそうそうないわ。年に一回もあればラッキーじゃないかしら。飛行機代が馬鹿みたいに高いことも、ツアーをしたところで、ここでかかったコストをペイできる可能性はほぼゼロだってことも、私たちは分かっている。

2000年代に出版されていたハードコア・パンク・ジンはほぼ完全に死に絶えた。だけど、このテクノロジーの時代にあっても未だに2、3のパンク・ジンが散発的に発行されてはいる。オーストラリアはどの都市も遠く離れた場所に位置しているけど、それでも私たちは色んなショーに足を運び、州と州とを旅してまわっては、音楽と共に良い時間を過ごしているの。

アデレイド Adelaide

アデレイドでパンク・ショーを企画するなら、ブッキングできるパブが2、3軒ある。だけどDIYなスペースとなると2ヵ所だけ。最近、再オープンを果たしたMad Mouse Alley。そして、地元のバンドや外国からのツアー・バンドのために、ショーと寝泊りする場所を6年も前から提供し続けているAnimal House。この2ヵ所ね。

LewisはAnimal Houseの設立当初からいる唯一のメンバーで、彼は同時にオーストラリアで最も強力なパンク・レーベル兼最大規模のディストロであるNo Patience Recordsを長年に渡り運営している。この数年間だけを見ても、彼はオーストラリアのベストなパンク・バンドをいくつもリリースしてい

るし、それらは様々なパンク・シーンからカルトな人気を獲得し続けているわ。

言及するに値して、時間をかけてチェックすべきバンドは、TEARGAS、BLOODCLOT FAGGOTS、CHROME DOME、STRAIGHTJACKET NATION、LAKES、そしてSUFFERってところかしら。

Lewisは最近だとTHEE NODESのオーストラリア・ツアーに尽力していた。THEE NODESは変化に乏しいオーストラリアでのショーに驚いていたけど、私の意見としては、あれ以上のものは望めないわね。ツアーからアデレイドに戻ってきたLewisはLAKESの新しい7インチにFLESH WORLDのデモを7インチ化したものの再プレスとか、オーストラリアのバンドのリリースを大量に予定しているわ(それらは現在、既にリリースされている)。LewisはBOTOXという新しいダーク・エレクトロニカ・プロジェクトにも注目していて、彼らはまだリリースがないんだけど、色々と計画が進行中みたい。

BLOODCLOT FAGGOTSのメンバーからなるVAGINORS(BLOODCLOT FAGGOTSのメンバーは元々SNAKE RUNというバンドをやっていた)のギタリストであるMooseは、VAGINORSのUSツアーから戻ると、よりストレートなハードコア・バンド、STARVATIONとTHE WEIGHTの活動に集中するようになったわ。それにLethal Dose Recordsというレーベルも運営している。

THE WEIGHTはオーストラリアの東海岸ツアーを終えると、『Suffer Eternal』10インチをLethal Dose Recordsからリリースした。INTERNAL ROTとMANHUNTのスプリット7インチも同レーベルから予定されているわ。オーストラリアのグラインドとハードコアのスプリットで時代を超越したオススメの一枚だから、ぜひチェックしてみて。

Mooseはレーベル/バンドと並行してパートナーと一緒にBlast Furnace Studiosというレコーディング・スタジオ兼リハーサル・スタジオもオープンさせている。

ゴス/ポスト・パンク・バンドのRULE OF THIRDSはCelesteとBenの2人によるプロジェクトなんだけど、どんどん良くなっているわね。Celesteはヴィジュアル・アーティスト兼バンドの写真を撮るカメラマンとして、アデレイドのアート・シーンにも関わっている。

BenはMajor Crimes Recordsを主宰していてRULE OF THIRDSのデモ・テープをリリースしている。HYDROMEDUSAはこの生まれて間もないレーベルによる初期リリース作品のうちの一つで、クラシックなオーストラリアのロック・サウンドを現代に甦らすべく、その扉を開いたところよ。同じようなスタイルのバンドがオーストラリアのパンク・シーンには少しだけいてね、メルボルンのPOWERやブリスベンのBLACK DEITYが該当するかしら。

このレーベルによる特筆すべきもう一つのリリースが、アデレイドではなくブリスベンのディオなんだけど、デス・バイ・シンセなMULTIPLE MAN。このレーベルは3つのそれぞれ異なる、且つ特徴的なサウンドのバンドを、パンク・シーンや他のシーンにもたらしているってわけ。

最も最近のリリースはアデレイドのバンド、DANNY WHITTEN'S VEINSのデモ・テープ。このバンドのTimは、Benと一緒にMajor Crimes Recordsを共同運営しているわ。DANNY WHITTEN'S VEINSのメンバーにはElliotという人物もいるんだけど、彼はVAGINORSのBoy Toyとしての名前のほうがよく知られているわよね。この数年の間に彼はいくつかのプロジェクトを始めていて、それらのカセット・テープを私はたくさん手に入れていた。だけどWET CLOTHというバンドでプレイしている彼を見かけてね、驚かされたわ!このバンドは世間知らずのクソガキ共による鼻クソみたいな最高のパンクね。まぁ、突然現れたと思ったらあっという間に解散しちゃったんだけど。

Elliotがやっているバンドの中でも勢いづいているのがSIMFUCKERSかな。SIMFUCKERSのデモはElliot自身のおふざけレーベル、Cosmic Autistic Recordsからリリースされている。このレーベルは周りが認識する前に消滅しちゃったけどね。

SIMFUCKERSでギターを弾いているRichardは教養に充ちてて且つニヒリスティックなハードコア・ファンジン、Inverted Forestを最近まで発行していたわ。もっと盛り上がるかと思ったんだけど、オーストラリアのカルト以外から称賛されることもなくてね。ここ数年のアデレイドで唯一安定して発行されていたファンジンだったんだけど。

Richardは今、このファンジンをほっぽり出して新しいファンジンを始めたの。第一号はタスマニアのDown And Outジンとの共同発行だったわ。アデレイドには他にも少しだけファンジンがあったんだけど、その中の一つが、Elliotがシーンに関わるようになってから作ったファンジン。楽器や機材を比較してレヴューするという、彼の自己満足のためのものだったわね。

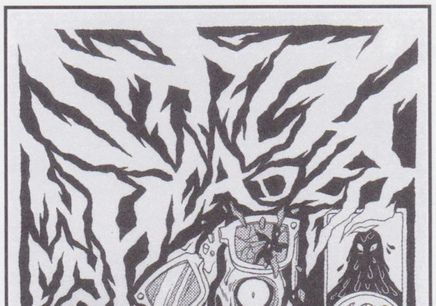
シーンに関わっているバンドや組織は他にもあるにはあるけど、みんなシーンの中心からは距離を取り始めているわ。

Porthole RecordsとClarity Recordsは地元のパンクや古い音源をチェックするには良いレコード店よ。

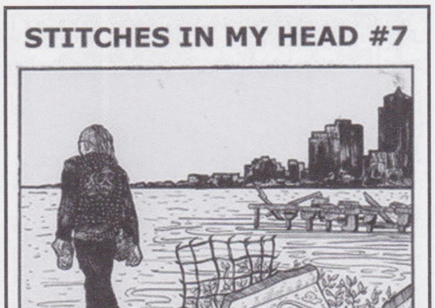
ポスト・パンク・バンドのNO ACTIONはLPを製作中なんだけど、彼らはライヴを全然やらなくてこの6ヵ月でショーを行ったのは一度だけという有り様。

ANIMAL TRAPSはダーク・ポスト・パンクの類いだったけど、一般受けして幅広いオーディエンスを獲得したいみたいで、もっと"快い"サウンドへと変貌を遂げたわ。

BRUFF SUPERIORは"dole wave"(※doleは"施し～慈善的な"という意味)なサウンド。オーストラリア人や同世代の人にはニュージーランドのFlying Nunっぽいサウンドと言えば伝わるかしら(※Flying Nun Recordsは80年代に設立されたポスト・パンクのレーベル)。だけどもっとおぼろげなサウンドね。



STITCHES IN MY HEAD





VAGINORS

最後に、DNAファンジンについて言及したい。オーストラリアでは最も長い歴史を持つパンク・ファンジンで80年代の初頭から続いている。記事が盛り沢山で、オーストラリアのパンクの始まりから現在に至るまでを知るには最適。ただ残念なことに誌面のレイアウトもしてないし視覚に訴えてくるところもないから、本当に退屈で私には読めたものじゃないのよ(そうは言っても情報を伝えてはくれるんだけどね…)。

ブリスベン Brisbane

Endless Blockadesレーベル&ディストロは2000年代後半に入ると失速して、DEATHCAGEの「From Despair To Where」7インチを2008年にリリースしたのを最後に終わっちゃったみたいね。私が話せる限りでは、それが最後のリリースよ。

INSURGENTSやPISSCHRIST、DRAFT DODGERにSCHIFOSIといったクラスティーズもリリースしていたけど、こういったバンドも今では全て解散してしまっている。

最近、パンクの墓場に埋葬されてしまったのが、ここオーストラリアでも人気があったベテランのロウ・パンク・マスター、TEARGAS。彼らは10年に渡りオーストラリア/ブリスベンや国外で素晴らしいショーを見せつけてきたけど、遂に燃え尽きたみたい。

日本のFORWARDとTEARGASとのスプリット7インチ「Burning Spirits」をリリースしたHardcore Victimが企画した、FORWARDとのツアーが彼らのラスト・ツアーとなった。

私はメルボルンでTEARGASのショーを見たわ。エモーショナルだったけど、それ以上に狂いまくってて、本当にヤラれちゃった。TEARGASは終わったけど、メンバーは新たなプロジェクトに取り掛かっている。

Geordieはオーストラリアではとても珍しいスラッジ・ドゥーム・バンド、GOLDEN BATSで長いことギターを弾いているわ。このバンドはもっとメタル寄りだけどね。同じようなポジションにいるのがBLACK DEITY。パンク・シーンで活動しているドゥーム/ストーナー・ロックンロールで、オーストラリアのバンドではあまり類を見ないわ。

そうそう、HEROIN SSというバンドがいて何本かのデモと7インチを一枚出したけど、3年という短命であっさりと終わってしまったわね。

TEARGASだったWillはショーのブッキングをしたりLAST CHAOSというバンドでプレイしている。他のメンバー、MurdockとDeclanはオーストラリア全土でパンク・アートをやっているんだけど、まぁ、まだほとんど地元向けかな。

Murdockは2014年のTotal Attack(※オーストラリアのハードコア・イヴェント)のロゴをデザインしたわね。それとLAST CHAOSのカヴァー・アートも。

彼のレーベル、Nuclear Bloodは主にディストロをしていて地元や国外のロウ・パンク・バンドの作品をショーに持って行っている。一応リリースもあるんだけどLAST CHAOSしか出していないのよね。

LAST CHAOSとVAARALLINENのスプリット7インチはNuclear BloodとHardcore Victimの共同リリースだったんだけど、オーストラリアの2013年におけるベストなスプリット7インチの一枚に挙げられるわ。

彼らはCRUEL MACHINEやSHIRTLIFTERS、ZODIACといったバンドとよくショーをやっているからチェックしてみて。

Total Attackは現時点におけるオーストラリア最高のハードコア/パンク/ロウ・パンクのフェスティヴァル。1~2バンドがフェスのヘッドライナーとして全豪ツアーも敢行するんだけど、それ以外は全てオーストラリアのバンドが出演。

企画者の一人であるJaneはVISCIDというバンドをやっていたけど解散しちゃって、だけど今は新バンドTVSTDをやっているわ。クイーンズランド州はパンク・アートが活発で、JaneもSICK PEOPLEのTシャツのデザインをやっている。

そのSICK PEOPLEはストレートなハードコア・パンクスなんだけど、他ならぬTEARGASのメンバーだったNeil Bramleyも、素



UNPEOPLE Photo by Glan Schenau

晴らしいバンドだと称賛しているわ。

Sam McKenzieはSICK PEOPLEの7インチのジャケットを担当している。RickはRIPPED OFFという新しいバンドを始めていて、Nailgun Murder Recordsというレーベルも始動させたところ。ディストロとして始めたんだけど、制御不能なロックンロール・パンク・バンド、WOODBOOTのデモ・テープをリリースしているわね。

Samに絵を頼むにはお金を払わないといけないんだけど、彼は沢山のパンク・アートを手掛けるようになっていて、自身のバンドのOCCULTSにWOODBOOT、それにUNPEOPLEなどね。他には言及したSICK PEOPLEみたいな地元のバンドも。そうそう、外国のNOBUNNYのアートワークもやっていたわね。

OCCULTSはダーク・ポスト・パンク・バンドとして勢いづいてきているわ。彼らの7インチはNo Patienceがリリースしている。この手のジャンルが一時オーストラリアでも流行ったんだけど、似たようなスタイルの新しいバンドにはMASSES(メルボルン)、RULE OF THIRDS(アデレイド)などといったバンドがいる。

OCCULTSはブリスベンでショーをする際にMULTIPLE MANとよく共催するんだけど、彼らはこの街で他に類を見ない存在感を放っているわ。

MULTIPLE MANはシンセ・ツインズでGary NumanやCararet Voltaireからの影響を受けている。7インチとテープをいくつか出しているんだけど、遂にファースト12インチをNo PatienceとBurka(スペイン)からリリースした。

OCCULTSのSamとMULTIPLE MANのSeanは、LAST CHAOS、TVSTDのメンバーらと共に終末的な6人組ロウ・パンク・バンド、UNPEOPLEを結成していて、彼らのデモはメルボルンのBlow Blood Recordsからリリース済みよ。

SICK PEOPLEのギタリストはブリスベンのグラインド・バンド、COFFIN BIRTHでもギターを弾いている。

SHACKLESはバイロン・ベイを、素晴らしいアンダーグラウンド・オーストラリアン・パワー・ヴァイオレンスの土地として一躍有名にさせたわ。この手のサウンドをオーストラリアで牽引していたバンドはEXTORTIONだったんだけど、彼らは休止状態と言っても差支えないほどにほとんど活動していないからね。

バイロン・ベイは厳密にいえばニュー・サウス・ウェールズ州なんだけど、ブリスベンにかなり近いし(※車で2時間程度)ショーが頻繁に開かれる大きな都市よ。

SHACKLESはLPを最近リリースしていて、今後の作品のために曲も書いているみたい。メンバーのMarkはレーベル、Castigatedを主宰していてリリース予定が目白押し。直近だとSHITGRINGERの作品が控えているわ。

このエリアの新しいバンド、MIGRAINEはデモをパースのAsbestos Death Recordsから発表済みよ。あと、バイロン・ベイのニューフェイスと言えばBRAIN TRAUMAとCOMMON ENEMYかな。

ハードコア・パワー・ヴァイオレンスのMANHUNTはSHACKLESと一緒にショーをすることもあったんだけど、単独7インチとメルボルンのINTERNAL ROTとのスプリット7インチをリリースした後に活動停止してしまった。解散する前にはSTARVATIONとの全国ツアーも敢行したし、メルボルンのSxEハードコア・フェス"Break The Ice"のヘッドラインとして地球の裏側からやってきたRINGWORM(※アメリカのメタルコア・バンド)のサポートをしたこともあったわね。

MANHUNTのヴォーカルだったAlixは現在アデレイドに引っ越してパートナーのMooseと一緒にLethal Dose Recordsを運営している(アデレイドの章を読んでね)。同じくメンバーだったLenaは"Do It Together"という、多種多様なジンを扱うディストロを再開したわ。

他の州と同様に、良いレコードをチェック



MULTIPLE MAN　Photo by Glan Schenau

オーディエンス　Photo by Christina P



するのに使えるレコード店が1、2軒はあるかもしれないけど、シーンに何かしらの影響を与えることはない。

どの州にも小規模なレーベルとディストロがあって、それが中心的な役割を果たしているからね。

Eternal Soundcheckはパンク・ショーのドキュメンタリーを撮影して、誰もが見られるようにYoutubeにアップするということを始めたの。始動させてから2、3年ほど経った頃に、主宰者でありKITCHEN'S FLOOR(2009年にリリースされた彼らのLPは最高の一枚よ)のメイン・メンバーでもあるMatt Kennedyはディストロもするようになった。最近ではレコード・レーベルとしての活動も視野に入れているみたい。おまけに彼は毎週ZZZZ(ブリスベンのインディペンデント・ラジオ局)で、"Underground Australiana"というコミュニティ・ラジオ・ショーもやっている。オーストラリアの最高のポスト・パンクがかかっているわ。

Mattと一緒に暮らしているJoe(彼はEternal Soundcheckもしばらく手伝っていた)はBedroom Suck Recordsを主宰していて、"パンク"のクラシックなレコードの類いを何枚かリリースしている。だけどこのレーベルはもっとメロウな、流行りのオーストラリアン・インディー・ロック寄りなのよね。国内外の幅広い、流行に敏感なオーディエンスからは支持されているみたい。いくつかチェックするに値するバンドもいるわ。有名なパンク・バンドのメンバーが他のジャンルに進出すべく、サイド・プロジェクトとしてやっているバンドなんだけど、LOWER PLENTYにBLANK REALM、LOOSE GRIP、SLUG GUTSとかかしら。

Brendonがやっていたnegative Guest Listは2011年の初めに消滅した。それでも私はこのレーベルがリリースした作品について言及したい。彼が急逝した後、ブリスベンのパンク・シーンにはポッカリと穴が開いてしまったのだから。

当時、彼はレーベル名と同じ名前がつけられたファンジンを作っていたんだけど、最初のリリースはそのファンジンが付属したコンピCDだった。他にもコンピをリリースしつつ、彼は自身のバンドであるWHITE COPや気難しい彼の眼鏡にかなったオーストラリアのロクデナシのパンク・バンド、HATEFUCKやLOW LIFE、MEAT THUMP、DEGREASERなどの作品を手掛けたの。そうして短い数年間だったけど、オーストラリアの大地に彼はゲロをブチまけまくったってわけ。それはほんの一時のことだったけど、唯一無二の印象を残したわ。

振り返ってみると、彼はオーストラリアのパンクが骨の髄までしみこんだ、他に類のないセンスを持っていた。彼は30冊以上ものファンジンを、確か2年間のうちに発行したの。そしてそれ以降、ブリスベンからパンクのファンジンが登場することはなかったし、彼の知識に裏打ちされた著作に匹敵するほどの本は、オーストラリア中を探しても見つからないわ。

Tenth Courtは現在急成長しているスタイル、"ビューティフル・スカムバッグ・タレント"を扱う新しいレーベルよ。ありとあらゆる叙述的な言葉を多用する、荒涼としたヘヴィでスラッジーなノイズ・ポップと言うべきかしら。MARTYR PRIVATESとTHIGH MASTERのスプリットEPテープの他に、YOGHURT BLOODの「Collected Works 2009-2013」テープなどをこのレーベルはリリースしているわ。

彼らと一緒にショーをしている似たようなサウンドのバンドと言うと、PLEASURE SYMBOLSが挙げられる。Phoebe Paradise(ブリスベンの同名アーティストとは別人よ)とOCCULTSのJasmineの女性2人組によるプロジェクトで、この新たな"コールド・ウェーブ"バンドは生まれたばかり。

Shedstock Fest 2014はMULTIPLE MANとDEAD SHRED、BLANK REALMとSEWERSなどが一堂に介すフェスティヴァル。ブリスベンの荒んだポスト・パンクとシンセ・ウェーブ・バンドを体感したいならオススメね。

[以下、次号に続く]

LASHING SPEED DEMONS VOL.18

EL ZINE的LAメタル講座

はい、前回のNew Wave Of British Heavy Metalに続き、今回はLAメタルです。今回のお題も山路編集長のリクエストによるものです。それにしても、NWOBHMの次にLAメタル…とくる編集長もどうかと思うが、引き受ける俺も俺だよな(笑)。…いやいや、もちろんここでも単なるLAメタル・ガイドじゃなく、EL ZINEにどれだけ引き寄せられるかというところで話を進めてみたいと思いますので、よろしくお付き合いください。

TEXT:大越よしはる

…LAメタルというと、イコール"ヘア・メタル"みたいなイメージが強い。もちろんその一面は否定しない、というかグラマラスなイメージはもちろんLAメタルの(最も)大きな要素だ(アメリカでは"LAメタル"という呼称はなく、"グラム・メタル""ヘア・メタル"と呼ばれているらしい)。しかしそれだけがLAメタルじゃないし、その成り立ちと影響はなかなかに興味深いものがあると思う。

まずLAメタルはNWOBHMと違って、シーンを塗りつぶしたパンク/ニュー・ウェイヴに対する反動…などではない。イギリスと違って国土もシーンもあまりにも大きいアメリカでは、パンク/ニュー・ウェイヴがシーンを席巻するような一大潮流になることはなかった。それらは基本的に"点"でしかありえず、ほとんどは全国的な広がりを持たずにそれぞれの都市や地方でアンダーグラウンドなシーンを形成するにとどまっていた。

それでも時代特有の空気感のようなものはやはりあり、70年代末～80年代初頭にかけては、メジャーなシーンにあってもそれまでのいわゆるアメリカン・ロックとは違ったタイプのバンドが多く出て来ていた(THE KNACKのブレイクがそれを象徴していたと思う)。そしてそれは当時のイギリスのシーン同様、旧来のハード・ロッカーの退潮と同義でもあった。

70年代までのアメリカのハード・ロックと言えば、MOUNTAINにGRAND FUNK RAILROAD、テッド・ニュージェントにAEROSMITHにKISSにANGEL、そしてアリス・クーパーやMONTROSE…といったところだったが、80年代初頭、その多くはかなりパッとしない状況にあった(BLUE OYSTER CULTとZZ TOPは気を吐いていたが)。

一方で、新しい世代は確実に登場していた。その代表格は西海岸から飛び出してギター奏法に革新をもたらしたVAN HALENだろう。そして、英国やヨーロッパの新たなハード・ロック/ヘヴィ・メタル勢のアメリカでの成功。NWOBHMから突出したIRON MAIDENとDEF LEPPARD、初期の純英国的なハード・ロックから切れ味鋭いヘヴィ・メタル・サウンドに変化を遂げたJUDAS PRIEST、ドイツから出て世界的成功をおさめたSCORPIONS、同じくオーストラリアから世界を席巻したAC/DCなど。

LAメタルは、パンクや何かへの反動ではなく、先に挙げたような新手のハード・ロック/ヘヴィ・メタル勢をロック・スターの新たなロールモデルとして、「俺たちも一旗揚げたるぜ」となった若い連中が起こしたムーヴメントだった…と、もの凄くざっくり語ればそういうことになると思う(ポップ一辺倒だった当時のヒットチャートに対する反動、ということも言えなくはない)。

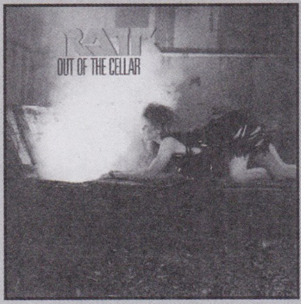
しかし、70年代末のロンドンではなく80年代初頭のハリウッド。新たに出てきた若いバンド連中の大半は、IRON MAIDENのようでもなければJUDAS PRIESTのようでもなかった。そこはお国柄というやつだろう。そもそもイギリスのパンクにあったようなアンチな空気感ではなく、基本的にメジャーなロック・エンターテインメントへの夢がベースにあったことでもあり。

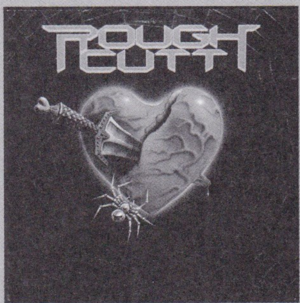
初期のMOTLEY CRUEなんかのルックスを見れば、JUDAS PRIESTあたりがお手本になっていそうなことは明らかだ。しかし彼らはそこに留まらなかった(そもそもLAの気候に全身レザーはあんまり合わな

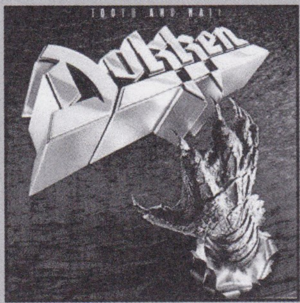
















かったというのもあるだろう)。一方で西海岸の若いバンド連中がエンターテインメント性を重視してヴィジュアルを過激化させていく上で、海外(英国)メタル勢以上にモデルとして重要だった存在に、NEW YORK DOLLSがある。MOTLEY CRUEも、3rdアルバム『THEATRE OF PAIN』の頃にはスパンコールでキメたドラッグ・クイーンまがいのグラマラスなスタイルに転じていたが、それは確かにNEW YORK DOLLSを思わせるものだった。ロンドン・パンクにも大きな影響を与えたNEW YORK DOLLSだったが、アメリカではどうかするとパンクス以上にヘヴィ・メタル勢が大きく影響されていたのは興味深い(NEW YORK DOLLSだけでなく、AEROSMITHの影響も相当大きかったと思うが)。

NEW YORK DOLLSに限らず…コレはやはり世代的なモノだと思われるが、ロンドン・パンクやNWOBHM勢の一部同様、西海岸で活動していた多くのメタル・バンドがグラム・ロックの影響を受けていた。QUIET RIOTがSLADEの曲を続けてカヴァーし、MOTLEY CRUEがBROWNSVILLE STATIONのカヴァー「Smokin' In The Boys Room」をヒットさせたことなどが象徴的だ(まあ、BROWNSVILLE STATIONがいわゆるグラムかというと、また微妙だが)。BLACK 'N BLUEもTHE SWEETの「Action」をカヴァーしていた。かくてグラマラスなルックスとR&R寄りのヘヴィ・メタルを携えた若いバンドが大挙登場する。

それらの中で最も早い時期にアルバムをリリースしていたバンドとしてMOTLEY CRUEが挙げられるが(1981年に『TOO FAST FOR LOVE』を自主制作してデビュー)、先に商業的ブレイクを果たしたのはQUIET RIOTだった。70年代後半に一度デビューを果たしていた"再デビュー組"(結成は73年)だったが、SLADEをメタリックにカヴァーしたシングル「Cum On Feel The Noize」、そしてアルバム『METAL HEALTH』(83年)はたちまち全米を席巻する。『METAL HEALTH』は全米チャートの1位となり、この瞬間にLAメタルの勃興がスタートしたと言っていいだろう(まったくの余談だが、実は俺が生まれて初めて買ったLPがコレだった)。

1stアルバム『OUT OF THE CELLAR』(84年)を全米チャート7位に送り込み、シングル「Round And Round」を大ヒットさせたRATTが"Ratt 'n' Roll"を標榜して後に続いた。商業的成功ではやや後れを取ったMOTLEY CRUEも、2ndアルバム『SHOUT AT THE DEVIL』(83年)は全米チャート17位となっている。

『METAL HEALTH』の大ヒットは、シーンに衝撃を与えた。ヘヴィ・メタルのアルバムが全米1位になるなどということはそれまでのアメリカン・ロック界では考えられなかったが、実際にそうなってしまえば、ジャンルが何であれ売れる以上は商売にするのがショウビズだ。あとはもうROUGH CUTTにAUTOGRAPHにDOKKENにKEELにPOISONにWARRANTにGREAT WHITEにSTRYPERにLIZZY BORDENにLIONにSTONE FURYにODIN…と、あとからあとからバンドが湧いて出た。

それらが全部きらびやかでグラマラスな"ヘア・メタル"だったワケではない。甲冑風(?)のコスチュームで知られたARMORED SAINTあたりを筆頭に、OMENやWARRIORなど、王道的なブリティッシュ・メタルの影響を受けたヘヴィなバンドも少なくなかったし、WARLORDあたりは後の"エピック・メタル"系の元祖のひとつと言えるだろう。スウェーデン出身で"ネオ・クラシカル"の帝王となったあのイングヴェイ・マルムスティーンも、渡米して加入したSTEELER以降、ALCATRAZZ～RISING FORCEと一貫して西海岸を拠点にしていたからこそビッグになれたとも言える。何よりスラッシュ・メタルの帝王SLAYERも、LAから出てきたバンドのひとつだった(通常LAメタルに含まれることはまったくないものの、SLAYERというバンド名にはちゃんと"LA"が含まれている!…閑話休題)。

LAメタル勃興の口火を切ったQUIET RIOTが1973年に結成されていたように、当時のシーンにはヴェテランや"残党"も混じっていた(そのあたりはロンドン・パンクやNWOBHMにも共通する)。JOURNEYを思わせるメロディアスなアメリカン・ハード・ロックで人気を得たGIUFFRIAは元ANGELのキーボーディスト、グレッグ・ジェフリアが率いていたし、イングヴェイ・マルムスティーンが注目されるきっかけとなったALCATRAZZは元RAINBOWのシンガー、グレアム・ボネットのバンドだった(もっともALCATRAZZは



MOTLEY CRUE

LAメタルに分類されることはあまりないが)。KING KOBRAに至っては、元VANILLA FUDGE他の大ヴェテラン、カーマイン・アピス(ドラム)が金髪の若いメンバーを集めてLAメタルに参入したというケース。

個人的に一番強烈だったのは、何と言ってもW.A.S.P.に尽きる。NEW YORK DOLLS人脈の残党と言えるブラッキー・ローレス(アーサー"キラー"ケインのバンドのメンバーだったが、当時は"元NEW YORK DOLLS"と紹介されることも多かった)がグラムとメタルのいいとこどり…ならぬ、"悪いとこどり"をしたとしか思えない、露悪的でショッキングなグラム・メタル(?)は、当時かなり衝撃的だった(股間にノコギリ…)。

NEW YORK DOLLSの影響や人脈がそうやって生きていたことでわかるとおり、パンク・ロックとは縁が遠いように見えたLAメタルには実のところグラムを含むプロト・パンクや、あるいはパンク・ロックそのものの影響が少なからずあったと言える。LAメタルのムーヴメント最末期に、元HANOI ROCKSのベーシスト、サム・ヤッファが参加したことで話題になったJETBOYというバンドがいたが、バンド名がNEW YORK DOLLSの曲名に由来することは明らかだったし、何よりヴォーカリストのモヒカンが凄かった(笑)。その後MOTLEY CRUEがSEX PISTOLSの「Anarchy In The UK」をカヴァーした時も、唐突に感じた人はそれほど多くなかったのでは、と思う。

しかしブームの常として、LAメタルも長続きしなかった。青田刈り状態で続々とデビューするバンドでシーンは飽和状態に。MOTLEY CRUEがアルバムのリリース毎にチャートでの順位を上げ、LAメタルの一バンドに留まらない人気を確立していく一方で、QUIET RIOTやRATTは急激に失速。LAメタルのイメージは急速に陳腐化する。

80年代後半に入ってもFASTER PUSSYCATやL.A.GUNSなど、LAからメタル系バンドのデビューは続いていたが、その中から飛び出した最後にして最大のスターがGUNS N' ROSESだった。AEROSMITHをカヴァーする一方でU.K.SUBSやTHE DAMNEDやDEAD BOYSなどをカヴァーした彼らは、それまでのLAメタル勢とは比較にならないレベルでパンクからの直接的な影響を示していた。そしてそのハイブリッドな音楽とキャラクターで、LAメタルどころかハード・ロック/ヘヴィ・メタルというジャンルを超えた人気バンドとして絶大な支持を得ることになる。その傍らで、ムーヴメントとしてのLAメタルは既に終息していた。

80年代…グラマラスでけばけばしかったのはLAメタル勢だけではなかった。MTVに溢れたDURAN DURANやTHOMPSON TWINSなどニュー・ウェイヴ以降のポップ・バンドも同様。LAメタルが衰退した頃にはそれらのポップ勢の多くも失速。ここで改めて"反動"が起きる。言うまでもなくグランジだ。

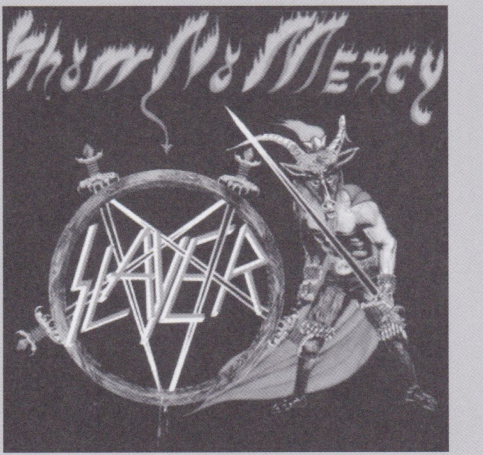
そして"反動"は、それ以前にも起こっていた。LAではなく、同じ西海岸のサンフランシスコで。グラマラスなLAメタル勢を"ポーザー"と揶揄するスラッシュ・メタル勢が、サンフランシスコを中心に爆発的に湧いて出る。その反動ぶりは、そもそもLAメタルの興隆あってこそ、という気もする。

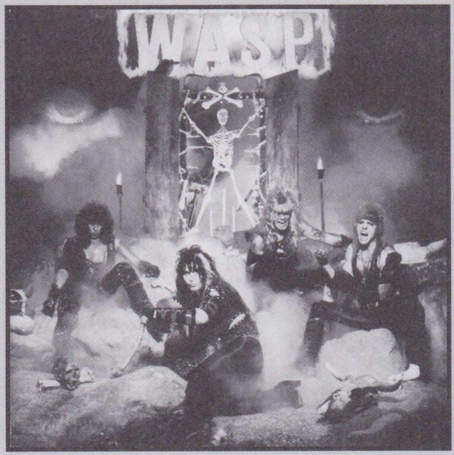
今となっては時代の徒花的なイメージも強いLAメタルだが、そのグラマラスで陽性な音とファッションは、実を言うとパンク系のバンドにも少なからず影響を与えている。初期は60年代風のガレージ・パンクだったTHE PANDORASは、80年代後半になるとあからさまにメタル化。末期のルックスは完全にLAメタル風で、キム・シャタック(ベース)なんかはコレが後にTHE MUFFSを結成する人…とは信じられない。

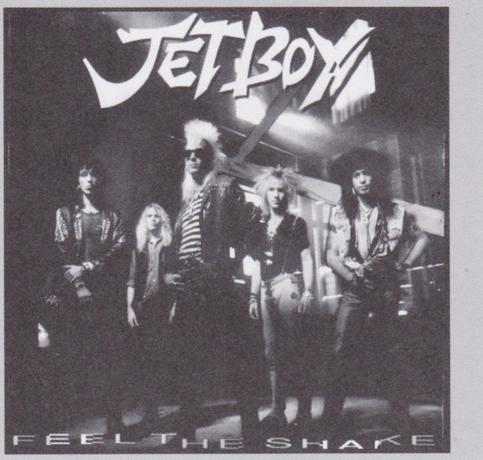
元GERMSなどのメンバーによって結成された45 GRAVEも然り。独自のゴシック風パンクを基調としていたが、80年代半ばにはハード・ロック色を強め、アリス・クーパーの「School's Out」をメタリックにカヴァーしていたりする(もっとも、この人たちの場合は直接的に影響されたというよりも、たまたまシンクロした部分が大きかったのかも知れないが)。

90年代の結成当時は"女子高生ラモーン・パンク"だったTHE DONNASも、00年代に入ってメジャー・デビューする頃には一気にハード・ロック化。THE RUNAWAYSあたりを通り越してジョーン・ジェットがLAメタル化したような音を出していた(まだ活動しているんだろうか)。

他にもMxPxやBROKEN DOLLがPOISONを、K.O.G.A.の古閑社長率いるROCKET KがGUNS N' ROSESをカヴァー。それらポップ・パンク勢はまだわかるが、元PAVEMENTのスティーヴン・マルクマスがL.A.GUNSを、元DINOSAUR Jr.のルー・バーロウがRATTをカヴァーしたりも。スティーヴンは実際L.A.GUNSが好きだったらしいが、ルーによる「Round And Round」のカヴァーは、かつてAZTEC CAMERAがVAN HALENの「Jump」をカヴァーしたような批評精神に基づくものではなかったかと思う。好むと好まざるとに関わらず、なんだかんだで無視出来ない存在だったのだ、LAメタル。











ACCIDENTE

**スペインはマドリッドを拠点に活動しているポリティカル・メロディック・パンク・バンド、ACCIDENTE。
紅一点Blancaの、軽やかでありつつも切実に訴えかけてくるヴォーカル含め、本稿で名前が挙げられているような女性ヴォーカル～ユーロ・メロディックものが好きな人のハートを完璧に撃ち抜いてくるサウンドが身上と言えるバンドです。これまでの音源は、2011年発表のセルフ・タイトルの1stアルバムと、2014年発表の2ndアルバム『Amistad y Rebelión』(friendship and rebellion)がありますので、この辺(どの辺?)を掘り下げている方は是非チェックしてみてください。
ギターのPabloが苦手な英語を頑張って、4ヵ月もの時間をかけて(…長かった)インタヴューに応じてくれました。**

■ACCIDENTE以外にプレイしている/いたバンドはありますか?

「そうだね、Blancaを除いた全員でUGLY BASTARDSというバンドをやっていたんだ。CarlosとPabloはエモ/クラスト・バンドのËBOLAでもプレイしていたし、MikelとAlbertoとCarlosはMANTA ELÉCTRICAというバンドもやっていたんだ。それにBlancaはONDA GASOLINAで歌っていたよ。まぁ、最悪なバンド名だよね、ハハハ!!…だけど素晴らしいバンドだったよ!今、CarlosはSKAINHEADでスカをやってて、RUDE PRIDEではOi!をプレイしている。Blancaは新たに始動したバンド、SCARFÓもやっていて、RancioはTHE SMITHERSというプロジェクトでベースを弾いているね。
僕らがこんなにもたくさんのバンドをやっていることに初めて気がついたよ。そりゃ歳もとるわけだね。だけど僕らは最高の時間を過ごしているよ!!!」

■ACCIDENTEは女性ヴォーカルですが、その点に関しては当初から意識していましたか?どういった経緯で結成したのでしょう?

「そうだな、僕らがUGLY BASTARDSをまだやっていた頃、"una y otra vez"という曲で歌ってもらえないかBlancaにお願いしたことがあったんだ。僕らは女性ヴォーカル・バンドの大ファンでね、THE ASSASSINATORSやMASSHYSTERI、DAY BY DAY、PREYING HANDS、BURNING KITCHEN、そしてPOST REGIMENTといったバンドさ。それにティーンエージャーの頃からメロディック・ハードコア・シーンのバンド、NOFXやBAD RELIGIONなんかも好きなんだよ。それからマドリッドの、伝統的且つ非常に政治的なパンク・シーンを知るようになってね、それらが僕らに影響を与え、そしてバンドを始めるモチベーションとなったんだ。これがACCIDENTEはじまりの物語。他に大切なことといえば、僕らはバンドを始める前から親しい友人同士で学校の同級生だったってことかな!!」

■この、ACCIDENTEというバンド名にしたのはどうして?

「うーんとね、僕らはショート・バンド・ネーム・ラヴァーだからさ、ハハハ。ACCIDENTEって直接的な言葉だよね。だけど考えてみれば、この言葉は多くの異なる事柄を指しているよね。良いことも、そして悪いことも。想像できるほど単純ではなく、多くの可能性をはらんでいる言葉だと思うんだよ。それと、ちょうど僕らがバンド名を決めようとしていたときに、僕らは車で事故っちゃってね。練習に行く途中での出来事だったんだけどさ。それで"頸部外傷"を負ったのでかなりの額の保険金が手に入ったんだ。僕らがこの忌々しいバンド名を授かったのはまさに運命だったのさ、ハハハ!!!」

■PETROGRADやTHE ASSASSINATORS、LOST WORLDあたりを彷彿とさせるサウンドですが、結成当時に意識していたバンドはいましたか?

「前述したように僕らはPOST REGIMENT、

BALLAST、BURNING KITCHEN、APOCALIPSTIX、WHITE LUNG、LOST WORLD、ASFIXIAなんかが大好きなんだ。女性ヴォーカルのメロディック・パンク/ハードコア/クラストだね。それにいくつかのアナーキスト・バンドも聴いて育ったんだ。CRASS、SIN DIOS、LÁGRIMAS Y RABIA、KARTÓN DE ZUMO、INUGAMI、そしてRIP。僕らのやることには、彼らからの後押しもあるね」

■アメリカのメロディック・パンク・バンド、GREEN DAYやBAD RELIGION、NOFX、それにFat Wreckがリリースするようなバンドについてはどうですか?

「そうだね、高校生のときにそういうバンドを発見して聴いてきたんだ。スケボーとそれに類するやつもね。だけど80年代のスパニッシュ・パンク、ESKORBUTOやRIPといったバンドもたくさん聴いてきたよ。君が若かった頃も、こういうバンドから聴き始めたと思うんだ。それと同時に僕らはCHOKING VICTIM、GOOD RIDDANCE、SNUFF、RANCID、LEFTOVER CRACK、MINOR THREATなんかも大好きだったね」

■曲作りで大切にしていることは?

「誰かが曲を作ってくると、それを大幅に組み立て直すんだ。そうしてメンバーみんなの個性を曲に注ぎ込んでいくと最終的にそれがACCIDENTEのサウンドになる。それが一番大切にしているところだと思うよ。それと、練習中に携帯電話で曲の仮の状態を録音しておくこともあるんだ。それをBlancaが自宅に持ち帰って、ヴォーカル・パートと歌詞を書くこともある。すると曲はまた別物になるし、大抵とても良くなるのさ、ハハハ。もう鳥肌が立っちゃうくらいにね」

■2ndアルバムのタイトルを、"Amistad y Rebelión(friendship and rebellion)"としたのはどうして?意図しているところは何でしょうか?

「僕らの生活を集約している良いタイトルだからさ。僕らは友人同士からなるバンドだけど、政治的な意見やその実践、ライフスタイルをシェアすることによって、友情はより強固なものとなっているんだ。そして抵抗することによって、僕らは数多くの友人を得てきた。僕らにとってのパンクとは、音楽をシステムに対する脅威へと変換するものであり、それと同時に、勇敢な人々をサポートし団結させるものでもあると信じているんだ」

■歌詞についても聞かせてください。

「Blancaが歌詞を書いているよ。音楽を通して自分たちのアイデアを表現しようとしている。けど、簡潔に説明するのは難しいね。時々思うんだ。パンク・ミュージックの大切なメッセージはスラム街の壁に阻まれて、人々の元に届けることができていないんじゃないかなって。そして僕らの感覚と活動をみんなと共有できていないんじゃないかってね。だからお決まりの方法とは違ったやり方で試みているんだ…。たとえ音楽がそれ以上でも、それ以下でもないものだったとしても、僕らは言葉を慎重に選択している…。使う言葉には注意を払っているし、僕らのアイデアができるだけ届けられるようにと活動しているんだ。僕らのBandcamp(http://accidentepunk.bandcamp.com/)で、英訳した歌詞を見ることができるよ。基本的に僕らが日々体験したことについて歌っている…。出くわすジレンマ、内面に抱えた恐怖、僕らが選び取った危険性、そして僕らを元気づけてくれる、守るべき価値のある人々についてだね…」

■マドリッドのパンク/ハードコア・シーンはどんな感じでしょうか?女性はシーンに入りやすいですか?

「マドリッドに本当のシーンなんてないよ。そうだな、何かはある。だけどそれはシーン未満の、とても細分化されたものだよ。スタイルによってだったり、バンドの種類であったり、どこでプレイしているか、活動する動機は何か…。そんなものによって細分化されているんだ。Rock Palaceという場所がある。そこには多くの外国のバンドがツアー中に立ち寄って演奏していく。いくつかスクワットもあるけど、常に警察からの脅威にさらされている。僕らがショーをやるときは、スクワットのほうが普段は好きだよ。だけどスクワットじゃ何をするのも厄介でね…。ウェブでショーの告知を



するにしても、秘かにやらなきゃならない。でも例えば、とても遠くからバンドを招いたりする際には、確実にショーを行える、という保証が欲しいときだってあるよね。そういうときには、いくらかかるかにもよるけど、僕らは法的に認められた会場を選ぶようにしている。ギグが中止にさせられることなんてゴメンだからね。

女性がプレイすることに関してはよく議論しているんだけど、この都市は女性が演奏したり参加したりするには良い環境にあるんじゃないかな。バルセロナほど恵まれた環境ではないだろうけどね。実際、マドリッドにはかなりの数のガールズ・バンドがいるんだ。PERRAS SALVAJES、HARD DRUGS ABUSE、OBEDIENCIA、ROBO、FRAGA、RATA NEGRA、JUANITA Y LOS FEOS、TENSIÓN、SCARFÓ、GENDERLESS、PERRAS SALVAJES、PERRA VIEJA、RAW PAW、X-PRAYSといったバンドさ。…もちろん、もっと良くすることができると思う。だけど、今このとき、この場所で、それは起こると思うんだ。女性はどんどんパンクに参加しているよ。女性によるラジオ・ショー、LA CASA DE LA BOMBAやKATADOPEINといったものから、MIDDLE FINGER RESPONSEなんてパンク・ジンもある。今こそ偏見は終わるべきときさ。…パンクにおいても同じことだよ」

■2013年にはメキシコ/アメリカ・ツアーを、2014年にはヨーロッパ・ツアーを敢行しましたよね。

「2013年のメキシコ/USAツアーは素晴らしかったね。僕らのバンド・ブラザー、DIRTY REASON(アメリカ)と最高の時間を過ごしたよ。想像していたものより全然良かったね。演奏したいくつかのギグは、今でも僕らのハートに突き刺さったままだよ。音楽と人生経験を共有することができて感激したし、本当に素晴らしかった。去年の夏のヨーロッパ・ツアーも素晴らしかったよ。僕らはツアーをやって、新しい場所や人、バンドと出会うのがいつだって大好きなんだ。行く先々でのローカルな問題や独創性を知ることもできるし、みんながどうやって自分の内なる悪魔と戦っているかも知ることができる。ヨーロッパ・シーンの中でもベストなDIYフェスティヴァル、Puntalaフェス(フィンランド)でプレイできたのもラッキーだった。それにドイツやフランス、イタリア周辺のクールな場所を訪れることもできたしね」

■以前に別のスペインのバンドにインタヴューしたとき(CROSTA/vol.12に掲載)、スペインの金融危機について訊ねたことが



あるのです。その際に彼らは15M(キンセ・デ・エメ。スペイン全土に広がった経済的不公平を政府に抗議する"怒れる者たち"の抗議行動。この街頭占拠運動の出発点が2011年5月15日のスペインの首都マドリッドのプエルタ・デル・ソル広場だった)について話してくれました。あなたたちは自国の経済や政治についてはどう考えていますか?

「僕らはそのことについて、今では吐き気を覚えることしかできないね。君の想像を絶するほどの多くの汚職事件が、このひと月足らずで起こっている。みんなウンザリしているよ。人々の憐憫に乗じて負け戦から這い上がってきた新たな政治家"アイドル"に、多くの人々が最後の希望を託している。だけど実際のところ奴らは全員もれなくクソ野郎さ。

15Mは、諸問題に苦しんでいる人々に権限を取り戻すための試みとして良かったと思う。自分が抱えている問題と向き合い、自身の在り方に責任感を持つようになったからね。ただ、多くの矛盾もあった。だけど多くの人々は大切な方法と連帯について学んだのさ。そのことについては高く評価しているよ。つまりは団結すること、直接行動、横の繋がり、そして警察や法令が持つ真の役割について理解することなどね。しかし、こうして学んだにも関わらず人々はちょっとした失望感を味わったんだよ。この怒りは、本物の革命へとなりえたのにって。 ただその代わりに、"PODEMOS"という新たな政党が政局に割って入ったんだ。システムがすでに引き起こしている慢性疾患を、この政党も同じように引き起こすだろうと僕らは考えているけどね。僕らは権力を批判する、そしてそのアティテュードとは活動することにあるんだ。だって僕らが政治をやって何かを変えられる機会なんて得られるわけないだろ…。僕らが代替案を提示することはないし、自分たちの考えや、実際的戦略を追い求めることに変わりはないよ。…僕らはまだまだやれるのさ」

■カタルーニャ州の独立が話題になっていましたが、何か思うところはありますか?

「今、僕らが抱えているこの忌々しい問題から、新しい国家が誕生しようが本当知ったこっちゃないね。僕らはありとあらゆる国家というやつが大嫌いだし、抵抗している。資本主義と権力機構をそのままに独立を要求するということは、僕らが憎んでいるクソと同じになるということさ。まぁ、そうは言っても、スペイン中央政府は異なる地域における異文化やコミュニティに対して圧政的だった。…帝国主義が過去にしてきたことは今でも続いているんだ。ナショナリズムは表裏ある問題だよ」

■ところで、日本のバンドについては何か知っていますか?

「G.I.S.MやDSB、GAUZE、DISCLOSE、KURO、ACUTEといった日本のバンドは知っているよ。だけどもっと知りたいね!それに政治的なコレクティヴや活動についてもね!」

■今後の予定について聞かせてください。

「今度の夏に、アメリカの東海岸をツアーする話しをしているんだ。だけどまだ計画段階だね。メキシコにも戻りたいし、イングランドも訪れてみたい。そのための時間とお金があれば最高なんだけどね!」

■インタヴューさせてくれてありがとう。最後に日本の読者にメッセージを。

「そうだな、読んでくれてみんなありがとう。遠く離れた場所に住む人たちに、僕らの音楽とメッセージが届くなんて素晴らしいことだよ。パンクでいよう。そしてバンドを組み、みんなと一緒に戦うんだ。amistad y rebelión!!」

ES GIBT KEIN WERT

DISC REVIEW

気づいたら今号はもう1ページしか残っていなかったので(汗)、レヴューは4枚のみです。他にも購入したり頂いたりした音源がたくさんあるので、それらは次号で。
NEIGHBORHOOD BRATSのレヴュー本文でも触れましたが、彼らの解散の理由は、ツアー・スケジュール/リリースの遅れ/メンバー変更/健康上の懸念/DIYなパンク・ロック・バンドをする上でありがちなゴタゴタ、とのことです。詳しく知りたい方はNEIGHBORHOOD BRATSのFacebookにアクセスしてみてください。MRRのウェブにも"追悼"の言葉が掲載されていたりで、かなり注目されていたんだなぁ…と改めて思いました。
全然関係ないのですが、今やMyspaceが廃れて大半のバンドがBandcampに移行した感がありますよね(多分)。"反Myspace!"を掲げるアナーコ系のバンドが結構いたのに対して、"反Bandcamp!"を主張するバンドっていないような気がしませんか?…いるのかな?まぁ、スゲーどうでもいいんですけどね。



NEIGHBORHOOD BRATS
RECOVERY

2010年結成のカリフォルニアの女性ヴォーカル・パンク・ロック・バンド、待望の1stアルバム!アメリカのパンクの歴史、70年代から現代までを体現しているサウンドと言うと大袈裟ですが、翳りのあるLAパンクからアップチューンのハードコアまで、多彩だけど一切ブレていないのは並外れたセンスの成せる技か…。このバンドは名を残すに違いない!と確信した、革新の一枚。次回作はメジャーかな?…と思っていたら、今年一月に解散したってさ(ズッコケ)!アメリカは新しいバンドがドンドン出て来るけど、誕生と同じ速度で消滅しているのでした…。

(TAKEN BY SURPRISE 048)LP



DEMOLITION
BOMBENHAGEL

昨年11月のリリース以降繰り返し聴きまくっている、名古屋DEMOLITIONの10曲入り最新音源。イーヴィル&ヴァイオレンスなヴォーカルに雄々しいコーラス・ワーク。爆発的な瞬発力とそこから生み出される疾走感、そして劇的な曲展開。徹頭徹尾に渡り貫かれた、安息なき漆黒の世界観を支える鉄壁の完成度。本当、これを聴いて痺れない人はいないでしょう。無慈悲な音の絨毯爆撃に、最早ひれ伏す他はない。堅牢強固にして威風堂々たるハードコア&メタルコアの最高峰です。素晴らしい!

(DUEL RECORDS DMLS 001)CD



ATARAXIA
I FEAR WHAT THE FUTURE HOLDS

ex EVIL SUBSTITUTE、ex DESTRUCTION、ex PATRONAGEなどのメンバーによる、茨城のD-BEATクラスト・バンドのデモCD。"エモ"とか"ネオ"なんて前置詞がくっついて、クラストがちょっぴりオシャレ化する前の、90年代直下型ブルタル・サウンド!スウェーデンならDRILLER KILLER、アメリカならAUS ROTTEN、あとAUS ROTTENが来日/出演した頃のABC PARTISAN GIG@吉祥寺みたいな、あの頃の雰囲気を彷彿とさせる黒くて汚いクラストで渋いのです!ステンチ&ストレート・フォワードに圧倒する全5曲。

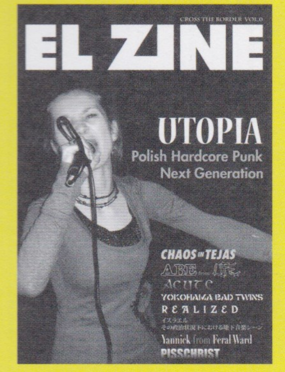
(爆音連鎖 001)CD



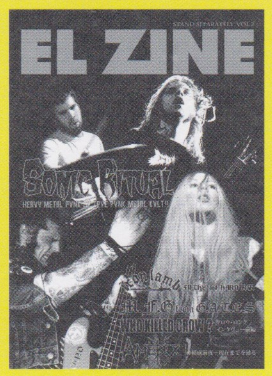
VA
SOUTH ISLAND PUNX PICNIC

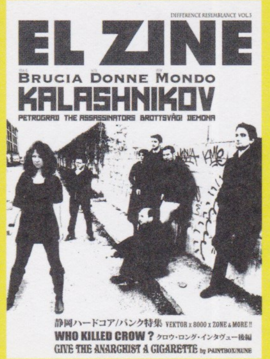
馬鹿衆、BIRDHELMS、疾刃、THE STRAY MAN、?YA BASTARDS?、HEART、JACK THE NICHOLSON'S、MADOVER、R.A.G.S.という沖縄の9バンドが各2曲ずつを提供。帯に書かれた、"問いも答えもひとつではない"という言葉が象徴するように、"何々系"と一様に括ることのできない自由で雑多な面々による、それぞれの想いと叫びが込められたオムニバス。中でもジャパニーズ・ハードコアの熱量で雪崩れ込んでくる馬鹿衆、そして雑食な音楽性と日本語のリリックが胸に突き刺さってくる?YA BASTARDS?が印象深いのです。

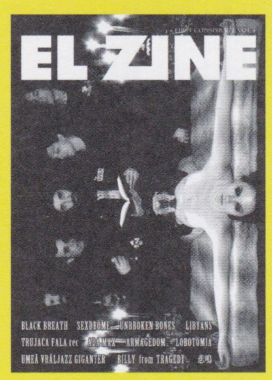
(MALA 0005)CD

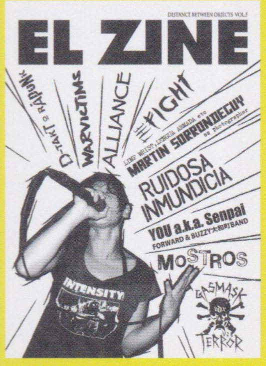


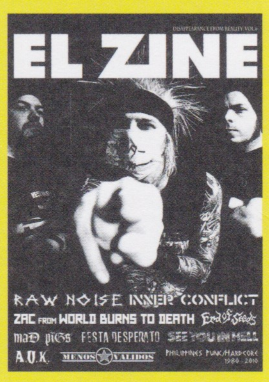


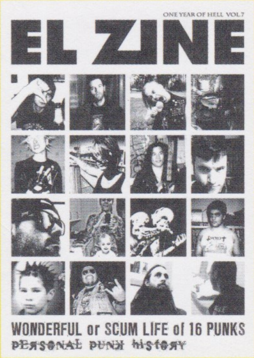


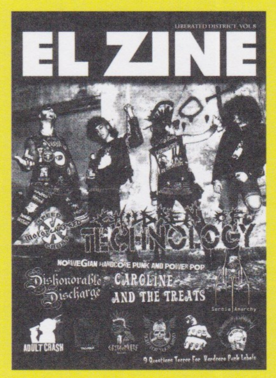


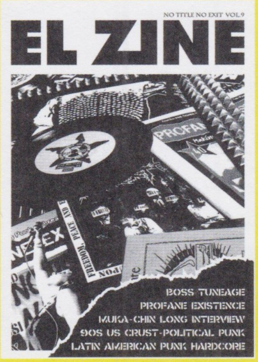


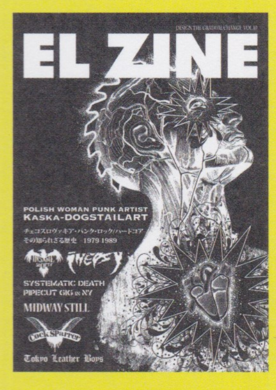


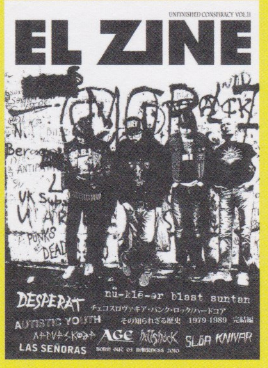


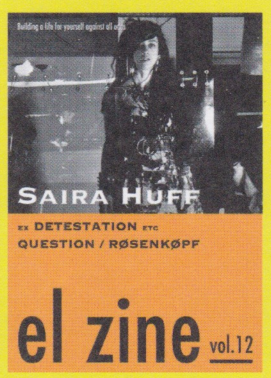


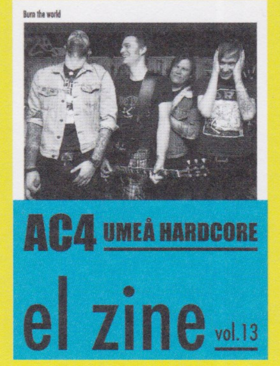


















VOL.0, VOL.1, VOL.2, VOL.3, VOL.13
ARE SOLD OUT! THANKS FOR READING!
FOR PUNKS! BY PUNKS!

editor's notes

皆さん気づかれましたでしょうか?今号は日本のバンドのインタヴュー記事がゼロということに…!狙ったわけではなく偶然なんですが、とにかく翻訳作業が多くて大変でした…。ラティーノ&NYC以外にもWRECKING CREW、1984、SOD、LA METALとアメリカが盛り沢山でしたので、"アメリカ特集!"と銘打とうかとも一瞬思いましたが、流石に上記だけでアメリカを語るのは無茶なのでラティーノ&NYCという形にしてみました。次号では逆に、日本のバンドばかりにするのもいいかもしれません(訳さないで済む!)。この数年来、お若い方をサポートしたいな〜という思いが(ボンヤリと)あるので一度、日本の10〜20代のバンド特集なんてのもやってみたいですね。Don't trust over 30! Take Good Care!!

※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した

EL ZINE vol.17 2015年3月20日発行 E-MAIL unno13@gmail.com

※バック・ナンバーはパンク/ハードコア取扱店 又はhttp://www.juzasha.comにてお求めになれます



EL ZINE VOL.17 600 YEN

the [international] kvlt conspiracy EL ZINE DRILL A HOLE IN YOUR SKULL VOL.17



N

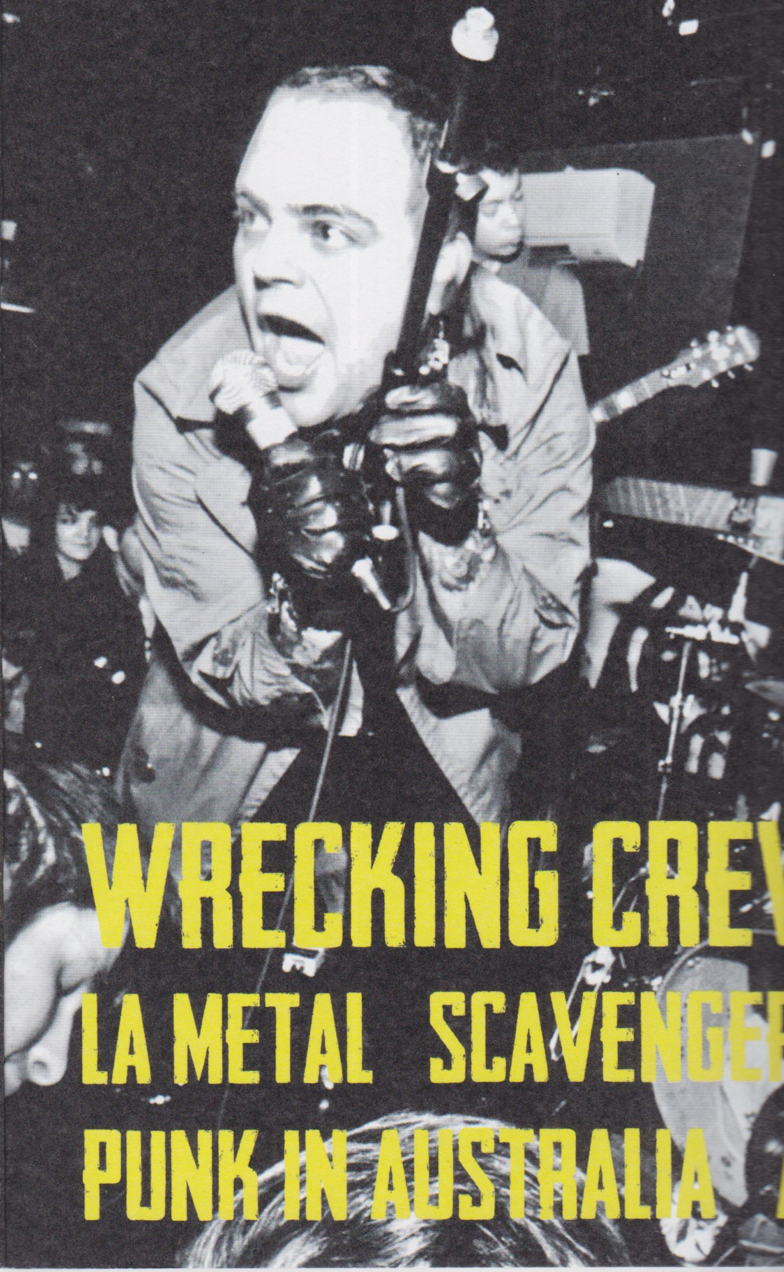
the [international] kvlt conspiracy EL ZINE DRILL A HOLE IN YOUR SKULL VOL.17

EL Z

FEATU

LATINO P

NYC RAW



WRECKING CREW

LA METAL SCAVENGER

PUNK IN AUSTRALIA